

平成 27 年 度

農業研究本部中央農業試験場年報

平成 28 年 10 月

北海道立総合研究機構
農業研究本部 中央農業試験場
(夕張郡長沼町東6線北15号)

平成 27 年 度

農業研究本部中央農業試験場年報

目 次

A 概 要	1
1. 沿 革.....	1
2. 位 置.....	3
3. 土 壌.....	3
4. 面積及び利用区分.....	3
5. 職員の配置.....	3
6. 機 構.....	4
7. 現 在 員.....	5
8. 収入決算額.....	8
9. 支出決算額.....	8
10. 新たに設置した主要施設及び備品.....	9
B 作 況	10
C 試験研究及び地域支援等活動の成果概要	22
D 試験研究及び地域支援等活動の課題名	30
(各部担当課題の項目)	
作物開発部	30
遺伝資源部	35
生産研究部	36
農業環境部	39
病虫部	41
企画調整部地域技術グループ	43
E 普及・参考事項並びに試験研究の成果	46
1. 平成27年普及奨励事項、普及推進事項、指導参考事項、研究参考事項並びに行政参考事項.....	46
2. 論文ならびに資料.....	46
F 研究企画・調整・情報システム・出版・広報	54
1. 研究の企画・調整・評価.....	54
2. 情報システムの活用.....	59
3. 図書・資料.....	59
4. 印刷刊行物.....	59
5. 広報活動.....	60
G 研修及び技術指導	62
1. 研修生の受け入れ.....	62
2. 技術指導.....	63
3. 参 観 人.....	66
4. 職員研修.....	67
5. 海外出張.....	68
6. そ の 他.....	68
H 行 事	69
I 自己点検への対応表	70

A 概 要

1. 沿革

1950 (昭 25)

北海道立農業試験場が誕生した。(11月)

- ・全国農業試験研究機関の整備総合計画に基づき、北海道農業試験場を改組し、農水省北海道農業試験場と北海道立農業試験場が設置された。いずれも、北海道の開拓とともに進められてきた農業試験研究の歴史と成果を引き継ぐものである。
- ・道立農業試験場は、札幌市琴似町に「本場」をおき、渡島、上川、十勝、北見、根室、天北の6支場と原原種農場により構成された。

1952 (昭 27)

- ・宗谷支場、岩宇園芸試験地を設置した。また同年、岩見沢試験地(旧岩見沢水稲試験地)を設置し、1955年に空知支場と改称された。

1962 (昭 37)

- ・江部乙りんご試験圃場(旧空知果樹園芸試験地)が道立農業試験場に移管された。

1964 (昭 39)

中央農業試験場が発足した。(11月)

- ・北海道立農業試験場の拡充強化を図るため組織改正が行われた。
- ・「本場」は、中央農業試験場として9部構成に機構整備された。これにより空知支場は同稲作部となり、江部乙りんご試験地、岩宇園芸試験地を統合した。また、原原種農場は中央農業試験場に附置されることとなった。更に試験場の役割についても整理され、中央農業試験場には、道農政との有機的な連携の保持と農業技術開発の全道的な総括並びに各試験場間の連絡調整業務が盛り込まれた。
- ・同時に各支場は会計部局として独立し、本場・支場の関係が改正された。また、1962年新得・滝川両種畜場が両畜産試験場に改組され、この年主管課が農務部畜産課から同農業改良課に替ることにより、原原種農場も数えて道立農業試験場の10場体制が整った。
- ・一方、農水省北海道農業試験場との分担関係も整理され、それまで国立農業試験場長が道立農業試験場長を兼任していたのが解かれた。

1966 (昭 41)

中央農業試験場が長沼町に移転した。

- ・琴似町に所存する試験圃場周辺の都市化が進み、環境が試験研究に適さなくなった。そのため1964年7月移転先を所在地の長沼町東6線北15号に決定、翌1965年移転工事に着手した。1966年に移転業務が完了し、1967年10月移転整備完了祝賀会が催された。

1968 (昭 43)

技術連絡室を設置した。(4月)

- ・道立農業試験場における試験研究の企画及び連絡調整機能を強化するため、中央農業試験場総務部企画課を改組して技術連絡室を設置した。

1969 (昭 44)

専門技術員を試験場に配置した。(4月)

- ・普及事業と試験研究との連携強化のために、専門技術員が中央・上川・十勝・北見各農業試験場に配置された。以後、道南・根釧・天北農業試験場及び稲作部に逐次配置された。

1971 (昭 46)

岩宇園芸試験場が廃止された。

1975 (昭 50)

環境保全部を設置した。(5月)

- ・前年化学部に新設された環境保全部を改組し、環境保全第一科・同二科をもって環境保全部とした。

1986 (昭 61)

- ・江部乙りんご試験地が廃止された。(3月)

植物遺伝資源センターが設置された。(4月)

- ・原原種農場が植物遺伝資源センターに改組・改称され、従来の原原種生産事業とあわせて、植物遺伝資源に関する研究の中核機関として位置づけられた。
- ・土木研究室を設置した。(4月)

1987 (昭 62)

生物工学部を設置した。(4月)

- ・バイオテクノロジーの進歩により、その先端技術を積極的に取り入れるため、1984年技術連絡室に設置されたバイオテクノロジー研究チームを発展的に改組し、育種開発科、微生物開発科をもって生物工学部とした。
- ・同時にそれまでの化学部は農芸化学部に、環境保全部は環境資源部に、園芸部花きそ菜科を野菜花き第一、第二の2科とし、最近の新しい研究ニーズに応える体制にした。また、技術連絡室は企画情報室に改組し、従来の2係を企画課と情報課に再編した。

1991 (平 3)

道立農業試験場基本計画が策定された。(2月)

- ・この計画は、北海道新長期計画がめざす「国際化時代に生きる力強い農業」の中で示されている「地域農業ガイドポスト」を試験研究のサイドから支えるものとして策定された。
- ・北海道病害虫防除所の設置(中央農業試験場内)により、病虫部発生予察科の業務を移管した。

1992 (平 4)

「基本計画」に基づいた組織改編が行われた。(4月)

- ・当面急がれる園芸研究の強化やクリーン農業などを推進するため、組織改編をした。
- ・研究部門では、化学部門は環境化学部と農産化学部に編成替えを行い、園芸部は果樹科、野菜花き科をそれぞれ第一、二科の4科に、経営部は流通経済科を新設して2科に、また、病虫部は土壤微生物科を新たに加えた3科にいずれも拡充強化された。
- ・農業土木研究室は生産基盤科、農村環境科の2科に拡充し、農業土木部とした。
- ・企画情報室には調整課を新設し、試験研究の総合企画調整機能の強化が図られた。

中央農業技術情報センターを新設した。(4月)

- ・1986年以降5年間をかけて整備してきた北海道農業試験研究情報システム(通称HARIS)の本格的な稼働に伴い、各種情報システムの管理運営主体として設置された。この情報センターは、研究情報班(企画情報室情報課職員)及び普及情報班(情報担当専門技術員)からなる機能的組織として構成された。

1993 (平 5)

仮称「花き・野菜技術センター」の基本設計が完成した。(11月)

- ・花き・野菜に関する試験研究の中核的、先導的役割と成果の効果的な伝達並びに活用を目的に設置されることとなった。滝川畜産試験場の敷地内に建設され、その土地基盤及び施設関係の基本的設計が完成した。

1994 (平 6)

畜産部が廃止された。(4月)

- ・畜産部門の再編により、畜産部畜産科を新得畜産試験場に移管し、部長に代わって研究参事を設置した。

1996 (平 8)

花・野菜技術センターが設置された。(4月)

- ・花・野菜技術センターが設置されたことにより園芸部は果樹部となり、野菜花き第一・二科の廃止により2科体制となる。稲作部の専門技術員は、本場へ集中された。

1998 (平 10)

道立農業試験場新研究基本計画が策定された。(3月)

- ・この計画は、農業技術の開発と普及によって農業・農村の活性化に貢献することを基本理念とし、長期的展望に立った試験研究の基本方向を示し、もって21世紀における北海道農業の発展に資することを目的として策定された。

2000 (平 12)

「新研究基本計画」に基づいた道立農業試験場機構改正が行われた。(4月)

- ・多様化する研究ニーズに対応するため、研究部・科を再編統合した。
- ・研究10部を作物開発部、生産システム部、クリーン農業部、農業環境部、農産工学部の5部に再編した。
- ・研究部門と普及部門の連携強化を図り、地域課題への対応や新技術の普及定着を促進するため、技術普及部を設置した。
- ・企画調整や技術情報発信機能などの強化を図るため、企画情報室と技術普及部とで構成する企画情報技術センターを設置した。

2004 (平 16)

- ・「米政策改革大綱」を踏まえ、研究開発を一元的かつ総合的に進める体制を整備し、地域水田農業の発展を技術的に支援するため、水田農業科を設置した。
- ・病害虫防除業務の一元的な組織管理により、一層効率的な運営を図るため、病害虫防除所と中央農業試験場を統合した。
- ・試験研究の重点化や効率化の一層の推進を図るため、研究基本計画の見直しを専掌する研究参事が企画情報室に配置された。

2006 (平 18)

「新研究基本計画」に基づいた道立農業試験場機構改正が行われた。(4月)

- ・社会情勢の変化に対応するため、道立農試10場体制のうち、天北農試が上川農試天北支場に、植物遺伝資源センターが中央農試遺伝資源部となり、8場+1支場体制にした。
- ・研究部の一部を見直しするとともに、全道対応する環境保全部、基盤研究部、遺伝資源部、地域対応する作物研究部、生産研究部、生産環境部に再編した。

2010 (平 22)

地方独立行政法人北海道立総合研究機構が創設された。(4月)

- ・各分野の道立試が果たしてきた機能の維持及び向上を図り情勢変化に柔軟に対応できる組織へと改革していった

め、22の道立試が単一の地方独立行政法人化し北海道立総合研究機構が創設された。

・独法化に伴い、新たに農業研究本部が創設され、部においても8部1室制から7部制に再編され、科・係体制からグループ制へと移行した。

2. 位置

夕張郡長沼町東6線北15号

北緯43°03′ 東経141°46′ 標高23～24m
長沼町市街より北方約8.5km、JR室蘭本線栗山駅西南約3km 札幌市より約40km

(遺伝資源部)

滝川市南滝の川363番地

北緯43°34′ 東経141°56′ 標高53～54m
JR函館本線滝川駅北東5.5km

岩見沢市上幌向町217番地

北緯43°10′ 東経141°42′ 標高12m
JR函館本線上幌向駅南方300m

3. 土壌

本場は、夕張川流域に分布する平坦な沖積土と馬追山麓端の暖傾斜を呈する洪積土及び扇状土からなっている。台地は樽前山系火山灰が推積している。平坦部の沖積土の表層は腐植の含量が少なく、粘土の強い埴土及び植壤土、一部には砂壤土ないし砂土となる場所も存在する。

遺伝資源部は、第4記層に属する洪積土、表土は埴壤土で粘性に富み、酸性が強い。下層土は重粘土で緻密な構造を有し、酸性が強く、未風化で、気水の透通性は極めて不良である。

生産研究部水田農業グループは、幾春別川に由来する沖積の埴土と低位泥炭土からなり、いずれも強グライを呈する土壌で、潜在地力は極めて高い。

4. 面積及び利用区分

(単位:m²)

区分	総面積	法人有地	水田	畑	果樹園
本場	637,477	636,526	0	390,257	123,942
遺伝資源部	245,764	245,764	21,700	130,592	0
岩見沢試験地	214,044	214,044	176,657	0	0
合計	1,097,285	1,096,334	194,984	524,222	123,942

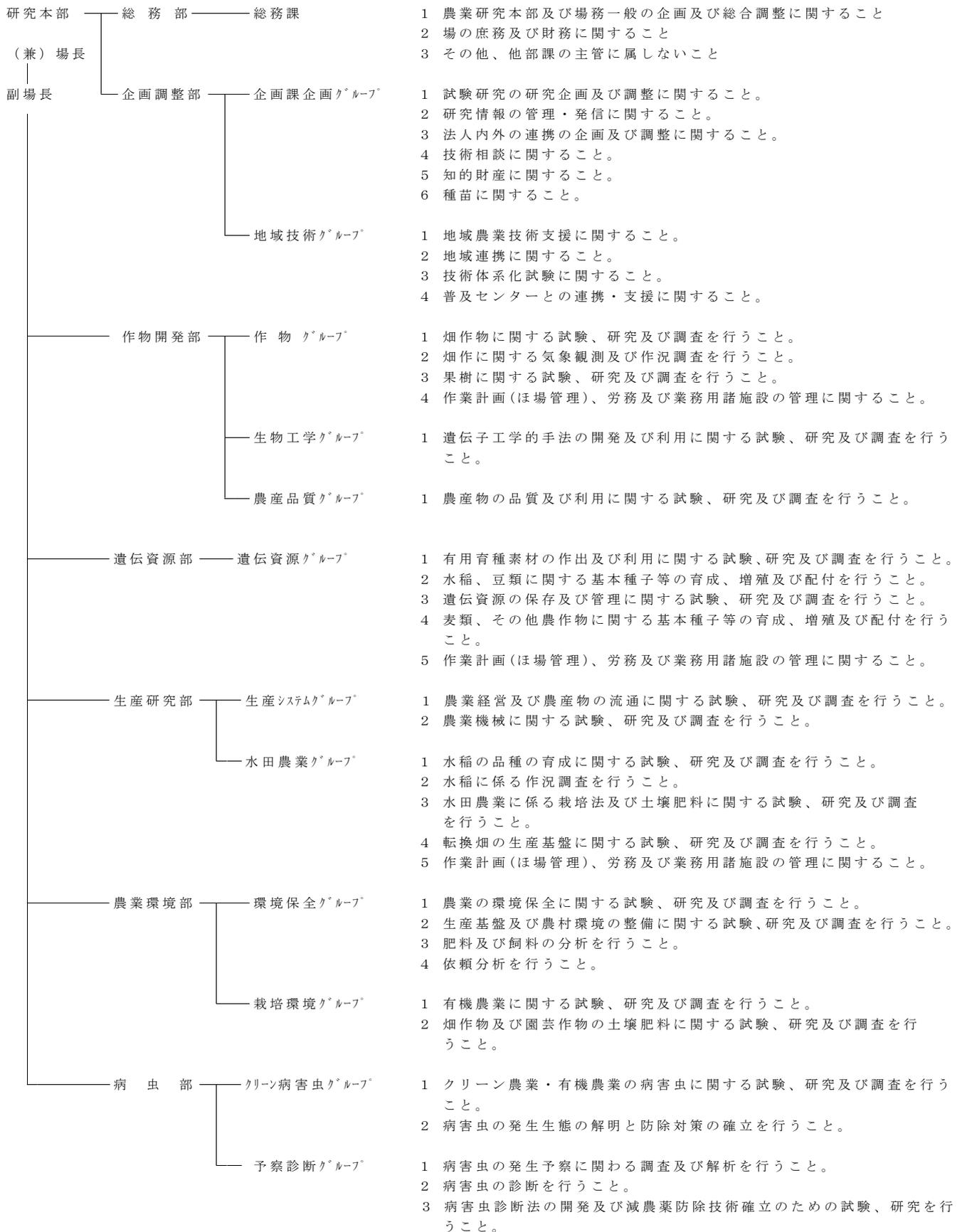
区分	雑種地	原野	建物敷地	防風林	借地
本場	4,865	20,130	97,199	133	951
遺伝資源部	24,040	34,123	35,309	0	0
岩見沢試験地	0	0	37,387	0	0
合計	28,905	54,253	169,895	133	951

5. 職員の配置

平成28年3月31日

区分	研究職*	主任・農技	道派遣	計
	81	9	18	108
うち再雇用者	1	1	0	2

6. 機構



7. 現 在 員

1) 現在員(平成28年3月31日)

職 名	氏 名	職 名	氏 名
農業研究本部長兼場長	志 賀 弘 行	研究主任	佐 藤 三佳子
副場長	三津橋 真 一	研究主任	池 永 充 伸
総務部長兼総務課長	雄 谷 淳 史	指導主任	谷 藤 二三雄
農業調整担当課長	木 村 良	指導主任	森 佐太郎
主査(総務)	井 出 恵 子	主任	山 保 政 貴
主査(調整)	森 谷 登志子	研究主幹 ~生物工学グループ	堀 田 治 邦
主査(管財)	棟 方 寛 司	主査(生物工学)	鈴 木 孝 子
主査(研究調整)	千 葉 義 幸	研究主任	鈴 木 千 賀
主査(整備)	齊 藤 吉 明	研究主任	小 倉 玲 奈
主査(遺伝資源)	加 藤 武 博	研究主任	山 下 陽 子
指導主任	伊 藤 雄 一	研究主幹 ~農産品質グループ	柳 原 哲 司
主任	上 杉 充 浩	主査(農産品質)	小宮山 誠 一
主任	鈴 木 忠 則	研究主任	阿 部 珠 代
主任	樋 郡 和 彦	研究主任	中 道 浩 司
主任	昆 野 淑 子	研究主任	富 沢 ゆい子
主任	山 田 尚 子	遺伝資源部長	白 井 滋 久
調査員	坪 田 繁	研究主幹 ~遺伝資源グループ	荒 木 和 哉
企画調整部長	加 藤 淳	主査(資源管理)	千 田 圭 一
企画課長	梶 山 努	主査(資源利用)	鈴 木 和 織
主査(研究企画)	相 馬 潤	研究主査	平 井 泰
主査(研究評価)	木 村 義 彰	研究主査	吉 村 徹
主査(研究情報)	昆 野 大 次	研究主任	梶 田 路津子
主査(情報調整)	泉 統 仁	専門研究員(再雇用)	梶 野 清 二
主査(研究予算)	長谷山 知 樹	主任	北 和 宏
研究主幹兼主査(地域連携) ~地域技術グループ	玉 掛 秀 人	主任	六 田 靖 男
主査(地域支援)	前 野 眞 司	主任	高 橋 光 司
主査(地域支援)	田 中 一 生	生産研究部長	西 村 直 樹
主査(地域支援)	五十嵐 俊 成	研究主幹 ~生産システムグループ	岡 田 直 樹
作物開発部長	古 原 洋	主査(経営)	平 石 学
研究主幹 ~作物グループ	吉 村 康 弘	主査(機械)	鈴 木 剛
主査(畑作)	藤 田 正 平	研究主査	白 旗 雅 樹
主査(果樹)	内 田 哲 嗣	研究主査	石 井 耕 太
研究主査	木 口 忠 彦	研究主任	吉 田 邦 彦
研究主査	吉 田 昌 幸	研究主任	日 向 貴 久
研究主査	黒 崎 英 樹	研究主任	山 田 洋 文
研究主任	相 馬 ちひろ		

職 名	氏 名	職 名	氏 名
研究主幹 ～水田農業グループ	中 村 隆 一	研究主幹 ～栽培環境グループ	古 館 明 洋
主査（水稻育種）	尾 崎 洋 人	主査（栽培環境）	細 淵 幸 雄
主査（水田環境）	大 橋 優 二	主査（土壌生態）	坂 口 雅 己
研究主任	佐々木 亮	研究主査	鈴 木 慶次郎
研究主任	木 下 雅 文	研究主任	櫻 井 道 彦
研究主任	長 田 亨	研究主任	杉 川 陽 一
研究職員	佐 藤 博 一	病虫部長	清 水 基 滋
研究職員	丸 田 泰 史	研究主幹 ～クリーン病害虫グループ	橋 本 庸 三
主任	石 井 伸 也	主任研究員	柿 崎 昌 志
技師	今 啓 人	主査（クリーン農業）	西 脇 由 恵
主任（再雇用）	梶 山 靖 二	主査（病害虫管理）	小 澤 徹
農業環境部長	長 尾 明 宣	研究主任	野 津 あゆみ
研究主幹 ～環境保全グループ	竹 内 晴 信	研究主任	齊 藤 美 樹
主査（環境保全）	塚 本 康 貴	研究職員	森 万菜実
研究主査	甲 田 裕 幸	研究主幹 ～予察診断グループ	岩 崎 暁 生
研究職員	藤 井 はるか	主査（予察）	小 松 勉
研究職員	板 垣 英 祐	研究主任	武 澤 友 二
研究職員	巽 和 也	研究主任	山 名 利 一
		研究職員	荻 野 瑠 衣

2) 転入者及び採用者

職名	氏名	発令年月日	備考
場長	志賀弘行	H27.4.1	北見農業試験場
総務部主任	山田尚子	〃	北海道農業大学校
企画調整部主査	昆野大次	〃	根釧農業試験場
作物開発部研究主幹	吉村康弘	〃	北見農業試験場
遺産資源部主査	千田圭一	〃	上川農業試験場
生産研究部長	西村直樹	〃	本部連携推進部
生産研究部研究主任	山田洋文	〃	十勝農業試験場
生産研究部主査	大橋優二	〃	上川農業試験場天北支場
生産研究部研究職員	丸田泰史	〃	新規採用
農業環境部長	長尾明宣	〃	花・野菜技術センター
農業環境部主査	細淵幸雄	〃	道南農業試験場
病虫部主査	小澤徹	〃	十勝農業試験場
総務部長兼総務課長	雄谷淳史	H27.6.1	北海道農政部農業経営課
総務部主査	井出恵子	〃	北海道上川総合振興局
総務部主任	上杉充浩	〃	北海道石狩総合振興局
総務部主任	昆野淑子	〃	根釧農業試験場

3) 転出者及び退職者

職名	氏名	発令年月日	備考
企画調整部長	竹中秀行	H27.4.1	北見農業試験場
企画調整部主査	杉本昌仁	〃	根釧農業試験場
企画調整部主査	山崎敬之	〃	本部連携推進部
企画調整部主査	菅原章人	〃	上川農業試験場
作物開発部長	竹内徹	〃	本部研究企画部
遺産資源部	浅山聡	〃	北見農業試験場
生産研究部長	奥村正敏	〃	上川農業試験場天北支場
生産研究部研究職員	濱村寿史	〃	根釧農業試験場
農業環境部研究主幹	日笠裕治	〃	道南農業試験場
病虫部研究主任	東岱孝司	〃	十勝農業試験場
総務部主査	深瀬秀太郎	H27.6.1	北海道空知総合振興局
総務部主任	瀬川琴美	〃	北海道石狩振興局
総務部主事	安部優	〃	北海道空知総合振興局
総務部調査員	神登喜夫	〃	北海道後志総合振興局
総務部長兼総務課長	千崎利彦	H27.5.31	退職
副場長	三津橋真一	H28.3.31	退職
総務部指導主任	坪田繁	〃	退職
作物開発部指導主任	谷藤二三雄	〃	退職
遺産資源部専門研究員	梶野清二	〃	退職 再雇用満了

8. 収入決算額

(単位：円)

科目	当初予算額	最終予算額	決算額	増減
依頼試験手数料	3,222,000	3,222,000	1,222,310	▲ 1,999,690
農産物売払収入	4,321,000	4,321,000	5,771,850	1,450,850
不用品売払収入	424,000	424,000	0	▲ 424,000
法人財産使用料等	3,829,000	3,829,000	939,886	▲ 2,889,114
その他雑収入	0	0	0	0
共同研究費負担金	0	0	0	0
国庫受託研究収入	57,734,000	73,175,000	73,175,000	0
道受託研究収入	17,833,000	19,493,977	19,493,977	0
その他受託研究収入	84,330,000	91,711,890	91,711,890	0
道受託事業収入	0	0	0	0
循環資源利用促進基金収入	0	0	0	0
施設整備費補助金収入	0	19,323,000	19,323,000	0
施設整備費(繰越積立金)収入	0	5,164,677	5,164,677	0
国庫補助金	0	850,048	850,048	0
目的積立金取崩	0	0	0	0
計	171,693,000	221,514,592	217,652,638	▲ 3,861,954

※事業費支弁人件費振替額を含む

9. 支出決算額

(単位：円)

科目	当初予算額	最終予算額	決算額	繰越額	残額
戦略研究費	9,623,000	10,114,000	9,747,288	366,282	430
重点研究費	0	0	0	0	0
職員研究奨励費	1,487,000	1,487,000	1,474,522	0	12,478
経常研究費	38,264,000	38,264,000	35,992,135	0	2,271,865
研究開発推進費	0	2,000,000	1,996,872	0	3,128
依頼試験費	1,471,000	1,592,000	698,266	0	893,734
技術普及指導費	742,000	952,508	909,233	0	43,275
外部資金等確保対策費	0	1,352,720	1,344,100	0	8,620
研究用備品整備費	0	10,019,270	10,019,270	0	0
目的積立金活用事業費	0	0	0	0	0
維持管理経費	137,454,000	146,264,000	136,967,134	0	9,296,866
研究関連維持管理経費	0	0	0	0	0
知的財産経費	521,000	1,071,000	1,017,782	0	53,218
運営経費	34,370,000	39,578,000	37,026,150	0	2,551,850
共同研究費	0	0	0	0	0
国庫受託研究費	56,628,000	71,306,477	71,306,477	0	0
道受託研究費	17,833,000	19,493,977	19,493,977	0	0
その他受託研究費(公募型)	18,019,000	22,015,183	20,715,183	1,300,000	0
その他受託研究費(受託)	60,258,000	63,391,290	63,391,290	0	0
道受託事業費	0	0	0	0	0
循環資源利用促進基金事業費	0	0	0	0	0
施設整備費補助金	0	19,323,000	19,323,000	0	0
施設整備費(繰越積立金)	0	5,164,677	5,164,677	0	0
国庫補助金	0	850,048	850,048	0	0
計	376,670,000	454,239,150	437,437,404	1,666,282	15,135,464

※事業費支弁人件費振替額を除く

10. 新たに設置した主要施設及び備品

1) 施設

該当なし

2) 備品(1件100万円以上)

(単位：円)

名 称	規 格	数量	金額	配置
農業研究ニーズ 情報検索システム	FileMaker Sever14	1	1,758,348	地 域 技 術 G
純水製造装置 オートスチル	ヤマト科学	1	1,266,840	環 境 保 全 G
トラクター	キセキ NT603FFUGCY04T	1	4,320,000	作 物 G
小型温風機	ネボン (株) KA-405T、KA-405TE	3	1,807,999	遺 伝 資 源 G

B 作 況

I 畑 作 物

1. 気象概況（作物開発部 長沼町）

平成26年9月から平成27年10月までの概況は次のとおりである。

平成26年

9月：平均気温は16.0℃で平年より1.5℃低く、降水量は平年の92%、日照時間は平年の130%であった。

10月：平均気温は9.1℃で平年より1.4℃低く、降水量は平年の100%、日照時間は平年の99%であった。

11月：平均気温は4.1℃で平年より0.4℃高く、降水量は平年の49%、日照時間は平年の121%であった。

12月：平均気温は-4.1℃で平年より0.6℃低く、降水量は平年の118%、日照時間は平年の91%であった。

平成27年

1月：平均気温は-5.0℃で平年より2.2℃高く、降水量は平年の88%、日照時間は平年の98%であった。

2月：平均気温は-3.1℃で平年より3.0℃高く、降水量は平年の70%、日照時間は平年の110%であった。

3月：平均気温は2.0℃で平年より3.2℃高く、降水量は平年の169%、日照時間は平年の102%であった。

4月：平均気温は6.8℃で平年より1.6℃高く、降水量は平年の117%、日照時間は平年の120%であった。

5月：平均気温は12.2℃で平年より1.1℃高く、降水量は平年の108%、日照時間は平年の140%であった。

6月：平均気温は15.3℃で平年より1.1℃低く、降水量は平年の180%、日照時間は平年の92%であった。

7月：平均気温は19.8℃で平年と同じであり、降水量は平年の71%、日照時間は平年の124%であった。

8月：平均気温は20.7℃で平年より0.9℃低く、降水量は平年の42%、日照時間は平年の102%であった。

9月：平均気温は16.4℃で平年より1.0℃低く、降水量は平年の103%、日照時間は平年の96%であった。

10月：平均気温は8.6℃で平年より1.8℃低く、降水量は平年の74%、日照時間は平年の107%であった。

本年の根雪終日は3月24日で平年より13日早く、晩霜は4月13日で平年より11日早かった。

以上、農耕期間の4月から10月についてまとめると、気温は4月と5月が高く、6月、9月および10月が低く経過した。降水量は4月と6月が多く、7月、8月および10月は少なく経過した。日照時間は4月、5月および7月が多く経過した。5月から9月までの積算値は、平年と比べ、平均気温は58℃低く、降水量は平年の92%、日照時間が111%であった。

2. 気象表

気象表

道総研中央農試(マメダス中央農試本場)

年月	旬	平均気温(°C)			最高気温(°C)			最低気温(°C)			降水量(mm)			降水日数(日)			日照時間(hr)		
		本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較
平成26年 9月	上旬	19.1	19.8	△0.7	24.6	24.8	△0.2	14.7	15.6	△0.9	23.5	74.6	△51.1	4.0	2.4	1.6	64.8	48.7	16.1
	中旬	14.6	18.1	△3.5	20.4	23.6	△3.2	10.4	13.2	△2.8	121.5	51.0	70.5	6.0	2.6	3.4	63.1	53.0	10.1
	下旬	14.3	14.5	△0.2	21.2	20.1	1.1	7.9	9.3	△1.4	0.5	32.7	△32.2	1.0	2.7	△1.7	71.8	52.1	19.7
10月	上旬	10.4	12.7	△2.3	15.7	18.4	△2.7	5.9	7.7	△1.8	40.5	30.6	9.9	4.0	2.7	1.3	43.6	45.3	△1.7
	中旬	9.4	10.5	△1.1	14.5	16.2	△1.7	4.1	5.2	△1.1	26.5	26.7	△0.2	4.0	3.1	0.9	47.6	49.0	△1.4
	下旬	7.7	8.2	△0.5	13.4	13.5	△0.1	2.1	3.4	△1.3	12.0	21.8	△9.8	4.0	3.7	0.3	44.1	41.8	2.3
11月	上旬	7.1	7.2	△0.1	12.8	12.1	0.7	1.8	2.6	△0.8	31.5	42.7	△11.2	8.0	3.8	4.2	42.1	34.0	8.1
	中旬	2.2	3.2	△1.0	7.2	7.6	△0.4	-1.6	-0.6	△1.0	12.5	31.6	△19.1	4.0	4.5	△0.5	33.4	30.0	3.4
	下旬	2.9	0.9	2.0	8.2	5.0	3.2	-2.3	-3.1	0.8	5.0	25.8	△20.8	3.0	4.4	△1.4	36.5	27.7	8.8
12月	上旬	-3.1	-1.0	△2.1	1.5	2.9	△1.4	-7.2	-5.3	△1.9	32.0	27.8	4.2	6.0	4.0	2.0	27.4	25.7	1.7
	中旬	-4.6	-4.0	△0.6	0.8	0.1	0.7	-11.0	-8.7	△2.3	38.5	24.1	14.4	8.0	5.2	2.8	25.1	25.0	0.1
	下旬	-4.4	-5.3	0.9	0.0	-0.9	0.9	-9.5	-10.6	1.1	19.5	24.1	△4.6	8.0	4.9	3.1	18.4	27.1	△8.7
平成27年 1月	上旬	-5.2	-6.2	1.0	-0.3	-1.5	1.2	-10.3	-11.9	1.6	34.5	23.2	11.3	8.0	5.0	3.0	26.7	27.9	△1.2
	中旬	-5.1	-8.5	3.4	-0.6	-3.2	2.6	-9.6	-14.7	5.1	17.5	33.0	△15.5	5.0	4.3	0.7	24.0	28.2	△4.2
	下旬	-4.8	-7.1	2.3	0.7	-1.6	2.3	-11.5	-13.5	2.0	15.5	20.6	△5.1	3.0	4.4	△1.4	42.9	39.1	3.8
2月	上旬	-5.9	-6.9	1.0	-0.1	-1.4	1.3	-11.3	-13.3	2.0	2.0	13.2	△11.2	1.0	4.5	△3.5	64.2	39.8	24.4
	中旬	-2.6	-6.3	3.7	2.2	-0.7	2.9	-8.6	-12.9	4.3	4.0	20.9	△16.9	3.0	5.0	△2.0	33.9	37.5	△3.6
	下旬	-0.4	-4.9	4.5	4.1	1.0	3.1	-4.8	-12.0	7.2	26.0	11.4	14.6	6.0	3.5	2.5	32.4	41.2	△8.8
3月	上旬	0.4	-3.3	3.7	4.8	2.4	2.4	-4.2	-9.2	5.0	68.0	16.0	52.0	6.0	3.8	2.2	34.1	51.0	△16.9
	中旬	1.1	-0.9	2.0	5.6	4.0	1.6	-2.8	-6.2	3.4	5.0	17.2	△12.2	2.0	4.4	△2.4	40.8	38.8	2.0
	下旬	4.2	0.4	3.8	9.6	5.2	4.4	-0.7	-4.5	3.8	4.0	12.6	△8.6	3.0	3.7	△0.7	76.6	58.7	17.9
4月	上旬	4.0	2.9	1.1	8.6	7.9	0.7	-1.3	-2.0	0.7	16.5	14.3	2.2	3.0	3.1	△0.1	64.3	50.5	13.8
	中旬	6.0	5.0	1.0	10.2	10.6	△0.4	1.7	0.0	1.7	42.0	16.0	26.0	4.0	2.1	1.9	32.3	53.0	△20.7
	下旬	10.4	7.8	2.6	17.3	13.7	3.6	3.6	2.5	1.1	4.5	23.4	△18.9	2.0	2.8	△0.8	86.6	49.4	37.2
5月	上旬	11.5	9.9	1.6	18.2	15.5	2.7	4.6	4.8	△0.2	8.0	28.5	△20.5	3.0	3.2	△0.2	83.2	52.7	30.5
	中旬	10.6	10.5	0.1	15.9	16.3	△0.4	5.3	5.2	0.1	48.5	24.6	23.9	7.0	3.0	4.0	54.3	55.4	△1.1
	下旬	14.1	12.8	1.3	19.7	18.5	1.2	8.4	8.0	0.4	19.0	17.0	2.0	1.0	2.3	△1.3	96.9	59.2	37.7
6月	上旬	13.7	15.2	△1.5	18.3	21.2	△2.9	9.8	10.5	△0.7	101.0	11.5	89.5	6.0	2.0	4.0	44.6	54.7	△10.1
	中旬	16.5	16.0	0.5	21.9	21.0	0.9	12.4	12.2	0.2	2.0	39.8	△37.8	1.0	2.5	△1.5	76.4	39.1	37.3
	下旬	15.9	18.1	△2.2	20.0	23.7	△3.7	13.1	13.7	△0.6	28.0	21.4	6.6	4.0	1.4	2.6	19.2	58.0	△38.8
7月	上旬	16.4	19.2	△2.8	21.8	24.4	△2.6	11.4	15.5	△4.1	22.0	28.7	△6.7	3.0	1.9	1.1	74.3	41.9	32.4
	中旬	19.9	19.5	0.4	25.3	24.2	1.1	14.9	15.8	△0.9	20.5	34.8	△14.3	3.0	1.5	1.5	67.6	45.3	22.3
	下旬	22.8	20.5	2.3	26.6	25.5	1.1	20.3	16.7	3.6	28.5	36.5	△8.0	4.0	2.1	1.9	27.1	49.3	△22.2
8月	上旬	22.4	22.3	0.1	26.8	27.4	△0.6	18.7	18.6	0.1	21.5	37.0	△15.5	3.0	2.7	0.3	45.1	50.7	△5.6
	中旬	20.9	22.1	△1.2	25.4	26.9	△1.5	17.6	18.5	△0.9	38.5	54.0	△15.5	6.0	2.4	3.6	55.0	44.1	10.9
	下旬	18.9	20.6	△1.7	23.9	25.7	△1.8	14.7	16.4	△1.7	0.0	52.2	△52.2	0.0	2.8	△2.8	54.7	57.1	△2.4
9月	上旬	18.0	19.9	△1.9	23.0	24.9	△1.9	13.5	15.7	△2.2	71.5	73.8	△2.3	4.0	2.4	1.6	50.5	49.6	0.9
	中旬	16.2	17.9	△1.7	21.1	23.4	△2.3	12.1	13.2	△1.1	40.0	58.0	△18.0	7.0	2.8	4.2	49.3	54.2	△4.9
	下旬	15.0	14.4	0.6	20.3	20.2	0.1	10.9	9.0	1.9	54.5	29.3	25.2	4.0	2.3	1.7	52.9	55.5	△2.6
10月	上旬	11.3	12.4	△1.1	16.2	18.1	△1.9	6.2	7.5	△1.3	22.5	34.0	△11.5	5.0	2.9	2.1	55.0	45.1	9.9
	中旬	8.9	10.4	△1.5	14.8	15.9	△1.1	3.7	5.1	△1.4	20.0	28.9	△8.9	5.0	3.3	1.7	50.4	47.9	2.5
	下旬	5.9	8.3	△2.4	10.6	13.6	△3.0	1.1	3.4	△2.3	18.5	19.7	△1.2	5.0	3.3	1.7	39.9	43.0	△3.1
11月	上旬	5.8	7.0	△1.2	10.6	12.0	△1.4	0.5	2.3	△1.8	20.0	43.9	△23.9	2.0	4.0	△2.0	39.7	34.1	5.6
	中旬	4.7	2.9	1.8	9.1	7.3	1.8	0.6	-1.0	1.6	17.0	29.7	△12.7	2.0	4.3	△2.3	39.3	30.3	9.0

注1) 気象データはマメダス中央農試本場。欠測値および明らかな異常値はアメダス長沼で補正。

注2) 平年値は過去10年間の平均値。

注3) 最高、最低、平均気温は期間内の平均値、降水量、降水日数、日照時間は期間内の積算値。

注4) 降水日数は、24時間降水量が0.5mm以上をカウント

注5) △は減を示す。

3. 季節表

年次	初霜* (年.月.日)	根雪始* (年.月.日)	融雪剤根雪終 (年.月.日)	通常の根雪終 (年.月.日)	積雪期間 (日)	降雪終 (年.月.日)	耕鋤始 (年.月.日)	晩霜 (年.月.日)	初霜 (年.月.日)	無霜期間 (日)	降雪始 (年.月.日)
本年	H26.10.19	H26.12.7	-	H27.3.24	108	H27.4.8	H27.4.9	H27.4.13	H27.10.16	185	H27.10.25
平年	10.23	12.7	4.2	4.6	121	4.21	4.16	4.24	10.23	182	11.5
比較	△ 4	0	-	△ 13	△ 13	△ 13	△ 7	△ 11	△ 7	3	△ 11

注1) 平年値は中央農試における平成17年～26年の10年間の平均値を用いた。ただし、「*」は平成16～25年の平均値。

注2) 積雪期間の平年値にはうるう年を含むため、根雪始・終の差と一致しない。

注3) 本年は融雪が早く、融雪剤を使用しなかったため、「融雪剤根雪終」は調査していない。

注4) 晩霜は現在までの暫定値である。

4. 農耕期間の積算値

項目		平均気温 (°C)	最高気温 (°C)	最低気温 (°C)	日照時間 (hr)	降水量 (mm)
4～10月	本年	3,051	4,132	2,070	1,180	628
	平年	3,112	4,255	2,145	1,056	683
	比較	△ 61	△ 123	△ 75	124	△ 55
5～9月	本年	2,585	3,351	1,921	851	504
	平年	2,643	3,457	1,980	767	547
	比較	△ 58	△ 106	△ 59	84	△ 43

5. 耕種概要

平成13年度より、すべての作物で土壌物理性・排水性が改良された基盤整備後の圃場を使用している。

	一区面積 (㎡)	反復	前作物	畦幅 (cm)	株間 (cm)	一株本数	播種粒数 (粒/㎡)	株数 (株/10a)
秋まき小麦	9.6	4	ひまわり	20	条播	—	255	—
春まき小麦	7.2	4	ひまわり	30	条播	—	340	—
大豆	8.4	3	デントコーン	60	20	2	—	8,333
小豆	8.4	3	えん麦	60	20	2	—	8,333
ばれいしょ	10.8	3	デントコーン	75	30	—	—	4,444

	10a当たり施肥量(kg)				
	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	MgO	堆肥
秋まき小麦	4.0+6.0	12.5	5.0	—	—
春まき小麦	10.0	18.0	12.0	5.0	—
大豆	1.5	11.0	7.5	3.5	—
小豆	4.0	19.2	9.2	2.4	—
ばれいしょ	10.4	16.4	13.6	—	—

6. 作 況

(1) 秋まき小麦(平成26年播種)

作況：平年並

事由：播種期は平年より4日遅かったが出芽は良好で、出芽期は平年より3日遅い9月29日であった。10月上旬以降、低温に推移したため越冬前の草丈は平年を下回ったが茎数は平年並であった。根雪終(融雪剤無散布)は平年より13日早い3月24日で、積雪期間は平年より13日短い108日であった。雪腐病による冬損程度は小さく、越

冬後の茎数は平年を上回った。その後、高温で推移したため出穂期は平年より7日早い5月30日であったが、6月上旬以降、低温で推移したため生育が停滞し、開花までの時間を要した。成熟期は平年より3日早い7月15日で、登熟期間は平年より4日長くなった。成熟期における稈長、穂長および穂数は平年並で、登熟期間が長くなったため千粒重は平年を上回ったが、子実重と容積重は平年並であった。品質は平年を上回る1等であった。

以上により、本年の作況は平年並である。

品 種 名		きたほなみ		
		本年	平年	比較
項目 \ 年次				
播種期	(H26.月.日)	9.22	9.18	4
出芽期	(H26.月.日)	9.29	9.26	3
出穂期	(H27.月.日)	5.30	6.6	△ 7
成熟期	(H27.月.日)	7.15	7.18	△ 3
冬損程度	(0:無～5:甚)	0.3	1.1	△ 0.8
草 丈 (cm)	H26.10.20	16.2	18.2	△ 2.0
	H27.5.20	52.9	44.3	8.6
	H27.6.20	94.0	97.8	△ 3.8
茎 数 (本/m ²)	H26.10.20	573	590	△ 17
	越冬前(11月)	1560	1179	381
	越冬後(3月)	2090	1684	406
	H27.5.20	1191	1275	△ 84
	H27.6.20	773	735	38
成熟期に おける	稈長 (cm)	85.5	88.6	△ 3.1
	穂長 (cm)	8.5	8.7	△ 0.2
	穂数 (本/m ²)	674	680	△ 6
倒伏程度	(0:無～5:甚)	0.0	0.4	△ 0.4
子実重	(kg/10a)	710	727	△ 17
容積重	(g/l)	811	810	1
千粒重	(g)	41.6	38.4	3.2
品質	(等級)	1等	2等	-
子実重平年対比 (%)		98	100	△ 2

注1) 平年値:前7か年中、平成25年(最凶)、平成21年(最豊)を除く5か年平均(収穫年度)

注2) △は平年より早、短、少を表す(以下同じ)。

注3) 倒伏程度:成熟期における倒伏程度。

注4) 容積重はブラウエル穀粒計により測定した値。

(2) 春まき小麦 作況：やや良

事由：根雪終（融雪剤無散布）は、平年より13日早い3月24日であり、播種期は平年より4日早い4月13日であった。5月下旬まで気温が平年並から高く推移したため、出芽期は平年より5日早く、5月20日時点の茎数は平年を上回った。6月以降は気温が平年並から低く推移したが、生育は平年より早く進み、出穂期が平年より3日早く、分けつの無効化も早かったため茎数は平年より少なく推移した。登熟期間が平年よりやや長くなり、成熟期はほ

ぼ平年並となった。倒伏は認められなかった。成熟期の稈長は平年よりやや長く、穂長がやや短く、穂数は平年よりやや少なかった。子実重は「春よ恋」が平年比103%、「はるきりり」は平年比116%であった。千粒重が平年より重く、リットル重は平年よりやや重かった。子実調製後の検査等級は両品種とも1等であった。

以上により、本年の作況はやや良である。

品種名 項目 \ 年次		春よ恋			はるきりり		
		本年	平年	比較	本年	平年	比較
播種期	(月.日)	4.13	4.17	△ 4	4.13	4.17	△ 4
出芽期	(月.日)	4.26	5.01	△ 5	4.27	5.02	△ 5
出穂期	(月.日)	6.15	6.18	△ 3	6.13	6.16	△ 3
成熟期	(月.日)	7.28	7.29	△ 1	7.31	7.31	0
草丈	5月20日	25.5	19.6	5.9	28.2	22.2	6.0
(cm)	6月20日	94	81	13	98	80	18
茎数	5月20日	723	595	128	691	549	142
(本/m ²)	6月20日	568	760	△ 192	537	731	△ 194
7月20日	稈長 (cm)	95	92	3	95	90	5
または	穂長 (cm)	8.0	8.5	△ 0.5	7.4	7.7	△ 0.3
成熟期	の 穂数 (本/m ²)	469	492	△ 23	463	485	△ 22
子実重	(kg/10a)	468	456	12	523	449	74
千粒重	(g)	41.0	38.8	2.2	46.5	42.1	4.4
リットル重	(g)	819	796	23	812	799	13
品質	(等級)	1等	2等	—	1等	2等	—
子実重平年対比	(%)	103	100	3	116	100	16

注) 平年値は前7カ年中、平成23年(最凶)、平成24年(最豊)を除く5カ年平均。

リットル重は1リットル升による測定。

(3) 大豆 作況：良

事由：播種期は平年より1日遅く、出芽期は平年より1～2日遅かった。6月上旬の降水量が極めて多く、6月上旬と下旬、7月上旬の気温が低かったため、生育は停滞し、主茎長は平年より短く、主茎節数が平年よりやや少なく推移した。開花期は1～3日遅かった。開花期前後の7月中旬～7月下旬の気温が平年並からやや高かったため、着莢数は多く推移した。成熟期は、「トヨムスメ」が平

年より6日遅く、「スズマル」は2日早かった。百粒重は両品種共に平年よりやや軽かったが、「トヨムスメ」は、一莢内粒数と着莢数が平年より多かったことにより、子実重は431kg/10aで平年対比111%、「スズマル」は、着莢数が多かったことにより、子実重は396kg/10aで平年対比116%であった。品質は、平年並であった。

以上により、本年の作況は良である。

品種名		トヨムスメ			スズマル		
		本年	平年	比較	本年	平年	比較
項目	年次						
播種期	(月.日)	5.22	5.21	1	5.22	5.21	1
出芽期	(月.日)	6.3	6.1	2	6.2	6.1	1
開花期	(月.日)	7.17	7.16	1	7.26	7.23	3
成熟期	(月.日)	10.04	9.28	6	9.28	9.30	△ 2
主茎長 (cm)	6月20日	7.7	11.7	△ 4.0	6.1	8.8	△ 2.7
	7月20日	32.7	49.8	△ 17.1	24.0	39.9	△ 15.9
	8月20日	43.4	57.9	△ 14.5	48.9	67.3	△ 18.4
	9月20日	42.3	58.0	△ 15.7	49.2	67.7	△ 18.5
	成熟期	42.3	57.1	△ 14.8	49.2	65.2	△ 16.0
主茎節数 (節)	6月20日	2.6	3.2	△ 0.6	2.6	3.5	△ 0.9
	7月20日	9.2	9.7	△ 0.5	10.2	11.3	△ 1.1
	8月20日	9.9	10.1	△ 0.2	13.0	14.3	△ 1.3
	9月20日	9.9	10.1	△ 0.2	13.1	14.1	△ 1.0
	成熟期	9.9	10.2	△ 0.3	13.1	14.0	△ 0.9
分枝数 (本/株)	7月20日	5.6	6.3	△ 0.7	7.1	8.1	△ 1.0
	8月20日	6.8	6.8	0.0	10.5	11.3	△ 0.8
	9月20日	6.6	6.7	△ 0.1	10.1	10.7	△ 0.6
	成熟期	6.6	6.3	0.3	10.1	10.1	0.0
着莢数 (莢/株)	8月20日	76.2	73.6	2.6	171.3	147.4	24.0
	9月20日	72.9	67.5	5.4	150.8	128.4	22.4
	成熟期	72.9	66.7	6.2	150.8	123.3	27.5
一莢内粒数		2.06	1.84	0.22	2.46	2.46	0.00
子実重 (kg/10a)		431	390	41	396	347	49
百粒重 (g)		36.3	39.5	△ 3.2	14.4	15.0	△ 0.6
層粒率 (%)		0.5	2.0	△ 1.5	0.7	1.7	△ 1.0
品質 (等級)		3上	3中	-	2上	2中	-
子実重平年対比 (%)		111	100	11	116	100	16

注) 平年値は前7カ年中、平成21年(最凶)、26年(最豊)を除く5カ年平均。

(4) 小豆 作況：良

事由：播種期は平年より1日遅い5月26日であり、6月上旬が低温に推移したことと、6月3日の豪雨により地表面がクラスト化したため出芽期は平年より3日遅い6月15日であった。6月下旬から7月上旬にかけて平均気温が低く推移したため、開花期は平年より8日遅い7月30日であり、8月中旬以降も平均気温が平年より低く推移したため成熟期は平年より12日遅い9月16日であった。成熟期にお

ける主茎長は平年より長く、主茎節数はやや多く、分枝数は多かった。着莢数は平年より多く、一莢内粒数も多く、子実重は平年比134%と多収であった。百粒重は平年よりやや重く、倒伏が大きかったため屑粒率はやや高かったが、検査等級は平年並であった。

以上により、本年の作況は良である。

品種名		エリモショウズ		
項目	年次	本年	平年	比較
播種期	(月.日)	5.26	5.25	1
出芽期	(月.日)	6.15	6.12	3
開花期	(月.日)	7.30	7.22	8
成熟期	(月.日)	9.16	9.04	12
主茎長 (cm)	6月20日	2.8	3.4	△ 0.6
	7月20日	18.3	24.1	△ 5.8
	8月20日	83.3	60.4	22.9
	成熟期	81.8	60.6	21.2
主茎節数 (節)	6月20日	1.1	1.4	△ 0.3
	7月20日	9.4	9.4	0.0
	8月20日	15.2	13.7	1.5
	成熟期	14.4	13.7	0.7
分枝数 (本/株)	7月20日	4.6	3.6	1.0
	8月20日	5.3	3.8	1.5
	成熟期	5.1	3.8	1.3
着莢数 (莢/株)	8月20日	79.5	55.1	24.4
	成熟期	62.3	52.5	9.8
一莢内粒数		6.35	5.77	0.58
子実重	(kg/10a)	388	290	98
百粒重	(g)	13.0	12.4	0.6
屑粒率	(%)	4.1	3.1	1.0
品質	(等級)	3下	3下	—
子実重平年対比	(%)	134	100	34

注) 平年値は前7カ年中、平成20年(最豊)、平成25年(最凶)を除く5カ年平均。

(5) ばれいしょ 作況：やや不良

事由：本年の根雪終は平年より13日早い3月24日（融雪剤無散布）で、植付期はほぼ平年並の4月27日であった。植付後、気温は高く推移し、萌芽期は平年より1日早い5月21日であった。開花始は平年より1日早く、6月下旬から7月上旬にかけて平均気温が低く推移したため茎数は平年並であったが、茎長は短かった。7月中旬より茎葉

の黄化が始まり、枯凋期は平年より5日早い8月15日であった。株あたりの上いも数は平年より多かったが、塊茎肥大期間が短かったため上いも平均一個重は軽かった。上いも重は平年並であったが、中以上いも重は平年の89%と低収であった。でん粉価は平年よりやや低かった。以上により、本年の作況はやや不良である。

品種名		男爵薯		
項目	年次	本年	平年	比較
植付期	(月.日)	4.27	4.28	△ 1
萌芽期	(月.日)	5.21	5.22	△ 1
開花始	(月.日)	6.20	6.21	△ 1
枯凋期	(月.日)	8.15	8.20	△ 5
茎長	6月20日	40	35	5
(cm)	7月20日	41	47	△ 6
茎数	6月20日	4.3	4.9	△ 0.6
(本/株)	7月20日	4.7	4.5	0.2
8月20日における				
上いも数	(個/株)	-	11.5	-
上いも平均一個重(g)		-	92	-
上いも重	(kg/10a)	-	4635	-
でん粉価	(%)	-	15.6	-
枯凋期における				
上いも数	(個/株)	13.9	11.8	2.1
上いも平均一個重(g)		75	91	△ 16
上いも重	(kg/10a)	4610	4711	△ 101
中以上いも重(kg/10a)		3546	3995	△ 449
でん粉価	(%)	14.3	15.5	△ 1.2
上いも重平年対比	(%)	98	100	△ 2
中以上いも重	" (%)	89	100	△ 11
でん粉価	" (%)	92	100	△ 8

注) 平年値は前7か年中、平成21年(最凶)、22年(最豊)を除く5か年平均。「上いも」は20g/個以上、「中以上いも」は60g/個以上。本年は枯凋期が8月20日以前だったため、8月20日の調査は省略した。

(6) 中央農試作況報告について

平成13年度より、すべての作物で土壌物理性・排水性が改良された基盤整備後の圃場を使用している。当報告は、中央農業試験場のほ場において行った生育調査について、調査時点における値を中央農業試験場の平年値と比較したものであり、当該管内の作況を代表するものではありません。

Ⅱ 水 稲

1. 気象概況

本年の根雪終日は3月29日で平年より12日早く、晩霜は4月13日で平年より24日早かった。

4月：平均気温は7.4℃で平年より1.9℃高く、降水量は平年の125%、日照時間は平年の115%であった。

5月：平均気温は12.9℃で平年より1.4℃高く、降水量は平年の91%、日照時間は平年の123%であった。

6月：平均気温は16.0℃で平年より0.9℃低く、降水量は平年の226%、日照時間は平年の77%であった。

7月：平均気温は20.5℃で平年より0.2℃高く、降水量は平年の117%、日照時間は平年の112%であった。

8月：平均気温は21.5℃で平年より0.7℃低く、降水量は平年の67%、日照時間は平年の92%であった。

9月：平均気温は17.1℃で平年より0.8℃低く、降水量は平年の125%、日照時間は平年の86%であった。

10月：平均気温は9.6℃で平年より1.5℃低く、降水量は平年の113%、日照時間は平年の97%であった。

本年の降雪初日は11月22日で平年より12日遅かった。

以上、農耕期間の5月から9月についてまとめると、気温は、5月上旬、7月中下旬が平年より高く、6月上旬、7月上旬、8月中下旬、9月上中旬が平年より低かった。降水量は、6月、7月、9月が平年より平年より多く、8月が平年より少なかった。日照時間は5月、7月が平年より多く、6月、9月が平年より少なかった。

2. 当場作況：良

事由：根雪終日は平年より12日早く、耕鋤始は平年並の5月7日に行った。

播種は平年より2日早い4月16日に行った。4月4半旬は寡照で最高気温がやや低く、出芽始までに日数を要した。出芽後は平年より高温多照に経過し、苗の生育は遅れを取り戻した。苗は、葉数は平年並からやや少なく、草丈は平年並からやや低く、乾物重および充実度は優った。

移植は平年より2日早い5月19日に行った。5月下旬は高温多照に経過したが、風の強い日が多く、活着までの日数は平年並であった。6月上旬は低温寡照に経過したが、6月中旬は多照に経過し、初期分けつの発生は平年並であった。幼穂形成期は平年並であったが、7月上旬は低温に推移し、出穂期は平年より1日から2日遅かった。

8月中旬から9月中旬は低温に経過したが、登熟は平

年並に進み、登熟日数は平年並から1日長かった。成熟期は平年より1日から3日遅かった。成熟期における穂数は「きらら397」、「ななつぼし」がそれぞれ平年比100、105%、一穂粒数はそれぞれ平年比97、90%であった。㎡当たり粒数はそれぞれ平年比97、94%であり、稔実歩合はそれぞれ平年比+3.2、+3.8ポイント、登熟歩合はそれぞれ平年比+7.8、+10.5ポイントであった。そのため、㎡当たり登熟粒数は、いずれも平年比107%となった。

粗玄米重は「きらら397」、「ななつぼし」がそれぞれ65.9kg/a、67.6kg/aで、平年対比でそれぞれ105%、106%と平年を上回った。屑米歩合はそれぞれ+0.1、-1.4ポイントであった。千粒重はそれぞれ平年比100、98%と平年並からやや軽かった。その結果、精玄米重は「きらら397」、「ななつぼし」がそれぞれ61.6kg/a、64.1kg/aで、平年比105%、108%と平年を上回った。検査等級は「きらら397」が2等上、「ななつぼし」が1等下と平年並からやや下回った。落等の要因は主に茶米の混入であった。

以上のことから、本年の作況は、良である。

作況指数	～90	91～94	95～98	99～101	102～105	106～
作柄	著しい不良	不良	やや不良	平年並	やや良	良

注) 作況指数(収量平年比)と作柄の判定基準 (農林水産省の統計基準による)

気象表

月旬	平均気温(°C)			最高気温(°C)			最低気温(°C)			降水量(mm)			日照時間(h)		
	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較
4月上旬	4.2	3.3	0.9	9.0	7.6	1.4	-0.3	-1.0	0.7	24.0	17.0	7.0	61.9	54.9	7.0
中旬	6.4	5.2	1.2	11.0	10.3	0.7	2.0	0.7	1.3	46.0	17.1	28.9	41.2	59.3	△ 18.1
下旬	11.6	8.0	3.6	18.3	13.6	4.7	5.6	3.1	2.5	4.5	25.6	△ 21.1	92.9	55.6	37.3
4月平均・積算	7.4	5.5	1.9	12.8	10.5	2.3	2.4	0.9	1.5	74.5	59.7	14.8	196.0	169.8	26.2
5月上旬	12.4	10.2	2.2	18.9	15.6	3.3	6.7	5.5	1.2	4.5	27.5	△ 23.0	77.0	58.2	18.8
中旬	11.3	10.9	0.4	16.8	16.6	0.2	6.4	6.0	0.4	51.5	22.8	28.7	53.7	60.9	△ 7.2
下旬	15.1	13.3	1.8	20.8	19.0	1.8	9.3	8.5	0.8	8.5	20.8	△ 12.3	102.2	69.8	32.4
5月平均・積算	12.9	11.5	1.4	18.8	17.1	1.7	7.5	6.7	0.8	64.5	71.1	△ 6.6	232.9	188.9	44.0
6月上旬	14.4	15.6	△ 1.2	19.3	21.7	△ 2.4	10.4	11.0	△ 0.6	107.5	8.6	98.9	38.0	66.4	△ 28.4
中旬	17.3	16.5	0.8	23.4	21.6	1.8	13.0	12.7	0.3	2.0	30.8	△ 28.8	79.9	49.2	30.7
下旬	16.4	18.6	△ 2.2	20.8	24.2	△ 3.4	13.3	14.3	△ 1.0	27.5	21.3	6.2	22.8	67.0	△ 44.2
6月平均・積算	16.0	16.9	△ 0.9	21.2	22.5	△ 1.3	12.2	12.7	△ 0.5	137.0	60.7	76.3	140.7	182.6	△ 41.9
7月上旬	17.0	19.8	△ 2.8	22.8	25.1	△ 2.3	12.2	16.2	△ 4.0	31.5	28.4	3.1	77.8	53.1	24.7
中旬	20.9	19.9	1.0	26.5	24.7	1.8	16.2	16.4	△ 0.2	29.0	34.6	△ 5.6	76.5	51.4	25.1
下旬	23.7	21.1	2.6	27.8	26.0	1.8	21.1	17.4	3.7	52.5	33.7	18.8	26.9	57.5	△ 30.6
7月平均・積算	20.5	20.3	0.2	25.7	25.3	0.4	16.5	16.7	△ 0.2	113.0	96.7	16.3	181.2	162.0	19.2
8月上旬	23.4	22.8	0.6	28.0	27.9	0.1	19.6	19.1	0.5	41.0	44.1	△ 3.1	50.6	57.9	△ 7.3
中旬	21.6	22.6	△ 1.0	26.3	27.2	△ 0.9	18.2	19.1	△ 0.9	63.0	64.6	△ 1.6	43.9	52.3	△ 8.4
下旬	19.5	21.1	△ 1.6	24.7	25.9	△ 1.2	15.4	17.2	△ 1.8	0.5	48.3	△ 47.8	63.1	62.0	1.1
8月平均・積算	21.5	22.2	△ 0.7	26.3	27.0	△ 0.7	17.7	18.5	△ 0.8	104.5	157.0	△ 52.5	157.6	172.2	△ 14.6
9月上旬	18.7	20.3	△ 1.6	23.3	25.1	△ 1.8	14.6	16.3	△ 1.7	81.0	70.1	10.9	47.1	52.0	△ 4.9
中旬	16.8	18.5	△ 1.7	21.7	23.5	△ 1.8	12.8	14.0	△ 1.2	40.0	49.4	△ 9.4	49.9	57.7	△ 7.8
下旬	15.9	15.0	0.9	20.7	20.2	0.5	12.0	9.9	2.1	70.0	33.6	36.4	47.3	57.6	△ 10.3
9月平均・積算	17.1	17.9	△ 0.8	21.9	22.9	△ 1.0	13.1	13.4	△ 0.3	191.0	153.1	37.9	144.3	167.3	△ 23.0
10月上旬	12.2	13.1	△ 0.9	16.8	18.1	△ 1.3	7.9	8.5	△ 0.6	31.0	43.0	△ 12.0	48.5	48.2	0.3
中旬	9.7	11.1	△ 1.4	14.8	15.9	△ 1.1	5.0	6.4	△ 1.4	65.5	35.1	30.4	47.3	46.7	0.6
下旬	6.8	9.0	△ 2.2	10.9	13.6	△ 2.7	2.5	4.5	△ 2.0	19.5	24.6	△ 5.1	39.7	44.6	△ 4.9
10月平均・積算	9.6	11.1	△ 1.5	14.2	15.9	△ 1.7	5.1	6.5	△ 1.4	116.0	102.7	13.3	135.5	139.5	△ 4.0

農耕期間積算値(5月～9月)

区別	平均気温(°C)	降水量(mm)	日照時間(h)
本年	2782	546	984
平年	2719	541	874
比較	63	5	110

季節調査(年. 月. 日)

区別	根雪初日	根雪終日	降雪終日	耕鋤始	晩霜	初霜	降雪初日
本年	H26. 12.5	H27. 3.29	H27. 4.8	H27. 5.7	H27. 4.13	H27. 10.16	H27. 11.22
平年	11.29	4.10	4.14	5.6	5.7	10.17	11.10
比較	6	△ 12	△ 6	1	△ 24	△ 1	12

注) データは「アメダス岩見沢」を使用し、平年値は平成17～26年の10ヶ年平均値。

注2) 表中の気温は期間内の平均を示し、降水量と日照時間は期間内の積算値を示した。

注3) 季節調査は、岩見沢測候所閉鎖にともない、平成18年以降はアメダス岩見沢の観測値から推定した。

項目	品種名・ 苗種	きらら397 中苗			ななつぼし 中苗			ゆめぴりか 中苗(参考)			そらゆき 中苗(参考)
		本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	(前6ヶ年)	比較	本年
播種期	(月.日)	4.16	4.18	△ 2	4.16	4.18	△ 2	4.16	4.18	△ 2	4.16
移植期	(月.日)	5.19	5.21	△ 2	5.19	5.21	△ 2	5.19	5.20	△ 1	5.19
幼穂形成期	(月.日)	7.06	7.06	0	7.02	7.02	0	7.02	7.03	△ 1	7.03
止葉始	(月.日)	7.21	7.18	3	7.15	7.13	2	7.17	7.15	2	7.17
出穂期	(月.日)	8.01	7.31	1	7.29	7.27	2	7.30	7.28	2	7.31
成熟期	(月.日)	9.21	9.20	1	9.17	9.14	3	9.17	9.16	1	9.20
穂揃日数	(日)	6.0	5.8	0.2	7.0	6.2	0.8	7.0	6.7	0.3	6.0
登熟日数	(日)	51	51	0	50	49	1	49	50	△ 1	51
生育日数	(日)	158	155	3	154	149	5	154	151	3	157
移植時地上部乾物重(g/100本)		2.23	1.96	0.27	2.55	2.07	0.48	2.32	2.16	0.16	2.64
草丈 (cm)	移植時	9.1	10.1	△ 1.0	10.4	10.4	0.0	10.4	10.5	△ 0.1	10.8
	6月20日	25.8	24.1	1.7	29.2	28.1	1.1	28.5	28.5	0.0	32.4
	7月20日	62.1	62.7	△ 0.6	69.3	71.3	△ 2.0	68.2	70.7	△ 2.5	68.6
茎数 (移植時:本/個体) (その他:本/m ²)	移植時	1.0	1.0	0.0	1.0	1.0	0.0	1.0	1.0	0.0	1.0
	6月20日	323	321	2	370	331	39	338	355	△ 17	300
	7月20日	860	800	60	858	802	56	953	857	96	845
主稈 葉数 (枚)	移植時	2.9	3.2	△ 0.3	3.1	3.1	0.0	3.0	3.2	△ 0.2	2.7
	6月20日	6.7	7.1	△ 0.4	6.7	7.1	△ 0.4	6.8	7.2	△ 0.4	6.2
	7月20日	10.7	10.9	△ 0.2	10.0	10.2	△ 0.2	10.6	10.5	0.1	9.7
	止葉	11.0	11.1	△ 0.1	10.0	10.3	△ 0.3	10.7	10.6	0.1	9.8
稈長	(cm)	72.4	64.9	7.5	73.9	69.4	4.5	75.2	68.2	7.0	82.7
穂長	(cm)	16.8	16.7	0.1	16.1	16.5	△ 0.4	16.4	17.0	△ 0.6	16.8
穂数	(本/m ²)	695	695	0	768	731	37	803	760	43	738
一穂粒数	(粒)	46.4	47.6	△ 1.2	46.9	52.1	△ 5.2	43.1	44.0	△ 0.9	47.5
m ² 当粒数	(百粒)	322	331	△ 9	360	381	△ 21	346	334	12	351
稔実歩合	(%)	95.1	91.9	3.2	93.5	89.7	3.8	94.7	90.4	4.3	93.4
登熟歩合	(%)	88.3	80.5	7.8	90.8	80.3	10.5	89.0	77.7	11.3	89.7
籾摺歩合	(%)	77.2	76.7	0.5	78.6	76.1	2.5	74.3	74.5	△ 0.2	75.8
屑米歩合	(%)	6.5	6.4	0.1	5.2	6.6	△ 1.4	8.8	8.3	0.5	7.8
千粒重	(g)	23.1	23.2	△ 0.1	21.9	22.4	△ 0.5	22.7	22.9	△ 0.2	23.1
わら重	(kg/a)	66.0	60.4	5.6	73.4	66.2	7.2	67.7	65.3	2.4	74.0
精籾重	(kg/a)	79.8	76.7	3.1	81.6	78.3	3.3	79.1	74.4	4.7	87.5
精玄米重	(kg/a)	61.6	58.8	2.8	64.1	59.6	4.5	58.8	55.4	3.4	66.3
収量平年対比	(%)	105	100	5	108	100	8	106	100	6	-
検査等級		2上	1下	-	1下	1下	-	2上	2上	-	1下

注1)「きらら397」の平年値は前7ヶ年中、平成26年(最豊)、21年(最凶)を除く5ヶ年平均。

注2)「ななつぼし」の平年値は前7ヶ年中、平成23年(最豊)、21年(最凶)を除く5ヶ年平均。

注3)平成21年より「ゆめぴりか」(中苗紙筒)の調査を開始した。

注4)平成26年より「そらゆき」(中苗紙筒)の調査を開始した。

注5)耕種概要

土 壤 : 細粒グライ土

施 肥 : 高度化成472全層施肥 N-P₂O₅-K₂O=8.0-9.7-6.9 kg/10a

播 種 量 : 中苗紙筒=130cc/箱

移植方法 : 手植え

注6)刈り取り面積は一区4.00m²。精籾重、精玄米重は水分15%換算値。使用した篩目は1.90mm。

Ⅲ 果 樹

1. リンゴ 作況：並

事由 発芽期は平年より11～13日早かった。4月下旬～5月上旬の気温が平年より高く推移したため、開花期は平年より12～13日早かった。

果実肥大は、開花期が早かったことと天候が良好に推移したため順調に進み、9月15日の果実体積は、「つがる」は平年並みであったが、「ハックナイン」、「ふじ」は平年より大きかった。

花芽率および果そう結実率が平年より高かったため着果数を十分確保できたことと、果実肥大が順調に進んだことから樹齢相応の収量を得られた。

収穫期は、地色の抜けが遅く、着色が進まなかったため、開花期ほどは早まらなかった。生育期間中に目立った生理障害や病虫害はなかったものの、収穫前に強風が吹き落果や枝ずれが発生した。

以上のことから、本年の作況は“並”である。

りんごの生育と収量・果実品質

項目		品種 ²⁾	つがる/JM7		ハックナイン/JM7		ふじ/JM7	
		年次	本年	平年	本年	平年	本年	平年
		樹齢	9	18	9	16	9	16
生育経過	発芽期 (月日)		4.14	4.25	4.12	4.24	4.13	4.26
	展葉期 (月日)		4.28	5.8	4.25	5.4	4.27	5.6
	開花期 (月日)		5.12	5.24	5.11	5.23	5.12	5.25
	満開期 (月日)		5.19	5.30	5.19	5.28	5.19	5.29
	落花期 (月日)		5.26	6.4	5.25	6.3	5.26	6.4
花芽率			98.2	91.1	86.2	68.3	91.0	66.9
果そう結実率			94.0	87.7	88.8	72.7	83.1	76.6
果 ³⁾ 実体積	7月15日		43.5	39.3	59.3	47.7	41.5	27.7
	平年対比 (%)		111	(100)	124	(100)	150	(100)
果 ³⁾ 実体積	9月15日		260.4	267.7	314.6	253.8	210.3	167.9
	平年対比 (%)		97	(100)	124	(100)	125	(100)
収量	収穫日 (月日)		9.24	9.30	10.19	10.31	11.5	11.8
	一樹当り収量 (kg)		24.7	25.9	28.6	42.1	43.2	33.8
	収穫果一果重 (g)		274	295	394	332	272	246
果実品質	調査果一果重 (g)		284	312	420	368	297	281
	地色 (1-8)		3.9	4.7	3.1	3.8	2.9	4.1
	着色 (0-10)		9.0	8.5	6.7	7.1	7.5	8.5
	硬度 (lbs)		12.7	13.1	12.7	12.8	16.7	16.1
	糖度 (%)		13.7	13.8	14.6	13.5	14.7	14.1
	酸度 (g/100ml)		0.33	0.33	0.53	0.53	0.47	0.48
	蜜入り (0-4)		0.0	0.4	2.3	1.4	2.6	3.0
コード (0-5)		2.3	2.3	2.4	1.7	2.1	2.0	

注1) 平年値は前12カ年中、最豊最凶を除いた10カ年平均である。

2) 「品種」は品種名/台木名として示した。

3) 果実体積 (cm³) = 4/3π {(縦径+横径)/4}³

C 試験研究及び地域支援等活動の概要

作物開発部

作物開発部は作物グループ（畑作、果樹）、生物工学グループ、農産品質グループで構成され、畑作物及び果樹の品種、栽培に関する試験研究及び調査、バイオ技術を用いた作物のマーカー選抜、培養に関する試験研究、作物の品質に関する試験研究を行っている。本年度の試験概要と成果は次のとおりである。

作物グループ

畑作関係：道央以南を対象とした畑作物の品種改良と栽培技術の確立及び全道に共通する問題解決のため試験研究を進めている。

「大豆品種開発事業」では、道央以南の水田転換畑向け耐湿、耐病虫性、多収、高品質品種育成のため、10組合せを交配するとともに、雑種後代の集団、系統選抜を行った。「北海道産大豆の高品質・安定供給を目指した豆腐・納豆用品種の開発」では系統選抜試験、小規模生産力検定予備試験を行い、中期世代系統の特性を明らかにした。「畑作物の地域適応性検定試験」では生産力検定予備試験を行うとともに、十勝農試育成系統についての奨励品種決定基本調査を行った。中生白目大粒「十育259号」は、出芽に問題があったため、廃棄となった。

大豆新品種育成に係わり、「ゲノム情報を活用した豆類複合抵抗性品種の開発強化」では、DNAマーカーを利用して、耐病虫性等の選抜を実施した。「大豆における開花期耐湿性の育種素材開発と関連マーカーの実用性検証」では、「植系32号」由来系統の農業形質の改良を目的に選抜を行い、新たな耐湿性遺伝資源として「Aldana」を耐湿性検定に供試し、その結果、耐湿性“強”であった。「ダイズの難解析形質を対象としたゲノム選抜育種法の開発」では、収量性によるアソシエーション解析を行うため、多収品種系統の収量性等の特性調査を行った。

小豆では、「畑作物の地域適応性検定試験」に十勝農試育成の十育3系統を供試するとともに、「奨決 小豆」（奨決現地）に2系統供試した。早生の「十育164号」は耐病性に優れ、早熟性が確認されたことから平成28年北海道優良品種に認定された。中生で「エリモショウズ」の準同質遺伝子系統である「十育167号」は、特性が「エリモショウズ」とほぼ同じであり、落葉病抵抗性を有することから継続検討とされた。中晩生の「十育168号」

は「きたあすか」と比較して耐倒伏性の改善が期待できるため継続検討とされた。「道央・道南地域に適した複合病害抵抗性、高品質、多収小豆品種の開発強化」において、十勝農試育成系統の道央地帯での適応性を検定した結果、耐病、耐倒伏の「十系1185号」が次年度新配付系統とされた。また、F5世代系統選抜を行った。

麦類新品種育成試験では、「北海道に適応した障害や病害に強く加工適性に優れた小麦品種の開発」、「道産小麦の需要を拡大する次世代品種の開発促進と生産安定化」、「小麦育種研究に係る系統適応性・特性検定試験」および「春まき小麦の品種選定試験」を行い、北見農試、北農研センターあるいはホクレン育成の小麦系統について、赤かび病、コムギ縮萎縮病や赤さび病への抵抗性、耐穂発芽性、道央地帯での適応性を明らかにした。これらの結果から、秋まき小麦では「北見93号」が次年度新配付系統とされた。

「畑作物の地域適応性検定試験」、「春まき小麦の品種選定試験」および「奨決 麦類」（奨決現地）により有望系統の奨決調査を行い、秋まき小麦では菓子用の「北見92号」、超強力用小麦の「北海265号」が継続とされた。日本めん用の「北見91号」は収量性が不十分で製粉歩留が悪いため、硬質小麦の「北海264号」は熟期が遅く、耐穂発芽性が不十分のため廃棄とされた。春まき小麦では、「北見春77号」は耐穂発芽性は優るが、耐倒伏性の優位性が認められないことが明らかとなり、製パン性もやや劣るため、廃棄とされ、「HW6号」は障害耐性はおおむね優り品質も並だが、収量性が劣る年次・地域があり、安定的な生産が見込まれないため、廃棄とされた。

ばれいしょ新品種育成試験では、「畑作物の地域適応性検定試験」、「奨決 馬鈴しょ」（奨決現地）および「ばれいしょ輸入品種等選定試験」を実施し、育成系統や導入品種の道央地帯における適応性を検討した。生食用では「北海107号」が育成場でのみ継続検討とされた。加工用では「北育22号」、「北海108号」、「北系62号」が継続とされた。「馬鈴しょ育成系統の早期肥大性検定試験」では、比較的熟期の遅い4系統について早期収穫が収量等に与える影響について検討した。

てんさい新品種育成試験では、「てんさい輸入品種検定試験」と「気候変動に対応したテンサイ安定生産にむけた高度病害抵抗性品種の開発」により黒根病抵抗性検定を実施し、11系統の抵抗性を評価した。また、現地試

験では、3系統の有望度を判定した。

そばの地域適応性検定試験では、現地試験において北農研センター育成の「北海14号」を供試し、早期播種および標準播種ともに「キタワセソバ」に比べ、子実重と容積重が上回っていたことから、単年度評価はやや有望であった。また、同系統の有望度もやや有望であった。

豆類新優良品種普及促進事業では、大豆新品種「中育69号」を供試して採種を行った。

果樹関係：道内の果樹農業振興のため、品種改良および栽培法改善の試験研究を行い、良質な果実を安定生産する技術と省力・軽労化を進める技術を開発する。

品種改良試験：「おうとう品種改良試験」では、一次選抜では2078個体中716個体を淘汰した。「地域適応性検定試験」では第2回として「CHC5」、第3回として「HC9」「HC10」を供試中である。「寒地向けりんご品種の生産安定化試験」では、導入した21品種の特性調査を実施し、「りんごの品種特性」として指導参考事項とされた。「リンゴ育種研究に係る系統適応性・特性検定試験」では、農研機構・果樹研究所育成の7系統を供試した。「地域適応性検定試験」では、「ぐんま名月」について試験を行った。「ニーズに即した高品質ぶどうの品種選定と安定生産技術の開発」では、導入した12品種・系統の特性調査を継続して実施した。「特産果樹品種比較試験」では、西洋なし、ブルーベリーについて検討を行った。「果樹わい性台木の特性調査」では、おうとうのコルト台の台木長の影響および新台木ダーレン台の特性について検討中である。

栽培法改善試験：「寒地向けりんご品種の生産安定化試験」では、雪害に強い耐雪型樹形の検討を行い「りんご雪害回避のための整枝法」として指導参考事項とされた。

「ニーズに即した高品質ぶどうの品種選定と安定生産技術の開発」では、高品質を重視した整枝法および着果管理法の検討を行った。「高級醸造用ぶどう品種の地域適応性と高品質栽培法」では「ピノノワール」等の道内における適応性と収量を制限した場合の品質について検討中である。「ブルーベリーの高品質安定栽培技術の確立」では、簡便な整枝剪定法の検討や生育不良樹の樹勢回復方法の検討を行っている。

生物工学グループ

組織培養技術による作物新育種素材・品種の開発：

「道産小麦の需要を拡大する次世代品種の開発と生産安定化」では、薬培養法によりパン・中華めん用および

日本めん用小麦の半数体倍加系統を作出し、DNAマーカーによる選抜を行った。

作物の遺伝子解析と利用に関する試験：水稻では、「多様なニーズに対応する米品種並びに栽培技術早期確立」および「新たな簡易米飯評価法を用いた実需ニーズに対応した業務用多収品種の開発」で、国宝ローズ由来のアミロース低下遺伝子(*qAC9.3*)と連鎖したDNAマーカーによる分離判定・系統選抜、*Pi35*、*Pi39*などのいもち病圃場抵抗性遺伝子のDNAマーカー検定を行った。

小麦では、「道産小麦の需要を拡大する次世代品種の開発と生産安定化」で、DNAマーカーを用いてF1および初中期世代の品質関連形質遺伝子、コムギ赤かび病、縞萎縮病抵抗性などの病害抵抗性遺伝子の有無を判別した。またコムギ縞萎縮病抵抗性特性検定試験をおこなった。「麦類および飼料作物の有用遺伝子の同定とDNAマーカー開発」では、3B上の抵抗性遺伝子の候補を11個まで絞り込み、そのうちの一つの配列を利用して育種で利用しやすい共優性マーカーを作製した。「春まき小麦の日長反応性を決定する遺伝子の解析」では、「春よ恋」に由来する日長反応性QTLを見出した。

大豆では、「北海道産大豆の高品質・安定供給を目指した豆腐・納豆用品種の開発」で、DNAマーカーを利用し、初中期世代の系統選抜および小規模生産力試験供試系統の特性評価を効率的に実施した。「大豆における開花期耐湿性の育種素材開発と関連マーカーの実用性検証」では、「植系32号」交配後代系統について、耐湿性QTLの遺伝子型と検定圃場における耐湿性評価との関連を調査した。小豆、菜豆では、「アズキ茎疫病圃場抵抗性のマーカー開発とDNAマーカー選抜による小豆重要土壌病害抵抗性選抜の効率化」で、DNAマーカーにより落葉病レース1,2抵抗性検定を行うとともに、アズキ茎疫病圃場抵抗性DNAマーカーの開発を行った。「ゲノム情報を活用した豆類複合抵抗性品種の開発強化」では、改良した黄化病抵抗性DNAマーカーの有効性を検証するとともに、炭そ病抵抗性のQTL解析を行った。「小豆におけるダイズシストセンチュウ抵抗性の選抜強化とDNAマーカーの開発」では、抵抗性遺伝資源のDNAを抽出し、次世代シーケンサーにより塩基配列を解読した。

ばれいしょでは、「DNAマーカーによる馬鈴しょ耐病虫性品種の開発強化」で、DNAマーカーによるシストセンチュウおよびYウイルス抵抗性選抜を進めた。「長期貯蔵性に優れたポテトチップス用馬鈴しょ品種の開発強化」では、加工用馬鈴しょ系統のジャガイモシストセンチュウ抵抗性をDNAマーカーにより検定した。「大豆および畑作物の有用遺伝子の同定とDNAマーカーの開発」では、

大規模集団を用いて抵抗性遺伝子近傍での組み換え系統を選抜するとともに、ゲノム情報を元にRyhc特異的なマーカーを作出した。「DNAマーカーなどを利用した馬鈴しょ遺伝資源の特性評価」では、葉片培養適性に優れる10系統を選定した。また、デンプン合成・分解に関与するDNAマーカー24点から北海道品種間で多型性の高い7マーカーを選定し、うち2マーカーの遺伝子型が今年度生産力検定試験の収量および熟期と関連していることを明らかにした。「ジャガイモシロシストセンチュウの防除技術の開発」では、DNAマーカーを利用してシロシストセンチュウ抵抗性素材候補となる13点を見出した。

農産品質グループ

農産品質試験：「多様なニーズに対応する米品種並びに栽培技術の早期確立Ⅲ」、「新たな簡易米飯評価法を用いた実需ニーズに対応した業務用多収品種の開発」では、新たに開発した業務用適性評価項目について、主に後期世代の育成材料の検定分析を実施した。

「道産小麦の需要を拡大する中華麺・パン用品種の開発強化」では、中華めんおよびパン用高品質秋まき小麦の加工適性に関わる品質検定を実施した。

「菜豆のサラダ用加工特性の解明と加工適性・耐病性に優れる品種開発の強化」「道央・道南地域に適した小豆の茎疫病圃場抵抗性を含めた耐病性と加工適性の向上」では、それぞれの加工適性検定を実施した。「インゲンマメの難消化性成分「ルミナコイド」に着目した機能性成分の実態と変動要因の解明」では、菜豆実用品種について、難消化性成分の比較分析を実施した。

「北海道産大豆の高品質・安定供給を目指した豆腐・納豆用品種の開発」では、後期世代の育成材料について豆腐加工適性に係る検定分析を実施した。

「春夏まきレタス品質向上のための品種選定および施肥技術の開発」では、レタスのテクスチャーおよび苦味について客観的評価技術開発を実施した。

「素材・加工・流通技術の融合による新たな食の市場創成（戦略研究）」では、民間企業および消費者ニーズを反映した食品開発アイデアを起点とし、道総研技術シーズを融合した連携協働体による多角的な商品開発の検討を実施した。

遺伝資源部

遺伝資源部は、植物遺伝資源の収集、保存・管理、特性評価、素材開発の試験研究および主要な農作物の基本

種子の生産・配付を行っている。

平成27年度の試験概要と成果は以下のとおりである。**植物遺伝資源に関する試験**：「植物遺伝資源の保存管理」の「種子遺伝資源の増殖」では、収集・移管遺伝資源の一次増殖および保存遺伝資源で発芽力の低下あるいは貯蔵量の減少したものの再増殖について、水稻、小麦、豆類など合計1,392点（稲類525、麦類288、豆類548、雑穀14、野菜類7、牧草類10点）を供試し、1,243点（稲類473、麦類282、豆類466、雑穀9、野菜類3、牧草類10点）で新規登録あるいは種子更新に必要な種子量を採種できた。未採種または採種量僅少の原因は、不出芽、生育不良、未成熟、座止、不稔等であった。「遺伝資源の保存」について、本年度末時点の種子遺伝資源は、長期貯蔵庫に274点を入庫、極長期貯蔵庫には557点を入庫した結果、それぞれ27,150点、22,971点の貯蔵点数となった。現在の種子遺伝資源登録数は27,630点で、このうち480点は永久保存登録とし、極長期貯蔵庫のみの保存である。栄養体遺伝資源では、超低温によるばれいしょ246点を保存している。「遺伝資源の提供」は、道内外の大学、研究機関、民間企業、道内の農業団体等のべ33機関に、水稻、麦類、豆類等計151点（試験研究用131点、教育用6点、地域振興用14点、本年度は普及展示用での配付はなし）を提供した。「遺伝資源の発芽力検定」については、稲類、麦類、豆類、雑穀など合計3,212点について発芽力調査を行い、保存、再生産の参考とした。「遺伝資源の情報管理」では、パスポート情報のデータ追加と不備な点を補い充実を図るとともに、種子の入出庫、発芽率情報などのデータ更新を逐次行った（新規登録274点、入出庫管理5,011件）。

「道産小麦の需要を拡大する次世代品種の開発促進と生産安定化 ー褐色雪腐病抵抗性の検定ー」では、遺伝資源と交配母本等190点（基準品種等を含む）、育成系統187点（基準品種等を含む）を供試し、発病度と枯死株率から抵抗性を評価した。本検定では、平畦と深畦処理を設け、「やや弱」と「弱」の基準品種の発病度差が大きく、両区分の判定がしやすかった深畦の結果を用いて判定した。

「馬鈴しょ育種母材の超低温保存」では、平成23年度以降、供試し、超低温保存できていない85点のうち、54点を長期保存に移すことができた。この結果、5カ年で177点を供試し、176点の無菌化、増殖し、146点を長期保存することができた。

優良品種種子生産事業：「基本系統の選定・増殖」では、大豆「中育69号」について、「育種家種子の増殖」では、必要量・貯蔵経過年数等を勘案して適宜増殖・貯蔵を行

った。また、原原種の生産計画に合わせて、育種家種子を配付した。

道が民間に委託・移管している水稲、麦類、豆類、そばの原原種生産の圃場審査補助（出穂期・開花期、糊熟期・成熟期の2回）および生産物審査補助（発芽試験を含む）を実施した。

その他、食用ゆりのウイルスフリー原原種親球を維持した。

予備増殖および新優良品種普及促進事業：水稲、麦類および豆類の新品種の普及促進のため、奨励品種決定調査（2年目以降）を実施している有望系統について種子増殖を実施した。

「予備増殖」では、水稲「空育181号」、「空育183号」、「北海327号」、秋まき小麦「北海264号」、春まき小麦「HW6号」および「北見春77号」（実規模用予備増殖）、小豆「十育164号」、「十育167号」、菜豆「十育A62号」、「十育B81号」、「十育B82号」、「十育S3号」について実施し、優良品種への提案が取り下げとなった秋まき小麦「北海264号」、春まき小麦「HW6号」、「北見春77号」を除き、予定の種子量をほぼ確保した。

「新優良品種普及促進事業（特別増殖）」では、水稲「空育181号」（上川農試、中央農試岩見沢試験地担当）、「空育183号」（中央農試岩見沢試験地、道南農試担当）、二条大麦「礼育2号」（十勝農試担当）、大豆「中育66号」、「中育69号」（中央農試担当）、小豆「十育163号」（北見農試担当）について実施し、遺伝資源部は事業実施の調整と取りまとめを行った。

その他の試験：「食用ユリ原原種のエライザ検定」では、4種のウイルス感染の有無をエライザ法により調査した。

生産研究部

業務用・加工用水稲品種の育成、水稲並びに転作作物の栽培技術、バイオマス活用技術及び先端技術の活用を含めた機械化技術の開発と体系化、さらに水田作地帯の農家経営、地域農業システムに関わる試験研究を担当し推進している。本年度の試験研究の概要と研究成果は以下のとおりである。

水稲新品種育成試験：北海道中央部の稲作中核地帯を対象に耐病性良品質、業務用米の品種開発を行っている。奨励品種決定試験に、「空育188号」を新たに供試するとともに、「空育181号」「空育183号」「空育184号」「空育185号」「空育186号」と「空育187号」を引き続き配布系統とした。その結果、「空育181号」を新たに北海道

優良品種とするとともに、「平成27年度「空育181・183号」一般ほ場委託栽培試験」にて、優良品種の早期普及を図った。平成27年度から「新たな簡易米飯評価法を用いた実需ニーズに対応した業務用多収品種の開発」が開始され、業務用米多収品種の早期開発が強化された。

水稲栽培技術に関する研究：

「多様なニーズに対応する米品種改良並びに栽培技術早期確立（第3期）3）業務用米の多収・省力栽培技術の開発（2）業務用米の省力栽培技術の開発」では、溶出の早く、窒素成分が慣行資材に比べ大幅に高い被覆尿素肥料の側条施肥への適応性を明らかにし指導参考事項（「高窒素成分肥料の利用による水稲側条施肥の省力化」）となった。「革新事業（水田輪作）：道産米の国際競争力強化と持続的輪作体系の両立に向けた実証」では、北農研、農村工学研究所と協力して、前年整地体系における排水改良効果を明らかにし、指導参考事項（「北海道の田畑輪換における水稲乾田直播栽培の前年整地体系による作業分散」）の一助とした。新資材関連のうち「水稲除草剤」については、一発剤7剤、中・後期剤4剤について新たに実用可能であること、また、3剤は特殊雑草対象への拡大が可能であることを確認し、指導参考事項となった。

転作作物に関する研究：平成27年度から、北海道の水田地帯における大豆の多収阻害要因の実態解明と改善策の実証を目的に「大豆多収阻害要因の実態解明と効率的な多収阻害要因改善の実証-1」を開始した。平成26年度に開始された「平成27年度地下灌漑有効性調査」では、集中管理孔を活用した地下灌漑は、球肥大期迄の干ばつ回避とたまねぎの生育・収量に有効なことを明らかにした後、受託元との協議により本年度で調査を終了し、研究を新規課題に引き継ぐこととした。

戦略研究（エネルギー関連）：①「農業系バイオマスエネルギーの需給量の推定及び評価手法の開発」では、地域におけるバイオガス賦存量、農業施設や農業経営におけるエネルギー需要量を把握するとともに、GISデータベースを作成した。②「バイオガス等による分散型エネルギーの供給システムおよび利活用技術の開発」では、バイオガス精製装置及びコージェネレーションシステム等の導入形態を検討した。

戦略研究（地域関連）：

①「持続可能な地域づくりに向けた人口動態と産業構造に関する統計解析及び先行事例調査」では、道内の自治体職員が視察時に期待する点を整理した。②「事業化戦略の策定を支援するコンサルティング手法」では、町

事業のコンサルティングにあたり、階層分析法による得点を基に対象事業を選定した。③「本道農村の持続化に向けた社会的企業設立モデルの検討」では、コントラ組織単独による多機能化には制約がみられること、一方で、農協による多様な機能の担い手形成を伴った生活をも含めた支援体制の構築が確認された。

クリーン・高度クリーン・有機農業研究：「青果物における高度クリーン農業技術の経済性と産地への導入条件」では、特別栽培ブロッコリーの経済性を調査するとともに、地域における導入状況を整理した。

多様なニーズに対応する米品種改良並びに栽培技術早期確立：北海道の優位性を活かした、収量性、農業特性、多様なニーズに対応した水稻品種の早期開発を促進、並びに、用途別米の適正評価手法や多収技術、省力栽培の開発を目的に、施肥技術や省力技術の開発に取り組み、一部の技術を指導参考事項とした。

農業機械研究：①「ほ場の堅密層に関する調査」では、昨年度に引き続き、トラクタの走行部の構造が踏圧層形成に及ぼす影響の評価、及び現地圃場での踏圧層形成の実態を調査した。②「汎用コンバインを用いた子実用とうもろこし収穫法の確立」では、転換畑における汎用コンバインによる子実用とうもろこしの収穫損失を低減させるためヘッダを改良し、その効果を調査した。

農業経営研究：①「稲作経営の大規模化に向けた農地集積による省力化および生産費低減効果の解明」では、農水省の生産費データを用い、区画の大きさや団地数と生産費の関係を整序した。また、実態調査から、区画面積と農作業体系の関係を検討した。②「水田作経営の収益構造の解明と低コスト生産体制の構築」では、本道水田地帯における産地戦略の整理、水田作経営の収益構造の解明、及び大規模低コスト経営の水稻生産費調査を行った。

革新事業（水田輪作）：①「作業期間拡大のための圃場排水不良改善技術の実証」では、カットソイラ及びカットドレーンの排水促進効果と、土壌条件に対応した本技術を含む排水対策事例を、成績会議に報告した。②「田畑輪換における無代かき栽培・疎植栽培による水稻の省力・低コスト化と転換畑地力の改善」では、無代かき・疎植栽培の現地実証により収量、労働時間、コストの把握及び土壌物理性の改善効果の検証し、慣行栽培比で増収低コストになることを実証し、受託元に報告した。③「田畑輪換・無代かき栽培と子実用とうもろこしの導入に向けた経営評価」では、実証機の普通コンバイン中型機種は、大型機種よりも実証地域の乾燥体系に適していること、畑地化初年目の泥炭土圃場でも、約7.5kg/10a

の総窒素施用量で約1,000kg/10aの子実乾物収量に到達すること、この収量の下で粗収入により生産費を賄うためには、実証機を用いてとうもろこし15ha以上の収穫が必要であることを明らかにし、指導参考事項となった。**農業機械性能調査：**色彩選別機（小豆）の性能（CSV600BI）の性能を調査し、指導参考となった。

農業環境部

農業環境部は環境保全グループ及び栽培環境グループで構成され、農業の環境保全に関する試験研究、有機農業に関する試験研究、生産基盤及び農村環境の整備に関する試験研究、畑作物及び園芸作物の土壌肥料に関する試験研究及び依頼分析などを分担して行っている。本年度の試験概要と成果は次のとおりである。

環境保全関係：①「多様な地域・用途に応じた飼料用とうもろこし安定栽培マップの作成」では、9品種の試験栽培で熟期別生育調査を行い、畜試で全道データを一括し気象と熟期の関連性を解析した。本試験は本年度で終了し、次年度に取りまとめを行う。②「省力的水田輪作体系に向けた子実用とうもろこしの省力栽培体系の実証」では、現地泥炭土圃場において窒素用量試験と土壌物理性の変化調査を継続し、成績を取りまとめた。③「秋まき小麦の不耕起栽培におけるリビングマルチの活用法」では、前作としてシロクロバをリビングマルチした条件での検討を行ったが、秋まき小麦が低収化する傾向となったため、リビングマルチにヘアリーベッチを用いる設計変更を行い、小麦の播種量や窒素施肥量の影響を検討した。④「安全・安心なかぼちゃ生産に向けた土壌残留ヘプタクロル類診断技術の開発」では、ホクレン、十勝農協連と共同で現地試験を行い、土壌残留分析値から作付けしたかぼちゃ果実中の残留農薬値を予測法の精度向上と現地実証を行った。⑤「農薬残留対策総合調査」では、環境省の主導により土壌施用殺虫剤2種を供試し、後作物の成分吸収への影響を調査した。⑥「環境保全型有機質資源施用基準設定調査（土壌機能実態モニタリング調査）」では、各場の農業環境関係 G と共同で全道164地点の土壌調査および土壌理化学性の分析を行い、全道集約を行った。⑦「農地土壌炭素貯留等基礎調査事業（農地管理実態調査）」では、各場の農業環境関係 G と共同で、全道132地点の土壌調査と炭素、窒素含量を分析すると共に、耕種状況と肥培管理のアンケート調査を実施し、全道分を取りまとめ(国研)農業環境技術研究所に報告した。⑧「酸性雨モニタリング（土壌・植生）」

では、林業試、環科研と共に知床国立公園内の森林定点土壌を採取、分析し結果を道を通じて環境省に報告した。⑨「北海道の大規模畑における土壌流亡・湿害を緩和するほ場の保水・排水機能改善技術の開発」では、上川南部の傾斜ほ場地帯をフィールドに、土壌流亡実態の調査とカッティングソイラ等を用いた土壌流亡回避対策の試験に着手した。⑩「圃場の堅密層に関する調査」では、前年に引き続きオホーツク地域および富良野地域において有材、無材の補助暗きょ施工圃場の排水機能について調査を行い、成果を北海道農政部に報告した。⑪「酸性硫酸塩土壌地域における区画整理後の pH 改善対策手法の検討調査」では、道営土地改良事業で整備したほ場で発生した低 pH 障害の対策について、石灰施用と客土の効果を中心に上川総合振興局と共に検討した。⑫「農業農村整備事業等に係る土壌調査」では、各場の農業環境関係 G と共同で、全道 40 地区の事業計画調査、2 地区の経済効果検討調査を実施した。このうち環境保全 G では、共和町、蘭越町、京極町の事業計画地区の土壌断面調査ならびに土壌理化学性分析を行い、後志総合振興局に報告した。⑬「有機質資材等の分析（依頼試験）」では、延べ 22 検体 150 項目の分析を行った。内訳は肥料 144 項目と農産物の分析 6 項目で、一部は農産品質 G の協力を得て行った。⑭「肥料分析委託業務」では、登録肥料 7 点、収去肥料 37 点の分析を行った。

栽培環境関係：①「多雪地帯の有機栽培たまねぎに対する安定多収を目指した春全量施肥法の確立」では、有機栽培たまねぎの栽培実態、春全量施肥に適した有機質資材の探索及び窒素施肥対応を検討した。②「有機栽培畑のリン酸肥沃度を考慮した有機質資材施用法の確立」では、有機物管理と土壌養分の関係、各種有機質資材のリン酸肥効率及び有機栽培畑に適したリン酸施肥法を検討した。③「移植たまねぎの安定生産のための窒素分施肥技術の確立」では、施肥配分・分施肥時期・肥料形態及び現地実証を検討した。本成果は本年度農業試験会議（成績会議）において普及推進事項に採択された。④「ブロッコリー栽培における化学合成農薬・化学肥料削減技術の高度化」では、化学肥料を慣行比 5 割削減した場合の収量低下リスクの評価と、窒素不足分を有機質資材で代替する技術を検討した。⑤「秋まき小麦の大豆畦間ばらまき栽培条件下における多収阻害要因の解明と改善指標の開発及び対策技術の確立」では、大豆畦間ばらまき栽培圃場における多収阻害要因の解明及び大豆－秋まき小麦を通した 3 要素施肥体系の開発を検討した。⑥「硬質秋まき小麦「つるきち」の生育特性に対応した栽培法の確立」では、播種期・播種量、窒素施肥が生育・収量に

及ぼす影響を検討するため、場内および道央管内に現地試験を設置し、調査を行った。⑦「積雪地帯における小麦の気象対応型栽培技術の開発」では、小麦生育データと気象データを整備し、「きたほなみ」および「ゆめちから」の出穂期や成熟期を予測する発育モデルを検討した。⑧「農地土壌温室効果ガス排出量算定基礎調査事業（農地管理実態調査）」では農地 22 地点の土壌を調査し、耕種状況と肥培管理のアンケート調査を実施した。また、基準点調査として、地域の代表的な作物栽培体系下での有機物管理が土壌の炭素蓄積量に与える影響について検討した。⑨「突発及び新発生病害虫診断試験」では 5 件 5 点の診断をした。⑩「農業農村整備事業に係る土壌調査」では石狩・空知管内の 4 地区の調査をおこなった。⑪「土壌機能実態モニタリング調査」定点調査では、伊達市及び千歳市で 20 地点の土壌調査および土壌理化学性の分析を行った。⑫農業資材に関する試験（肥料及び土壌改良材）は 2 資材について試験を実施した。

病虫害部

道央 5 振興局を対象に病虫害防除技術の開発、全道に共通な病虫害の試験対応に係る調整およびクリーン農業に係わる試験研究調整をクリーン病虫害グループを中心に行っている。また、病虫害の発生予察や診断業務等の植物防疫事業の一部を、本庁技術普及課との連携しながら予察診断グループが担当し、情報の収集・発信を行っている。なお、本グループは作物ウイルス病対応、薬剤抵抗性害虫対応、果樹病害に対する試験課題も担当し、さらに地域対応試験も継続した。

本年は「平成 27 年度の発生にかんがみ注意すべき病虫害」を含めた 2 課題を取りまとめ試験会議に提出した。

地域対応試験：①施設栽培ホウレンソウにおけるコナダニの生態を利用した被害低減対策では、施設栽培ホウレンソウの難防除害虫ホウレンソウケナガコナダニの生態および被害発生メカニズムを解明し、播種前の密度低減対策として未分解有機物の排除および多量灌水＋被覆を、播種後の対策として誘引資材の土壌表面施用およびトラップ予察による化学農薬散布を提案した。

継続中の課題に関して、水稻では「夏季高温で多発する水稻の紋枯病および擬似紋枯病の発生実態解明および防除対策の確立」試験において、発生実態調査、疑似紋枯病の要防除水準の策定、効率的な防除対策の確立試験を実施した。とうもろこしでは、「スイートコーン褐色腐敗病防除対策の確立」試験において、細菌による新病

害の発生実態、発生生態の解明および防除対策の確立試験を実施した。小豆では、「アズキ茎疫病菌のレース分布解明と検定法の改良」試験において、道央地域を中心に病原菌の収集を行った。ぶどうでは、「醸造用ぶどうにおけるブドウつる割細菌病の生態解明と防除対策」試験において、本病の生態を解明し効率的な防除対策を開発する試験を開始した。また、野菜類では、「ネギアザミウマの薬剤抵抗性メカニズム解明と管理技術の開発」および「コナガの薬剤抵抗性メカニズム解明と管理技術の開発」試験において、抵抗性遺伝子診断法などにより薬剤抵抗性を迅速に診断し各害虫に対する有効な薬剤の選択に活用する試験を開始した。

育種協力試験：有望系統の病虫害抵抗性検定を実施している。小麦では赤かび病の抵抗性の育成、かび毒低減対策試験を実施している。馬鈴しょでは品種・系統の特性検定のうちウイルス病について担当している。さらに線虫関係ではダイズシストセンチュウ（SCN）発生圃場における SCN 抵抗性小豆の収量性や密度低減効果を明らかにし、その有用性の検証を行っている。

また、地域対応の手段のひとつとして、新たな殺菌剤、殺虫剤の計 94 点について実用性評価試験を実施した。

有機・クリーン農業技術開発：特別栽培農産物のための高度クリーン農業技術の開発では、「ブロッコリー」とともに、本年度から「ダイコン」でも試験を開始した。

緊急対応試験：突発病害虫の診断は、普及センターや農業団体等から野菜・畑作・花きを主体として 159 件の依頼点数があった。

発生予察調査：「平成 27 年度の発生にかんがみ注意すべき病害虫」では次年度注意すべき病害虫として、「小麦のなまぐさ黒穂病」、「ばれいしょのジャガイモシロシストセンチュウ」、「てんさいの西部萎黄病」、「コナガのジアミド系薬剤抵抗性個体群」を提案し、指導参考事項とされた。また、新発生病害虫として病害 9 点、虫害 8 点を記載した。さらに、各農試および北海道農政部技術普及課と協同して、16 作物 85 病害虫の発生状況調査を実施し、発生予察情報として、予報 6 回、月報 6 回、発生概況 1 回、注意報 2 回および特殊報 1 回、原稿を作成して北海道病害虫防除所に提出した。

企画調整部地域技術グループ

企画調整部地域技術グループは、農政部生産振興局技術普及課農業研究本部駐在の上席普及指導員、主任普及指導員および主査（地域支援）とともに「技術普及室」

を構成し、平成21年度までの技術普及部の機能を引継ぎ、空知、石狩、後志、胆振及び日高の5振興局の地域農業技術支援会議における地域農業支援及びニーズの把握を実施したほか、試験研究課題の実施、普及センターへの技術支援及び農業試験場における地域対応の窓口機能を果たした。

地域農業技術支援会議：農業技術に関する情報交換と地域課題の収集を行い、その内容に応じて、対応方針、課題の優先度、振興局・普及センター・農業試験場の役割分担などを整理しながら、課題解決に向けた協議を行い、具体的な活動を行った。

1) 地域要望課題に対する取り組み

地域課題を収集し、支援会議を構成する研究・普及・行政の各機関が一体となって取り組む課題（地域プロジェクト課題）および研究・普及・行政の各機関が役割分担して取り組む課題、地域で対応すべき課題等に整理分類し対応方針を検討した。

2) プロジェクト課題解決の取り組み

収集した地域課題や地域で重要課題となっているものの中から優先すべき課題を取り上げ、解決の主体となる機関や方法を選択し、構成3者の協力体制の下で改善のためのプロジェクト課題を設定し取り組んだ。

3) 地域が総力を挙げた取り組みへの誘導

地域課題の解決に向けて地域関係者会議を開催し、地域への説明と意見交換を行いながら関係機関の協力・分担を含め、合意形成を進めてきた。

4) 中央農業試験場における活動体制

農業試験場が道央5振興局の地域農業技術支援会議に参画して地域支援に対応するため、場内の「中央農試地域支援運営会議」等により、地域課題の検討、プロジェクト課題への参画、研究ニーズ等に対応した。

試験研究課題の実施：地域農業に密着した試験研究の推進、研究成果の迅速な普及を促進するため、試験場で実施する課題のうち、技術の体系化や現地実証に係わる試験について、農業改良普及センター、地元市町村、農業関係機関、農業者等の協力・支援を得ながら、試験場の研究員と連携して実施した。

平成27年度は、以下の試験研究課題を実施した。

1) 革新的技術導入による地域支援 東胆振管内における直播てんさいに対する分施肥技術の実証（平成27年～28年）

2) 道産小麦の需要を拡大する次世代品種の開発促進と生産安定化（4. 硬質秋まき小麦「つるきち」の生育特性に対応した栽培法の確立）（平成25年～27年）

3) 醸造用ぶどうにおけるブドウつる割細菌病の生態解明

と防除対策（平成26年～28年）

4) 次世代施設園芸導入加速化支援事業に係わる技術実証試験（平成26年～28年）

5) 農業研究ニーズ情報検索システム (ARIRES) の開発（平成27年）

普及センター等への技術支援：農業改良普及センターが効率的・効果的な普及活動を展開し迅速な課題解決を図るため、その普及課題に応じて支援要請を受け、専門

項目に関する技術支援を行った。また農業試験場等で開発された新技術の普及・定着と普及指導員の資質向上を図るため、普及指導員研修、新技術伝達研修などを実施した。各振興局における地域課題解決研修ではそれぞれの研修課題に参画し課題解決に向けた活動を実施した。

D 試験研究及び地域支援等活動

試験研究及び地域支援等活動 (各部担当課題の項目)

作物開発部

a) 作物グループ

畑作関係

I 品種改良試験

1. 大豆新品種育成試験

1) 大豆品種開発事業

(平成25年～31年)作物グループ(畑作)
(十勝農試と共同)

目的:耐冷性、耐湿性、病虫害抵抗性等の各種障害抵抗性を持ち、加工適性に優れた系統を選抜するための材料を養成し、新優良品種育成の基盤を作る。

2) 北海道産大豆の高品質・安定供給を目指した豆腐・納豆用品種の開発

(平成26年～30年)作物グループ(畑作)
(農産品質グループ、生物学グループ、十勝農試と共同)

目的:中後期世代系統の特性を調査し、耐湿性、病虫害抵抗性等の各種障害抵抗性を持ち、高品質で安定多収な豆腐、納豆用品種を育成する。

3) ゲノム情報を活用した豆類複合抵抗性品種の開発強化

(平成25年～27年)作物グループ(畑作)
(生物学グループ、十勝農試と共同)

目的:DNA マーカーを積極的に活用して障害抵抗性等の選抜、検定を強化し、育種の効率化を図ることによって、大豆品種の早期育成を促進する。

4) 畑作物の地域適応性検定試験

(昭和29年～継続)作物グループ(畑作)

目的:十勝農試で育成した大豆の有望系統について、道央管内における特性を明らかにする(系統適応性検定試験、奨励品種決定基本調査)。

5) 奨励 大豆

(昭和51年～継続)作物グループ(畑作)

目的:大豆の有望系統について、現地における適応性を

検定し、優良品種決定に資する(奨励品種決定現地調査)。

6) 大豆における開花期耐湿性の育種素材開発と関連マーカーの実用性検証

(平成27年～31年)作物グループ(畑作)

(生物学グループ、十勝農試豆類グループと共同)

目的:「植系32号」由来の育成系統から農業特性に優れた系統を育成すること、新規遺伝資源やその後代系統から新たな耐湿性育種素材を得ること、「植系32号」が保持する耐湿性に連鎖するDNA マーカーを用いた耐湿性選抜の可能性を明らかにする。

7) ダイズの難解析形質を対象としたゲノム選抜育種法の開発

(平成26年～29年)作物グループ(畑作)
(生物資源研と共同)

目的:「フクユタカ」を遺伝的背景に持つ品種系統について、収量性によるアソシエーション解析を行い、多収マーカーを探索するとともに、可能性のあるマーカーの検証を行う。

2. 豆類新品種育成試験

1) 道央・道南地域に適した複合病害抵抗性、高品質、多収小豆品種の開発強化

(平成26年～28年)作物グループ(畑作)
(農産品質グループ、十勝農試、上川農試と共同)

目的:道央、道南地域向けの茎疫病圃場抵抗性を含めた土壤病害複合抵抗性を有した、高品質で多収な小豆有望系統を選抜する。

2) 畑作物の地域適応性検定試験

(昭和29年～継続)作物グループ(畑作)

目的:小豆の有望系統について地域適応性を検定し、優良品種決定に資する(奨励品種決定基本調査)。

3) 奨励 小豆

(昭和46年～継続)作物グループ(畑作)

目的:小豆の有望系統について現地における適応性を検討し、優良品種決定に資する(奨励品種決定現地調査)。

3. 麦類新品種育成試験

1) 道産小麦の需要を拡大する次世代品種の開発促進と生産安定化

(平成25年～27年) 作物グループ (畑作)

(生物工学・農産品質・予察診断・クリーン病害虫・栽培環境・地域技術グループ、北見・上川・十勝農試と共同)

目的：高品質で、赤かび病、赤さび病、穂発芽およびコムギ縞萎縮病などの抵抗性が優れる小麦を開発促進する。初冬まき栽培における特性を明らかにする。

2) 小麦育種研究に係る系統適応性・特性検定試験

(平成27年) 作物グループ (畑作)

(上川農試と共同)

目的：北農研が育成した秋まき小麦の有望系統について、生産力その他諸特性を調査し、適応性を検定する。

3) 北海道に適応した障害や病害に強く加工適性に優れた小麦品種の開発

(平成26年～30年) 作物グループ (畑作)

(北見農試、上川農試、十勝農試と共同)

目的：北見農試で育成された有望系統について、生産力およびその他の諸特性を調査し、道央地域における適応性を検定する。

4) 畑作物の地域適応性検定試験

(昭和29年～継続) 作物グループ (畑作)

目的：試験研究機関により育成された秋まきおよび春まき小麦有望系統について、その特性、生産力、地域適応性を検定し、優良品種決定に資する(奨決基本調査、奨決現地調査)。

5) 奨決 麦類

(昭和29年～継続) 作物グループ (畑作)

目的：試験研究機関により育成された有望系統について、現地における適応性を検定し、優良品種決定に資する(奨決現地調査)。

6) 春まき小麦の品種選定試験

(平成23年～27年) 作物グループ(畑作)

(クリーン病害虫グループ、北見・上川・十勝農試と共同)

目的：民間育成系統について、その特性、生産力および地域適応性を検定し、優良品種決定に資する。

4. ばれいしょ新品種育成試験

1) 畑作物の地域適応性検定試験

(昭和29年～継続) 作物グループ (畑作)

(北見農試、北農研センターと共同)

目的：北農研センターおよび北見農試で育成した有望系統について、道央地域における適応性を検定する(奨決基本調査)。

2) 奨決 馬鈴しょ

(昭和42年～継続) 作物グループ (畑作)

目的：北農研および北見農試で育成した有望系統について、道央地域の現地における適応性を検定し、優良品種決定に資する(奨決現地調査)。

3) 馬鈴しょ輸入品種等選定試験

(平成23年～27年) 作物グループ (畑作)

目的：生食用、加工用の有望系統について、道央地域における適応性を検定し、優良品種決定に資する。

4) 馬鈴しょ育成系統の早期肥大性検定試験

(平成27年～29年) 作物グループ(畑作)

目的：北見農試が育成した有望系統の早期肥大性を明らかにする。

5. てんさい新品種育成試験

1) 気候変動に対応したテンサイ安定生産に向けた高度病害抵抗性品種の開発

(平成26年～30年) 作物グループ (畑作)

(北見農試と共同)

目的：北農研センター育成系統の黒根病抵抗性を検定し、優良品種決定に資する。

2) てん菜輸入品種検定試験

(平成26年～30年) 作物グループ (畑作)

目的：輸入品種の黒根病抵抗性を検定するとともに、現地における適応性を検定し、優良品種決定に資する。

6. 特用作物新品種育成試験

1) 畑作物の地域適応性検定試験

(平成22年～継続) 作物グループ(畑作)

目的：試験研究機関により育成されたそば有望系統並びに主要品種について、主要産地における地域適応性を検定し、優良品種決定に資する(奨決現地調査)。

II 豆類新優良品種普及促進事業

1. 普及促進 豆類

(昭和41年～継続) 作物グループ (畑作)

目的：豆類の有望系統について種子増殖を行い、新品種の早期普及を図る。

果樹関係

I 果樹品種改良試験

1. おうとう品種改良試験

(平成2年～継続) 作物グループ (果樹)

目的：本道に適した大玉で良品質の優良な品種を育成する。

2. 外観及び食味に優れたおうとう新品種の開発強化と普及促進

(平成27年～34年) 作物グループ (果樹)

目的：育成系統の果実品質や肥大性を早期に把握すると共に新品種の苗木供給を迅速に行う。

3. 寒地向けりんご品種の生産安定化試験

(平成20年～27年) 作物グループ (果樹)

1) 寒地向け新品種選定試験

目的：りんご導入品種・系統の本道における適応性を明らかにし、本道に適する品種を選定する。

4. ニーズに即した高品質ぶどうの品種選定と安定生産技術の開発

(平成20～27年) 作物グループ (果樹)

1) ニーズに即した醸造用および生食用ぶどうの新品種選定

目的：北海道で高品質果実を安定生産できる醸造用および生食用ぶどう品種を選定する。

5. 果樹地域適応性検定試験

(昭和56年～継続) 作物グループ (果樹)

目的：選抜された有望系統・品種の道内各地における適応性を明らかにする。

6. 特産果樹品種比較試験

(昭和38年～継続) 作物グループ (果樹)

目的：国内・国外から導入した西洋なし、ブルーベリー品種について、本道における適応性を明らかにする。

7. 果樹わい性台木の特性調査

(昭和55年～継続) 作物グループ (果樹)

目的：国の内外で育成された台木の特性と本道における適応性を明らかにする。

8. 平成27年度りんご育種研究に係る系統適応性・特性検定試験

(平成27年) 作物グループ (果樹)

目的：農研機構果樹研究所育成のりんご新系統について北海道における適応性を検討する。

II 果樹栽培法改善試験

1. 寒地向けりんご品種の生産安定化試験

(平成20年～27年) 作物グループ (果樹)

2) 寒地における安定生産・省力管理技術の開発

目的：耐雪型樹形および省力・低コスト栽培法を検討する。

2. ニーズに即した高品質ぶどうの品種選定と安定生産技術の開発

(平成20～27年) 作物グループ (果樹)

2) 醸造用ぶどうの高品質安定生産を目指した収量制限栽培法の開発

目的：早期成木化を目的とした栽培管理技術、果実品質と収量の安定性を重視した着果管理技術を検討する。

3. 高級醸造用ぶどう品種の地域適応性と高品質栽培法

(平成25年～28年) 作物グループ (果樹)

目的：高級醸造用ぶどう品種の道内産地での適応性および栽培法について検討する。

4. ブルーベリーの高品質安定栽培技術の確立

(平成24年～29年) 作物グループ (果樹)

目的：高品質果実を安定的に生産するために整枝剪定方法や樹勢回復方法、樹形の再構築法を確立する。

b) 生物工学グループ

I 組織培養技術による作物新育種素材・品種の開発

1. 道産小麦の需要を拡大する次世代品種の開発と生産安定化

1) 道産小麦の需要を拡大する中華めん・パン用品種の開発促進

(平成25年～27年) 生物工学グループ

(北見農試と共同)

(1) パン・中華めん用品質の選抜強化

③ 半数体育種法を活用した良質系統の開発促進

目的：加工適性が優れる硬質小麦品種開発を促進するため、有望な交配組み合わせについて薬培養法等を用いて半数体倍加系統を作出して早期に遺伝的な固定をはかり、育種年限を短縮化する。この際、作出個体の品質関連遺伝子の有無をDNAマーカーで検定し、効率的な選抜を行う。

2) 日本めん用等小麦の開発促進と生産安定化

(1) 気象変動に対応したコムギ縞萎縮病および赤かび病抵抗性の選抜強化

① DNAマーカーと半数体育種法を活用した抵抗性系統の選抜強化

目的：コムギ縞萎縮病、赤かび抵抗性がともに“やや強”の抵抗性を有する系統の選抜を強化する。

II 作物の遺伝子解析と利用に関する試験

1. 多様なニーズに対応する米品種並びに栽培技術早期確立 III

1) ブランド米など極良食味品種の開発強化

2) 業務用多収米および加工用米品種の開発強化

(平成26年～30年) 生物学グループ

(上川農試と共同)

目的：適度なアミロース低下効果を持つ*qAC9.3*およびいもち病抵抗性DNAマーカーを用いて分離系統の排除および早期固定化を行うとともに、薬培養A2世代の選抜を行う。

2. 新たな簡易米飯評価法を用いた実需ニーズに対応した業務用多収品種の開発

2). 新たな簡易米飯評価法を用いた有望系統の適性評価とDNAマーカー検定

(平成27年～31年) 生物学グループ

(上川農試と共同)

目的：業務用米有望系統について、用途適性を明らかにする。また、低老化性やいもち病抵抗性に関するDNAマーカーを用いて、品種開発を効率的に進める。

3. 道産小麦の需要を拡大する次世代品種の開発と生産安定化

1) 道産小麦の需要を拡大する中華めん・パン用品種の開発促進

(平成25年～27年) 生物学グループ

(北見農試と共同)

(1) パン・中華めん用品質の選抜強化

① 生地物性改良による選抜強化

目的：パン・中華めん用硬質小麦に対する需要に応えるため、加工適性が優れる硬質小麦品種開発を促進する。

(2) パン・中華めん用小麦の雨害等耐性強化

② 赤かび病抵抗性等の検定強化

目的：硬質小麦の安定生産のため、雨害や茎葉病害に対する耐性が優れる小麦の開発を強化する。

2) 日本めん用等小麦の開発促進と生産安定化

(平成25年～27年) 生物学グループ

(作物開発グループと共同)

(1) 気候変動に対応したコムギ縞萎縮病および赤かび病抵抗性の選抜強化

② 現地多発圃場におけるコムギ縞萎縮病抵抗性の検定

目的：コムギ縞萎縮病がやや強以上の抵抗性を有する系統の選抜を強化する。

(2) 日本めん用および菓子用品質の選抜強化

目的：品質に優れ、病害抵抗性に優れたポスト「きたほなみ」品種の早期開発のため、製粉性や製めん性に関する選抜を強化する。菓子用小麦品種の開発を促進する。

4. 麦類および飼料作物の有用遺伝子の同定とDNAマーカーの開発

TRS1003 麦類縞萎縮病抵抗性遺伝子の単離と機能解明

(平成25年～平成27年) 生物学グループ

(生物研、岡山大学、福岡県総試と共同)

目的：コムギ縞萎縮病抵抗性品種である「Madsen」が有する3BS上の抵抗性遺伝子を単離する。

5. 春まき小麦の日長反応性を決定する遺伝子の解析

(平成27年) 生物学グループ

目的：日長反応性が強く出穂期が安定している品種「春よ恋」の日長反応性に関する遺伝解析を行う。

6. 北海道産大豆の高品質・安定供給を目指した豆腐・納豆用品種の開発

(平成26年～30年) 生物学グループ

(作物グループ、農産品質グループ、十勝農試、とかち財

団、北海道農政部と共同)

目的：中期世代系統について、耐病虫性・障害抵抗性に関するマーカー検定を実施し、抵抗性を評価する。

7. 温暖化の進行に適応する品種・育種素材の開発

3201 大豆における開花期耐湿性の育種素材開発と関連マーカーの実用性検証

(平成27年～31年) 生物工学グループ
(作物グループ、十勝農試と共同)

目的:「植系32号」が保持する開花期耐湿性QTLの有効性を検証する。

8. ゲノム情報を活用した豆類複合抵抗性品種の開発強化

(平成25年～27年) 生物工学グループ
(作物グループ、十勝農試と共同)

目的:ゲノム情報を活用しながら抵抗性遺伝資源の探索および新たなマーカーの開発を行うとともに、既存のマーカーも利用して豆類の耐病虫性・障害抵抗性を効率的に選抜する。

9. アズキ茎疫病菌抵抗性のマーカー開発とDNAマーカー選抜による小豆重要土壌病害抵抗性選抜の効率化

(平成26年～28年) 生物工学グループ
(十勝農試、上川農試と共同)

目的:茎疫病菌抵抗性を選抜できるDNAマーカーを開発する。また、落葉病抵抗性および萎凋病抵抗性DNAマーカーを利用することにより、小豆の重要土壌病害複合抵抗性選抜を効率化する。

10. 小豆におけるダイズシストセンチュウ抵抗性の選抜強化とDNAマーカーの開発

(平成27年～2年) 生物工学グループ
(十勝農試、北農研、生物研と共同)

目的:農業形質の優れたSCN抵抗性系統を選抜する。SCN抵抗性に関するQTLを探索し、DNAマーカーを開発する。SCN抵抗性小豆のSCN密度低減効果を確認することにより、SCN抵抗性小豆の有用性を明らかにする。

11. DNAマーカーによる馬鈴しょ耐病虫性品種の開発強化

(平成26年～28年) 生物工学グループ
(北見農試と共同)

目的:DNAマーカー選抜に供試する個体数を前課題より増加し、複合抵抗性を持つ品種の開発を強化する。

12. 長期貯蔵性に優れたポテトチップス用馬鈴しょ品種の開発強化

2) ジャガイモシストセンチュウ抵抗性選抜試験

(平成23年～27年) 生物工学グループ
(北見農試と共同)

目的:長期貯蔵可能なポテトチップ原料用の有望系統を速やかに品種化・普及するために、DNAマーカーにより早期世代系統のジャガイモシストセンチュウ抵抗性を検定する。

13. 大豆及び畑作物の有用遺伝子の同定とDNAマーカーの開発

SFC3002 パレイシヨ重要病害虫の抵抗性遺伝子を選抜するDNAマーカーの開発及びそれらを利用した育種素材の開発

(平成25年～27年) 生物工学グループ
(北農研、長崎県農技センターと共同)

目的:PVY抵抗性遺伝子、PCN抵抗性遺伝子を選抜する既存のDNAマーカーをより高精度化し育種の効率化を図る。

14. DNAマーカーなどを利用した馬鈴しょ遺伝資源の特性評価

(平成26～28年) 生物工学グループ

目的:遺伝資源、育成系統を組織培養で維持し、大量増殖が容易な系統を探索する。また、DNAマーカーを利用して各種病害虫抵抗性遺伝子の有無を調査し、リストを作成する。農業特性に関連するDNAマーカーを探索する。

15. ジャガイモシロシストセンチュウの防除技術の開発

3) 国内遺伝資源における抵抗性遺伝子の探索及び育種利用と海外遺伝資源の導入に向けた抵抗性品種・系統の選定

(2) DNAマーカー等による抵抗性遺伝子の探索

(平成27年) 生物工学グループ
(北農研と共同)

目的:DNAマーカーを利用して、保有する遺伝資源の中からジャガイモシロシストセンチュウの抵抗性素材候補を探索する。

c) 農産品質グループ

1. 多様なニーズに対応する米品種並びに栽培技術早期確立 Ⅲ

1) 業務用多収米および加工用米品種の開発強化

(3) 業務用・加工用米適性評価

(平成26年～30年) 農産品質グループ
(水田農業グループと共同)

目的:業務用米適性評価手法による業務・加工用米育成系統の品質検定を実施し、品種開発に寄与する。

2. 道産小麦の需要を拡大する中華麺・パン用品種の開発強化

1) 中華麺・パン用等小麦の品質選抜強化

(平成25年～27年) 農産品質グループ
(北見農試、生物工学グループと共同)

目的:中華めん・パン用高品質秋まき硬質小麦の品質選抜をより効率的に行うため、加工適性に関わる要因に

ついて解析する。

2) 生産安定化に向けた障害耐性品種の開発強化

(平成25年～27年) 農産品質グループ
(北見農試、生物工学グループと共同)

目的：春まきおよび秋まき小麦品種系統の α アミラーゼ活性検定を実施する。

3. インゲンマメの難消化性成分「ルミナコイド」に着目した機能性成分の実態と変動要因の解明

(平成26～28年) 農産品質グループ

目的：インゲンマメが有する機能性成分、主にルミナコイドに着目し、機能性成分の含有量、変動要因などの特性を明らかにする。

4. 菜豆のサラダ用加工特性の解明と加工適性・耐病性に優れる品種開発の強化

(平成25～27年) 農産品質グループ
(十勝農試、豆類グループと共同)

目的：煮熟後の粒色、煮崩れ等の加工適性を明らかにし、選抜に利用可能な加工適性評価法を開発する。

5. 道央・道南地域に適した複合病害抵抗性、高品質、多収小豆品種の開発強化

3) 道央・道南地域に適した系統の中期世代以降の加工適性検定

(平成26～28年) 農産品質グループ
(十勝農試、豆類グループと共同)

目的：中央農試で生産した中期世代以降の小豆系統の加工適性を検定する。

6. 素材・加工・流通技術の融合による新たな食の市場創成（戦略研究）

(平成27年～31年) 農産品質グループ
(十勝農試、上川農試、北見農試、花野技セ、食加研、工試と共同)

目的：民間企業および消費者ニーズを反映した食品開発アイデアを起点とし、道総研技術シーズを融合した連携協働体による多角的な商品開発を行う。

7. 新たな簡易米飯評価法を用いた実需ニーズに対応した業務用多収品種の開発

(平成27年～30年) 農産品質グループ
(水田農業グループ、上川農試と共同)

目的：有望系統について、「炊き増え評価」として炊飯米の重量、体積、気相量を調査するとともに、テクスチャーアナライザーを用いて「べたつき評価」を行い、品種化に向けた業務用米適性を明らかにする。

8. 北海道産大豆の高品質・安定供給を目指した豆腐・納豆用品種の開発

(平成26年～28年) 農産品質グループ
(十勝農試と共同)

目的：豆腐加工適性に優れた品種開発のための品質分析を行う。

9. 春夏まきレタス品質向上のための品種選定および施肥技術の開発

(平成26年～28年) 農産品質グループ
(花野技セと共同)

目的：レタスのテクスチャーおよび苦味について客観的評価技術を開発するとともに、食味に優れた品種の選定および品質向上のための施肥技術を確立する。

遺伝資源部

I 植物遺伝資源に関する試験

1. 植物遺伝資源の保存管理

(平成27年～31年) 遺伝資源G

(1) 種子遺伝資源の増殖と保存

目的：育成完了系統を含めた新規受入遺伝資源を増殖して保存するとともに、保存量が減少あるいは発芽率が低下した遺伝資源を再増殖する。

(2) 植物遺伝資源の発芽力検定

目的：新規受入および再増殖する遺伝資源の発芽力を検定する。

(3) 植物遺伝資源の来歴・特性情報の管理

目的：植物遺伝資源の利活用を図るため来歴・特性・在庫情報をカード型データベースで管理するとともに新規の遺伝資源のこれら情報を追加登録する。また、このカード型データベースに、育成場が保有するデータを連結のうえ、効率的な検索が可能なりレーショナルデータベースを補完的に構築し、農研本部内で共有する。

(4) 遺伝資源の提供

目的：道総研農試、道内外の関係機関、研究機関等からの依頼（試験研究用、教育用、普及展示用、地域振興用）に応じて、道総研農試植物遺伝資源提供要領に則り、保存遺伝資源を提供する。

2. 道産小麦の需要を拡大する次世代品種の開発促進と生産安定化

—褐色雪腐病抵抗性の検定—

(平成25年～27年) 遺伝資源G

(北見農試等と共同)

目的：パン・中華めん用小麦の改善点である耐雪性のうち、褐色雪腐病の抵抗性について検定し、“中”を目標に系統の選抜を強化する。

II 優良品種種子生産事業

1. 基本系統・育種家種子の維持増殖

(昭和27年～継続) 遺伝資源G

目的：水稲、麦類および豆類の優良品種について、基本系統の選定により育種家種子を作出するとともに、基本系統と育種家種子の維持増殖を行う。

2. 食用ゆりウイルスフリー原原種親球の維持

(昭和53年～継続) 遺伝資源G

目的：ウイルスフリー化処理を行った食用ゆりの原原種球を維持する。

III 予備増殖および新優良品種普及促進事業

(昭和41年～継続) 遺伝資源G

目的：水稲、麦類および豆類の新品種の普及促進のため、担当農試において優良品種候補の有望系統について、原種圃および一般採種圃へ供給する種子を予め準備するために増殖を行う。

IV その他の試験

1. 食用ユリ原原種のエライザ検定

(平成8年～継続) 遺伝資源G

目的：ホクレン農業協同組合連合会が実施している食用ユリ原原種生産の増殖球について、エライザ法を用いてウイルス病の感染がないことを確認する。

生産研究部

I 水稲新品種育成試験

1. 水稲品種開発事業

(平成25年～平成31年) 水田農業グループ

目的：本道中央部は、初期生育が不良でいもち病が多発しやすい生育環境にある。このため、耐冷良質で、なおかつ初期生育が旺盛でいもち病耐病性を具備した道央地帯向けの中晩生品種を育成する。

2. 障害に強く高品質で安定生産可能な北海道米品種の開発促進

1) 中期世代における業務用・加工用系統育成の選抜強化

(平成26年～31年) 水田農業グループ

目的：水稲の中期世代の選抜強化により、収量性・耐病性・耐冷性に優れた良質で業務・加工用途に適した食味を有する品種開発を促進する。

3. 水稲直播栽培用高位安定性品種の開発強化

(平成26年～30年) 水田農業グループ

目的：水稲の中期世代の選抜強化により、水稲直播栽培用品種の開発を促進する。

4. 新たな簡易米飯評価法を用いた実需ニーズに対応した業務用多収品種の開発

(平成27年～31年度) 水田農業グループ

目的：新たに開発した簡易米飯評価法を用いて、消費者が求める値頃感と美味しさを兼ね備えた、丼物と弁当用に適する業務用米多収品種を早期に開発し、全国の業務用米業界の期待に応える。

5. 奨決 水稲

(昭和29年～継続) 水田農業グループ

目的：道内各試験機関で育成した有望品種・系統の特性を明らかにし、奨励品種決定の資とする。

6. 水稲奨励品種決定現地調査

(昭和29年～継続) 水田農業グループ

目的：道内各試験機関で育成した有望な系統について、地域適応性と生産力を調査し、奨励品種並びにその普及範囲決定の資とする。

7. 水稲新優良品種普及促進事業

(昭和42年～継続) 水田農業グループ

目的：新品種を早急に普及するため、有望系統の種子を予備増殖する。

8. 平成27年度「空育181・183号」一般ほ栽培試験

(平成27年) 水田農業グループ

目的：岩見沢試験地で育成した有望系統が優良品種となった場合の早期普及を図るため、試験場が現地において一定規模での栽培試験を行い、その調査を通じて現地農業指導者が系統の特性を把握する。

II 戦略研究(エネルギー関連)

1. 農業系バイオマスエネルギーの需給量の推定及び評価手法の開発

(平成26年～30年) 生産システムグループ

目的：農業地域において、広く分散する農業残渣・廃棄物由来のエネルギー資源を有効に利活用できる技術・支援システムを開発し、地域のエネルギー自給率の向上

と振興・活性化の実現を目指した最適なエネルギーの分散型利用モデルを構築・提案することを主な目的とする。

2. バイオガス等による分散型エネルギーの供給システムおよび利活用技術の開発

(平成26年～30年) 生産システムグループ

目的：農業地域において、広く分散する農業残渣・廃棄物由来のエネルギー資源を有効に利活用できる技術・支援システムを開発し、地域のエネルギー自給率の向上と振興・活性化の実現を目指した最適なエネルギーの分散型利用モデルを構築・提案することを主な目的とする。

Ⅲ クリーン・高度クリーン・有機農業技術開発

1. 青果物における硬度クリーン農業技術の経済性と産地への導入条件

(平成26年～28年) 生産システムグループ

目的：青果物産地における高度クリーン農業技術の普及を促進するため、ブロッコリーおよびほうれんそうを対象として、高度クリーン農業技術の経済性を解明するとともに、産地における導入条件を明らかにする。

Ⅳ 多様なニーズに対応する品種改良並びに栽培技術早期確立（第3期）

2) 業務用多収米および加工用米品種の開発促進

(平成26年～30年) 水田農業グループ

目的：初期世代等における選抜強化により、収量性、農業特性、業務用炊飯適性、加工適性に優れた業務用・加工用品種の早期開発を促進する。

3) 業務用米の多収・省力栽培技術の開発 (1) 業務用米の収量変動解析と多収栽培技術の開発

(平成26年～30年、上川農試栽培環境グループと協同)

水田農業グループ

目的：新品種を含む業務用米の栽培特性を明らかにし、多収技術を開発するとともに、地域条件に対応した多収技術の総合化を図る。

3) 業務用米の多収・省力栽培技術の開発 (2) 業務用米の省力栽培技術の開発

(平成26年～30年) 水田農業グループ

目的：安定した生産量確保と水稻作付面積の維持拡大に必須である春作業の省力に寄与するため、育苗作業の省力化を目的とした水稻栽培技術を開発する。

4) 直播栽培用米品種の開発促進

(平成26年～30年) 水田農業グループ

目的：水稻の初期世代の選抜強化により、安定多収で良質な直播向け品種の開発を促進する。

V その他水田関連事業

1. 積雪寒冷地における土層改良による炭素貯留技術

(平成22年～26年度、環境保全グループと共同)

水田農業グループ

目的：積雪寒冷地帯である北海道において、土層改良や暗渠などの農地整備を活用し、農地下層に有機質資材による炭素を長期に貯留する技術を開発するとともに、農業生産や土壌環境に及ぼす影響を明らかにする。

2. 農地土壌温室効果ガス排出量算定基礎調査事業（農地管理技術検証）

水田における有機物の施用に関する調査

(平成25年～28年度) 水田農業グループ

目的：土壌や気象条件が異なる積雪寒冷地である北海道の水田地帯において、有機物施用に伴う炭素貯留とメタン・一酸化二窒素排出のトレードオフの関係を調査する。また、温室効果ガスの吸収・排出と合わせ、農業生産性確保の観点から、より望ましい営農体系を検証する。

Ⅵ 転作作物等の栽培研究

1. 平成27年度地下かんがい有効性調査

(平成26年～28年度) 水田農業グループ

目的：集中管理孔を活用した地下灌漑によるたまねぎの生育・収量への影響について明らかにするとともに、たまねぎへの地下灌漑手法を開発する。

2. 大豆多収阻害要因の実態解明と効率的な多収阻害要因改善の実証－1

(平成27年～31年) 水田農業グループ

目的：北海道の水田地帯における大豆の収量実態調査を行い、田畑輪換体系や大豆の作付頻度などの栽培管理体系についても収量への影響を評価し、低収要因を明らかにする。加えて、低収要因に対応する改善技術を検証する。

Ⅶ 農業機械研究

1. ほ場の堅密層に関する調査

(平成26年～28年) 生産システムグループ

目的：本研究では、作物生産に大きく影響するほ場の堅密化に対する踏圧層の影響とその形成要因を明らかにする。

Ⅷ 農業経営研究

1. 稲作経営の大規模化に向けた農地集積による省力化および生産費低減効果の解明

(平成26年～28年) 生産システムグループ

目的：稲作経営の大規模化を促進するため、農地集積、大区画化による省力化および生産費低減効果と効果発現の条件を解明する。

2. 水田作経営の収益構造の解明と低コスト生産体制の構築

(平成26年～27年) 生産システムグループ

目的：経営体質強化の方向を検討する基礎資料を得ることを目的として、本道水田地帯における産地戦略を整理する。さらに大規模水田作経営の収益構造を解明したうえで低コスト事例調査をおこなう。

Ⅹ バイオマスの有効利用に係る研究

1. 家畜排せつ物処理における温室効果ガス排出削減方策の総合評価

本年度実施課題なし

Ⅺ 攻めの農林水産業の実現に向けた革新的技術緊急展開事業

1. 大区画圃場での前年整地を導入した省力作業技術の確立

1) 地下水位制御を利用した乾田直播安定化技術の実証

(3) 作業期間拡大のための圃場排水不良改善技術の実証

(平成26年～27年) 水田農業グループ

目的：2種類の新しい排水改良である有材の補助暗渠機「カッティングソイラ mini」と無材の穿孔暗渠機「カットドレーン」について、農家自身による農地の排水改良技術としての有効性を検証する。

2. 業務用水稲の無代かき栽培・子実用とうもろこしを組み入れた輪作体系の実証

1) 田畑輪換における無代かき・疎植栽培による水稲作の省力・低コスト化と転換畑地力の改善

(1) 田畑輪換における無代かき・疎植栽培による高収量・省力・低コスト技術の確立

(平成26年～27年) 水田農業グループ

目的：田畑輪換を想定した畑作後(復元田)における無代かき・疎植栽培が寒地で栽培可能で、かつ増収・省力・低コストの効果を実証する。

(2) 田畑輪換における無代かき栽培による土壌物理性改善の実証とその適用性検証

(平成26年～27年) 水田農業グループ

目的：田畑輪換における無代かき栽培による土壌物理

性改善実証と適用性検証について、無代かき栽培が北海道の土壌条件や気象条件においても土壌物理性を改善し、復田1年目の栽培後も畑地土壌の性質を維持できることを実証する。

(3) 田畑輪換における無代かき栽培・輪作体系による地力維持効果の検証

(平成26年～27年) 水田農業グループ

目的：代かき栽培圃場、無代かき栽培圃場、及び、畑作物栽培年限の長い圃場と短年限で水稲を輪作体系に組み込んだ圃場において、可給態土壌養分や植物体養分吸収量などデータを取得する。

2) 省力的水田輪作体系に向けた子実用とうもろこしの省力栽培技術体系の実証と収穫機の高度利用

(1) 田畑輪換における子実用とうもろこしの安定生産技術と土壌物理性改善効果の実証

(平成26年～27年) 生産システムグループ

環境保全グループ

農産品質グループ

目的：子実用とうもろこしを組み入れた輪作体系の実証に向け、窒素施肥量による収量・品質への影響を明らかにする。

(2) 普通コンバインによる子実用とうもろこしの収穫技術と省力栽培技術体系の実証

(平成26年～27年) 生産システムグループ

目的：普通コンバインでの子実用とうもろこし収穫特性、米麦用乾燥機による乾燥特性、及び栽培体系全体の労働時間を明らかにする。

(3) 普通コンバインによる大豆収穫技術の実証

(平成26年～27年) 生産システムグループ

目的：普通コンバインでの大豆収穫において、スパイクツース式脱穀シリンダでの子実損傷割合及び収穫損失割合を明らかにする。

3. 高性能水田における乾田直播普及に向けた省力生産技術および業務用水稲・子実用とうもろこし導入による輪作体系の経営評価

2) 田畑輪換・無代かき栽培と子実用とうもろこしの導入に向けた経営評価

1. 大区画圃場での前年整地を導入した省力作業技術の確立

(平成26年～27年) 生産システムグループ

環境保全グループ

農産品質グループ

目的：実証された新技術の導入に向けて、田畑輪換・無代かき栽培と子実用とうもろこしの経営経済性を明らかにする。

かにする。実証試験協力農家を対象としたタイムスタディと生産費調査の実施、および近隣農家の経済調査を実施し、実証技術のコストに関するデータを集積する。

XI 革新事業（水田輪作）

2. 省力的水田輪作体系に向けた子実用とうもろこしの省力栽培技術体系の実証と収穫機の高度利用

（平成26年～27年）生産システムグループ
環境保全グループ
農産品室グループ

目的：田畑輪換への子実用とうもろこし導入による安定栽培及び土壌物理性改善への有効性を実証するとともに、軟弱地への適応性を高めた普通型コンバインによる高能率収穫体系、及び既存の米麦用乾燥機による乾燥調整体系を実証する。

3. 田畑輪換・無代かき栽培と子実用とうもろこしの導入に向けた経営評価

（平成26年～27年）生産システムグループ

目的：田畑輪換・無代かき・疎植水稻栽培技術と子実用とうもろこしの導入に向けて、実証技術の経営経済性を明らかにする。

XII 農業機械性能調査

1. トラクタ及び作業機械施設性能試験

ア. 色彩選別機（小豆）（CSV600B1）の性能

（昭和54年～継続）生産システムグループ

目的：新規に導入されるトラクタ、作業機、施設などの性能を明らかにし、導入利用上の参考に供する。

XIII 新農業資材実用化試験

1. 除草剤及び生育調節剤

1) 水稻用除草剤

（平成22年～継続）水田農業グループ

目的：新水稻除草剤の実用性を検討する。

2. その他資材

1) 水稻育苗用ロックウールマット「こめパワーマット」

（平成26年～平成28年度）水田農業グループ

目的：水稻中苗育苗マット「こめパワーマット」の育苗適応性を検討する。

農業環境部

I. 環境保全に関する調査及び試験

1. 多様な地域・用途に対応した飼料用とうもろこし安定栽培マップの作成

（平成25～27年）環境保全G

（畜試、根釧農試、上川農試、北見農試と共同）

目的：道内における飼料用とうもろこしの安定的増産に資するため、汎用性の高いとうもろこし生育・登熟と気象との関係モデルを作成し、用途別の安定栽培マップ（適期収穫可能性確率等を1km四方単位で一般のパソコンで閲覧できるシステム）を開発する。また、品種熟期の統一表示法を策定する。

2. 道産米の国際競争力強化と持続的輪作体系の両立に向けた実証 2-2) 省力的水田輪作体系に向けた子実用とうもろこしの省力栽培技術体系の実証と収穫期の高度利用

（平成26～27年度）環境保全G
（生産システムG、農産品質Gと共同）

目的：田畑輪換への子実用とうもろこし導入による安定栽培および土壌物理性改善への有効性を実証するとともに、軟弱地への適応性を高めた普通型コンバインによる高能率収穫体系、及び既存の米麦用乾燥機による乾燥調整体系を実証する。

3. 秋まき小麦の不耕起栽培におけるリビングマルチの活用方法

（平成26～28年）環境保全G

目的：秋まき小麦の不耕起栽培におけるリビングマルチ導入方法およびその効果を明らかにする。

4. 安全・安心なかぼちゃ生産に向けた土壌残留ヘプタクロル類診断技術の開発

（平成26～28年）環境保全G

目的：ヘプタクロル類の残留基準値を超過するかぼちゃが生産されるリスクを低減するため、作付適否を事前に判断するための低コストで精度の高い土壌診断法を実用化し、診断マニュアルとして普及する。

5. 農薬残留対策総合調査

（平成27年～）環境保全G

目的：土壌残留農薬が後作物に与える影響を的確に把握する手段を確立するための基礎データを収集する。

6. 環境保全型有機質資源施用基準設定調査（土壌機能モニタリング調査）

（平成11年度～）環境保全G、栽培環境G
（各場の農業環境関係Gと共同）

目的：北海道の耕地土壌の理化学性の実態、変化の方向および土壌管理のための留意点を明らかにし、適正な管理および土壌肥沃度の維持に役立てる。

7. 農地土壌炭素貯留等基礎調査事業（農地管理実態調査）
（平成25～32年）環境保全G、栽培環境G
（各場の農業環境関係Gと共同）

目的：全国の農耕地における土壌炭素の貯留量と営農管理による変動を明らかにする一環として、北海道の農耕地で調査を行う。

8. 酸性雨モニタリング（土壌・植生）調査
（平成25、27年）環境保全G
（林業試、環科研と共同）

目的：環境省の計画に基づき、日本の代表的な森林における土壌及び森林のベースラインデータの確率及び酸性雨による生態系への影響を早期に把握するために土壌モニタリングを実施する。

9. 豪雨に対応するためのほ場の排水・保水機能活用手法の開発（2）-2）北海道の大規模畑における土壌流亡・湿害を緩和するほ場の保水・排水機能改善技術の開発

（平成27～31年）環境保全G
（上川農試、農工研と共同）

目的：道内の丘陵地土壌における土壌流亡を緩和するため、降雨の表面流去を抑え地中浸透を促進する新たな土層改良手法技術と既存技術を組み合わせた、総合的な土壌管理技術を確立する。

10. ほ場の堅密層に関する調査 1)補助暗きよによる疎水材暗きよの機能回復調査

（平成26～28年）環境保全G
（生産システムGと共同）

目的：道営土地改良事業による補助暗きよ整備について、その効果と持続性を把握する。

11. 酸性硫酸塩土壌地域における区画整理後のpH改善対策手法の検討調査

（平成27～29年）環境保全G

目的：道営土地改良事業で整備したほ場で発生した酸性硫酸塩土壌による低pH障害の対策について、アルカリ資材の適正施用量および客土の効果について検討する。

12. 農業農村整備事業に係る土壌調査
（昭和40年～）環境保全G、栽培環境G
（各場の農業環境関係Gと共同）

目的：道営農業農村整備事業における水田、畑地、草地の土地改良事業の地区計画樹立にあたり、適切な土地改良

方策を実施するための指針を示すため、土壌調査を行う。また、整備済み地域における経済効果を検討するため土壌調査を行う。

13. 有機質資材の分析（依頼試験）
（明治41年～）環境保全G

目的：農業関連団体、自治体、民間会社、農業者、一般人等の依頼により、土壌、肥料、農畜産物等について、専門的知識、経験と分析機器を用いて各種分析を行う。

14. 肥料分析委託業務
（平成元年～）環境保全G

目的：北海道農政部の委託により、収去肥料、登録肥料についての分析業務を肥料取締法に基づいて行い、分析結果を報告する。

II. 栽培環境に関する調査及び試験

1. 多雪地帯の有機栽培たまねぎに対する安定多収を目指した春全量施肥法の確立

（平成27～28年）栽培環境G

目的：多雪地帯の有機栽培たまねぎを対象に、安定多収が可能となる有機質資材の春全量施肥法を確立し、それに基づく窒素施肥対応を策定する。

2. 有機栽培畑のリン酸肥沃度を考慮した有機質資材施用法の確立

（平成27～30年）栽培環境G

目的：有機栽培畑におけるリン酸肥沃度の適正化に資するため、リン酸肥沃度に応じた有機質資材施用法（増減肥法）を確立し、窒素、カリ施肥量も考慮した施肥対応技術の総合化を図る。

3. クリーン農業普及拡大促進事業 1)移植たまねぎの安定生産のための窒素分施肥技術の確立

（平成25～27年）栽培環境G

（北見農試と共同）

目的：たまねぎの安定生産および環境への窒素負荷の低減を図る効率的な施肥法として、現行の基肥を基本とする体系に代わる窒素分施肥技術を確立する。

4. ブロッコリー栽培における化学合成農薬・化学肥料削減技術の高度化

（平成26～28年）栽培環境G

（クリーン病害虫Gと共同）

目的：ブロッコリー栽培における化学合成農薬と化学肥料の施用量を5割以上削減する高度クリーン農業技術

を開発する。

5. 多収阻害要因の診断法及び対策技術の開発 2. 麦類の多収阻害要因の解明と改善指標の開発に基づく安定多収生産技術の確立 秋まき小麦の大豆畦間ばらまき栽培条件下における多収阻害要因の解明と改善指標の開発及び対策技術の確立

(平成27～31年) 栽培環境G

(中央農業総合研究センターと共同)

目的: 大豆畦間ばらまき栽培における多収阻害要因の解明と改善指標を示すとともに、指標に基づいた対策技術を開発する。

6. 道産小麦の需要を拡大する次世代品種の開発促進と生産安定化 1) パン・中華めん用小麦の開発促進と普及支援 (4) 硬質秋まき小麦「つるきち」の生育特性に対応した栽培法の確立

(平成25～27年) 栽培環境G

(地域技術G・十勝農試・北見農試と共同)

目的: 硬質秋まき小麦「つるきち」の安定多収、適正タンパク質含有率が確保できる栽培法を確立する。また、生産実績を活用した窒素施肥設計技術の「つるきち」への適用性を検討し、汎用性の高い窒素施肥設計ツールを提示する。

7. 農業気象情報の創出と作物生育・病虫害予測モデルに基づく作物栽培管理支援システムの開発 2. 作物生育・病虫害モデルを活用した気象対応型栽培技術の開発 6) 積雪地帯における小麦の気象対応型栽培技術の開発

(平成26～30年) 栽培環境G

(北農研と共同)

目的: 小麦生産量および品質の安定化のため、気象条件が生育・収量・子実タンパク質含有率に及ぼす影響を明らかにし、予測モデルを開発する。

8. 突発及び新発生病害虫診断試験

(昭和50年度～) 栽培環境G

(クリーン病害虫G・予察診断Gと共同)

目的: 突発または新発生病害虫の診断を行い、農作物の被害を最小限にとどめる。

9. 農業資材に関する試験(肥料及び土壌改良材)

(1) たまねぎに対する肥効調節型窒素肥料「ハイパーCDU(細粒)-2」の施用効果

(平成26～28年) 栽培環境G

目的: たまねぎに対する肥効調節型窒素肥料「ハイパー

CDU(細粒)-2」の施用効果(生育・収量)を検討する。

(2) 秋まき小麦に対する硝酸化成抑制剤入り化成肥料「Dd708」の施用効果

(平成26～27年) 栽培環境G

目的: 秋まき小麦に対する緩効性窒素肥料「Dd708」の施用効果(生育・収量)を検討する。

病虫害部

I 水稲病害虫試験

1. 水稲の直播栽培における初期害虫の効率的防除法の確立

(平成27年～29年) クリーン病害虫G

目的: 北海道の水稲の直播栽培における初期害虫の効率的防除法を確立する。

2. 夏季高温で多発する水稲の紋枯病および疑似紋枯病の発生実態解明および防除対策の確立

(平成27年～29年) クリーン病害虫G

(道南農試生産環境Gと共同)

目的: 水稲の紋枯病・疑似紋枯病の発生・被害の実態を解明し、紋枯病および疑似紋枯病の防除対策を確立する。

II 畑作病害虫試験

1. 北海道の春まき小麦地帯におけるT-2トキシン、HT-2トキシン産生菌の分布実態の解明

(平成25年～29年) クリーン病害虫G

目的: これまでその実態が不明であった、石狩・空知地方を中心とした春まき小麦地帯における小麦のT-2トキシン、HT-2トキシン汚染に關与する*Fusarium*属菌(赤かび病菌)の分布実態を明らかにする。

2. 道産小麦の需要を拡大する次世代品種の開発促進と生産安定化

1) パン・中華めん用小麦の開発促進と普及支援

(2) パン・中華めん用小麦の雨害等耐性強化

2) 赤かび病抵抗性等の検定強化

(2) 赤かび病抵抗性検定

(平成25年～27年) クリーン病害虫G

(北見農試等と共同)

目的: 赤かび病は病原菌が産生するかび毒(デオキシニバレノール; DON)の暫定基準値が設定され、重要病害となっている。本病に対する小麦の抵抗性は十分とはいえず、抵抗性の優れる品種開発が求められている。そこで、

早い世代からのDNAマーカー選抜の利用や抵抗性検定により、効率的に赤かび病抵抗性“やや強”以上および「春よ恋」よりもDON汚染程度の低い系統を選抜する。

3. 春まき小麦の品種選定試験

(平成23年～27年) クリーン病害虫G
(作物G等と共同)

目的：ホクレン育成系統の特性、生産力および地域適応性を検定し、奨励品種決定に資する。

4. スイートコーンの褐色腐敗病防除対策の確立

(平成26年～28年) クリーン病害虫G

目的：スイートコーンの新発生病害である褐色腐敗病の被害を低減するため防除対策を確立する。

5. 小豆におけるダイズシストセンチュウ抵抗性の選抜強化とDNAマーカーの開発

(平成27年～29年) クリーン病害虫G
(北農研・十勝農試豆類G等と共同)

目的：農業形質の優れたダイズシストセンチュウ(SCN)抵抗性系統を選抜する。SCN抵抗性に関するQTLを探索し、DNAマーカーを開発する。SCN抵抗性小豆のSCN密度低減効果を確認することにより、SCN抵抗性小豆の有効性を明らかにする。

6. アズキ茎疫病菌のレース分布解明と検定法の改良

(平成27年～29年) クリーン病害虫G
(上川農業試験場生産環境Gと共同)

目的：道内におけるアズキ茎疫病菌レース分布を明らかにする。また、今後の茎疫病研究や育種に有用となり簡便かつ容易に判定可能な新たなレース検定方法を確立する。

7. 馬鈴しょに発生する重要ウイルスの病原性解明と検出技術の実用化

(平成26～28年) 予察診断G

目的：道内のばれいしょにおける重要ウイルスであるPVYについて病原性、系統の評価、PVS、PLRVについては効率的検出法の開発を行い、ばれいしょのウイルス病害の検出系の高度化を図る。

8. 実需者ニーズに対応した病害虫抵抗性で安定生産可能なパレイショ品種の育成

5. 有望系統の耐病虫性検定試験 ウイルス病抵抗性検定試験

(平成26年～30年) 予察診断G

目的：北農研、北見農試および長崎県農林技術開発センターで育成した馬鈴しょの有望系統について、ジャガイモYウイルス(PVY)に対する抵抗性を明らかにし、品種育成に資する。

9. 馬鈴しょ輸入品種等選定試験

(平成23年～27年) 予察診断G

目的：ばれいしょ輸入品種等のウイルス病に対する抵抗性を明らかにし、品種育成に資する。

10. コムギの土壌伝染性ウイルスの診断手法の改善による自主検診活動の支援

(平成27年) 予察診断G

目的：コムギ萎縮病ウイルスを検出する抗体を作製し、縞萎縮病、萎縮病両ウイルスの同時検出が可能となる手法を開発する。検出手法をマニュアル化して配布することにより、農業改良普及センターや農協等が主体となって実施しているコムギ縞萎縮病に対する自主健診活動の支援を強化する。

Ⅲ 園芸病害虫試験

1. 水と消石灰だけを利用した土壌生息性雑防除害虫ホウレンソウケナガコナダニの防除技術

(平成27年～29年) クリーン病害虫G

目的：先行課題で提案された、コナダニの生態(移動生態、生息環境)を利用した土壌中密度低減法および移動制御法の効果をさらに安定させるため、コナダニの餌となる藻類の抑制効果やコナダニ忌避効果を持つことが期待される消石灰などの石灰資材を用いた、コナダニ再発リスクが少なく効果の持続期間が長いコナダニ耕種的防除技術の確立を目指す。

2. たまねぎを加害するネギハモグリバエの発生生態解明および防除対策

(平成27年～29年) 予察診断G

目的：ネギハモグリバエの発生生態を解明するとともに、たまねぎにおける効果的な薬剤の探索を行い、これらに基づく防除対策を提案する。

3. ネギアザミウマの薬剤抵抗性メカニズム解明と管理技術の開発

(平成26年～30年) 予察診断G

目的：合成ピレスロイド剤抵抗性個体群の発生が問題になっているネギアザミウマを対象に、普及現場において実施可能な合成ピレスロイド剤抵抗性の簡易検定法を開発する。開発した簡易検定法は、遺伝子診断法によりその精度を検証する。開発された簡易検定法による検定結果をもとに抵抗性個体比率を推定する。得られた抵抗性

個体比率に基づいて合成ピレスロイド剤使用の可否判断を決定し、その有効性をネギアザミウマの増殖や侵入パターン異なる作物を栽培するほ場において検証する。

4. コナガの薬剤抵抗性メカニズム解明と管理技術の開発 (平成 26 年～ 30 年) 予察診断 G

目的：連続した作型を隣接させたアブラナ科野菜栽培圃場において、コナガに対して効果の高いジアミド系薬剤を連用し、同系剤の防除効果低下の有無を確認する。連用により効果が低下した場合、他系統薬剤の防除効果を調査し、薬剤の系統間での交差抵抗性の有無を確認する。連用圃場で秋季に採集した生存個体をもとに増殖を行い、ジアミド系薬剤に対する室内検定を実施し、薬剤感受性低下の有無を確認する。また、春季におとり作物を圃場に設置し、飛来個体群を採集して薬剤感受性を検定し、得られた結果に基づく防除薬剤選定の有効性を検証する。

IV 果樹病害虫試験

1. 醸造用ぶどうにおけるぶどうつる割細菌病の生態解明と防除対策

(平成 26 年～ 28 年) 予察診断 G
(作物グループ、地域技術グループと共同)

目的：多発した場合に被害が甚大となるブドウつる割細菌病の発生生態の解明により、効率的な防除対策を確立する。

V クリーン農業開発促進事業

1. ブロッコリー栽培における化学合成農薬・化学肥料削減技術の高度化

(平成 26 年～ 28 年) クリーン病害虫 G
(栽培環境 G と共同)

目的：ブロッコリー栽培における化学合成農薬と化学肥料の施肥量を 5 割以上削減する高度クリーン農業技術を開発する。

2. 特別栽培農産物のためのだいこん病害虫の防除体系の確立

(平成 27 年～ 29 年) クリーン病害虫 G

目的：道内のだいこん栽培において、病害虫防除対策における化学合成農薬の使用を 5 割以上削減した、高度なクリーン農業技術を開発し、特別栽培だいこんの安定生産を図る。

VI 有機農業技術開発推進事業

1. 施設栽培ホウレンソウのコナダニ被害を抑制する土壌

管理法の確立

(平成 25 年～ 27 年) クリーン病害虫 G

目的：有機栽培を含む施設栽培ホウレンソウにおいて、土壌中のコナダニ個体群を制御し作物体の被害を回避する、化学農薬に依らない新たな土壌管理法を開発する。

VII 農業資材に関する試験

1. 新農業資材の実用化試験

(1) 殺菌剤・殺虫剤

(昭和 44 年～ 継続) クリーン病害虫、予察診断 G
(各農試病虫部門と共同)

目的：殺菌剤と殺虫剤について、各種病害虫に対する防除効果を査定し、実用性について検討する。

VIII 作物病害虫診断試験

1. 農作物病害虫診断試験

突発病害虫および生理障害

(昭和 50 ～ 継続)

予察診断 G、クリーン病害虫 G
(各農試病虫部門と共同)

目的：突発的に発生する病害虫による被害を防止するため、それらの診断を行うとともに、道内で新たに発生した病害虫の情報を記録し蓄積する。

IX 病害虫発生予察および植物防疫事業

1. 病害虫発生予察調査

(昭和 19 年～ 継続) 予察診断 G
(各農試病虫部門、北海道農政部技術普及課と共同)

目的：植物防疫法に基づいて、指定及び指定外病害虫の発生状況を調査して関係機関に情報提供し、病害虫防除の適正化を図る

企画調整部地域技術グループ

I 地域農業技術支援会議の活動

1. 中央農試の地域支援体制

中央農試が道央 5 振興局の地域農業技術支援会議に参画して地域支援に対応するため、場内に設置された運営体制である「地域支援運営会議」を平成 27 年 6 月 26 日に開催し、支援会議の活動、プロジェクト課題の進捗状況と成果、普及センターへの支援等について協議した。

2. 地域要望課題の収集と研究ニーズの検討

地域農業技術支援会議で収集した地域要望課題数と、それらのうち研究ニーズに分類された課題数(カッコ内)は以下の通り。

空知：10 課題 (9 課題)

石狩： 8 課題（ 2 課題）
後志： 1 課題（ 0 課題）
胆振： 4 課題（ 0 課題）
日高： 3 課題（ 0 課題）

3. 地域農業技術支援会議によるプロジェクト課題

(1) 土壌透排水改善技術の現地実証 たまねぎ（空知地域農業技術支援会議） 平成 25～27 年

目的：土壌物理性が劣るたまねぎほ場において、既存技術等を導入することによって土壌物理性が改善されて品質・収量が向上することを実証する。また、改善技術の資料を作成して生産者部会内で普及することによってたまねぎ産地の再生を図る。

(2) 水稲直播栽培技術の展示実証（空知地域農業技術支援会議） 平成 24～27 年

目的：空知管内で比較的気象条件が劣る深川市多度志宇摩地区において水稲直播栽培技術を実証し、空知における水稲直播栽培の可能性を拡大する。

(3) 秋まき小麦紅色雪腐病の防除対策の検討（石狩地域農業技術支援会議） 平成 27～28 年

目的：石狩管内の秋まき小麦は「ゆめちから」の割合が高いが、雪腐病の被害が懸念される。平成 26 年の「早期地上散布による雪腐病防除技術」の現場における効果実証に続いて、紅色雪腐病の防除試験を実施する。

(4) 西胆振地域における秋まき小麦「つるきち」の高品質安定栽培法の確立（胆振地域農業技術支援会議） 平成 25～27 年

目的：西胆振地区の秋まき小麦の作付けは、平成 28 年産（平成 27 年は種）より「つるきち」への全面切り替えとなるため、西胆振地区に適した「つるきち」の栽培法を確立する。

(5) メドウフォックステイル対策の技術確立（日高地域農業技術支援会議） 平成 22 年、平成 25～28 年

目的：メドウフォックステイルは飼料価値の低い草種であるため防除対策が必要であるが、これまでのところ、完全に抑制する技術は確立されていない。畜試の試験課題において、現地で応用可能な技術が平成 24 年に開発されたため、それらの総合防除技術を現地で実証する。

4. 各振興局地域農業技術支援会議の活動状況

(1) 空知地域農業技術支援会議

事務局会議等(3 回)、3 者会議(2 回)、現地調査(1 回)によりプロジェクト課題の進行管理、地域要望課題の整理等を実施した。1 月 13、14 日に開催した地域関係者会議（長沼町、滝川市）では支援会議の活動成果等を報告するとともに意見交換を実施した。

(2) 石狩地域農業技術支援会議

事務局会議等(3 回)、3 者会議(2 回、現地調査 1 回を

含む)によりプロジェクト課題の進行管理、地域要望課題の整理等を実施した。2 月 25 日に開催した地域関係者会議（江別市）では支援会議の活動成果等を報告するとともに意見交換を実施した。

(3) 後志地域農業技術支援会議

事務局会議等(6 回)、地域関係者会議(1 回)により支援会議実施課題の進行管理、地域要望課題の整理等を実施した。3 月 15 日に開催した地域関係者会議（倶知安町）では支援会議の活動成果等を報告した。

(4) 胆振地域農業技術支援会議

事務局会議等(6 回)、5 者会議(2 回)によりプロジェクト課題の進行管理、地域要望課題の整理等を実施した。2 月 23 日に開催した地域関係者会議（伊達市）では支援会議の活動成果等を報告するとともに意見交換を実施した。

(5) 日高地域農業技術支援会議

事務局会議等(3 回)、代表者会議(2 回)によりプロジェクト課題の進行管理、地域要望課題の整理等を実施した。3 月 3 日に開催した地域関係者会議（新ひだか町）では支援会議の活動成果等を報告するとともに意見交換を実施した。

II 試験研究課題の実施

1. 革新的技術導入による地域支援 東胆振管内における直播てんさいに対する分施肥技術の実証

(平成 27 年～28 年) 地域技術 G

目的：東胆振管内のてんさい直播栽培において、慣行の全量作条施肥に替わる低ストレス型施肥方法として、分施肥技術の普及を図る。

2. 道産小麦の需要を拡大する次世代品種の開発促進と生産安定化 (4) 硬質秋まき小麦「つるきち」の生育特性に対応した栽培法の確立

(平成 25 年～27 年) 地域技術 G
(栽培環境 G と共同)

目的：硬質秋まき小麦「つるきち」の安定多収、適正タンパク質含有率が確保できる栽培法を確立する。また、生産実績を活用した窒素施肥設計技術の「つるきち」への適用性を検討し、汎用性の高い窒素施用設計ツールを提示する。

3. 醸造用ぶどうにおけるブドウつる割細菌病の生態解明と防除対策

(平成 26 年～28 年) 地域技術 G
(予察診断 G、作物 G と共同)

目的：多発した場合に被害が甚大となるブドウつる割細菌病に対する発生生態の解明により、効率的な防除対策を開発する。

4. 次世代施設園芸導入加速化支援事業に係わる技術実証試験

(平成 26 年～ 28 年) 地域技術 G
(花野菜技術センター、北総研と共同)

目的：大型植物工場でのいちご栽培において高収量達成のための適切な栽培環境条件を明らかにするため、稼働を開始したハウスの栽培環境をモニタリングする。

5. 農業研究ニーズ情報検索システム (ARIRE) の開発

(平成 27 年) 地域技術 G
(企画課と共同)

目的：農業関係試験研究要望課題 (研究ニーズ) に関する情報及び農業改良普及センターの試験成績情報をデータベース化し、キーワード入力による検索可能な情報検索システムを開発する。

Ⅲ 普及センターへの技術支援等

1. 普及センターに対する支援要請など連携活動

各普及センターから技術支援要請に対して、普及センター主任普及指導員と実施内容を協議し、対応した。各普及センターからの支援要請課題数は、空知 16、石狩 6、後志 7、胆振 5、日高 3 件であった。また、145 件の病害虫や生理障害等の診断依頼に対応した。(上記の数字は、農政部生産振興局技術普及課農研本部駐在の普及指導員が対応した課題数・件数を含む)

2. 普及指導員研修支援

(1) 技術普及課が実施する普及指導員研修

技術普及課が実施する普及指導員スペシャリスト機能強化研修などの研修計画作成、研修時の講師などに対応した。

- ・専門技術研修 (稲作、土壌・病害虫)
- ・高度専門技術研修 (畑作、クリーン農業)

(2) 新技術伝達研修

農研本部駐在の普及指導員と連携し、振興局が主催する研修会において、平成 27 年度北海道農業試験会議 (成績会議) で普及奨励事項等になった成果を、地域技術 G 研究員が講師となり紹介した。

胆振・日高：平成 28 年 2 月 2 日 (むかわ町、四季の館)

後志：平成 28 年 2 月 4 日 (倶知安町、後志総合振興局)

空知・石狩：平成 28 年 2 月 5 日 (岩見沢市、空知総合振興局)

3. 行政・関係機関との連携

(1) 関係機関・団体との連携

農研本部駐在の普及指導員と連携し、ホクレン、JA

中央会、北植防、米麦改良協会、除草剤協会など関係機関の活動を支援した。

(2) 農大との連携活動

農研本部駐在の普及指導員と連携し、農業の担い手確保・育成の観点から、農大が行う各種研修・教育に対し講師など支援活動を行った。

E 普及・参考事項並びに試験研究の成果

1. 平成 28 年普及奨励事項、普及推進事項、指導参考事項、研究参考事項並びに行政参考事項

平成 27 年度北海道農業試験会議(成績会議)において、当年度までに完了した試験研究成績について、普及、研究、行政に提供される事項を決定した。そのうち、現場が担当または分担した提出課題(農業資材・農業機械性能調査関係課題を除く)は次のとおりである。

(1) 普及奨励事項

－優良品種－

(作物開発部会)

○水稲新品種候補「空育 181 号」(生産研究部水田農業グループ)

○てん菜新品種候補「KWS 2K314」(北見農試研究部地域技術グループ、十勝農試研究部地域技術グループ、中央農試作物開発部作物グループ、上川農試研究部地域技術グループ)

(2) 普及推進事項

－優良品種－

なし

－推進技術－

(農業環境部会)

○移植たまねぎ安定生産のための窒素分施肥技術(農業環境部栽培環境グループ、北見農試研究部生産環境グループ)

(3) 指導参考事項

(作物開発部会)

○りんごの品種特性(作物開発部作物グループ)

○りんご雪害回避のための整枝法(作物開発部作物グループ)

(生産システム部会)

○子実用とうもろこしの田畑輪換圃(泥炭土)における機械収穫・栽培の実証及び経済性評価(生産研究部生産システムグループ、農業環境部環境保全グループ、作物開発部農産品質グループ)

○色彩選別機(小豆)の性能(CSV600BI)(生産研究部生産システムグループ)

(農業環境部会)

○高窒素成分肥料の利用による水稲側条施肥の省力化(生産研究部水田農業グループ)

(病虫部会)

○平成 27 年度の発生にかんがみ注意すべき病害虫(北海道立総合研究機構農業研究本部、北海道農政部技術普及課、北海道農業研究センター)

○施設栽培ほうれんそうにおけるハウレンソウケナゴコナダニの生態を利用した被害低減対策(病虫部 クリーン病害虫グループ)

(4) 研究参考事項

○農業の多面的機能を評価できる仮想評価法(CVM)(十勝農試研究部生産システムグループ、中央農試生産研究部生産システムグループ、根釧農試研究部地域技術グループ)

○経済・雇用・環境の影響評価が可能な市町村産業連関分析手法(十勝農試研究部生産システムグループ、中央農試生産研究部生産システムグループ、根釧農試研究部地域技術グループ)

(5) 行政参考事項

なし

2. 論文ならびに資料

(1) 研究論文、試験成績

作物開発部

○黒崎英樹, 藤田正平. 大豆新品種「中育 69 号」. 北農, 82(2), p.49 (2015)

○黒崎英樹, 唐星児, 小野寺政行, 竹内徹. 北海道北見地域における虎豆の栽培技術-省力化を目的とした栽植密度の改善. 日作紀. 85, p. 33-40 (2016)

○Suzuki T., Nitta Murai M., Hayashi H., Nasuda S, Yoshimura Y, Komatsuda T. Resistance to wheat yellow mosaic virus in Madsen wheat is controlled by two major complementary QTLs. Theoretical and Applied Genetics 128, 1569-1578 (2015)

○堀田治邦, 小倉玲奈, 山下陽子, 鈴木孝子. 多検体細胞破碎装置で破碎したコムギ葉によるコムギ縞萎縮ウイルスの DAS-ELISA. 北日本病害虫研究会報. 66, p.53-56 (2015)

○三澤知央, 堀田治邦, 佐藤豊三. *Colletotrichum nymphaeae* (病原追加) および *C. fioriniae* によるブルーベリー炭疽病の北海道における初発生. 北日本病害虫研究会報. 66, p.101-105 (2015)

○堀田治邦. インゲンアファノミセス根腐病菌の遊走子生成および運動性に与える各種形態窒素の影響. 北農. 82, p.176-180 (2015)

○堀田治邦, 大上大輔. 北海道の園芸作物に発生した *Thielaviopsis* 属菌による病害. 北農. 82, p.385-391 (2015)

○Horita H., Hatta Y. Sour rot of carrot caused by *Geotrichum candidum*. *Journal General Plant Pathology* 82, 65-68 (2015)

○阿部珠代, 柳原哲司, 杉川陽一, 菅原章人, 須田達也, 高松聡, 井上哲也, 唐星治. 超強力コムギ「ゆめちから」の子実タンパク質含有率ならびに「きたほなみ」とのブレンド割合がパン加工適性におよぼす影響. 日本作物学会紀事. 85, p. 41-50(2016)

○Ogita, T., Watanabe, J., Wakagi, M., Nakamichi, K., Komiyama, S., Takebayashi, J., Mano, J., Kitta, K., Koyano, S., Takano-Ishikawa, Y. Evaluation of a Method to Quantify Isoflavones in Soybean by Single and Multi-laboratory Validation Studies. *Food Science and Technology Research*. 21(3), p.473-477 (2015)

生産研究部

○平石学. 大規模水田作経営における会計情報の活用と経営実績把握に関する実態分析. 農業経営研究. 53(2), p19-24 (2015)

○山田洋文. 「エアコーン」生産・利用拡大の可能性: 経済性評価をとおした検討. 北海道畜産草地学会報. 3, p79-81 (2015).

○日向貴久. 農村地帯における社会的企業の展開〜グラウンドワーク西神楽の事例より〜. 農業経営研究. (2015).

○山田洋文. 生産性改善場面における「連関図」の適用に関する研究ー北海道における「てんさい」直播栽培を事例としてー. 農業経営研究. 印刷中 (2016).

○山田洋文. 畑作経営における飼料用とうもろこし栽培受託の経済性と土地利用に与える影響に関する研究. フロンティア農業経済研究,18(1). p54-60 (2015).

平石学, 岡田直樹. 直播栽培の今後の展望 水田作経営の視点から. 北農. 82(2). p150-156. (2015)

農業環境部

○田村 元, 中津智史, 竹内晴信, 加藤 淳. 北海道における有機栽培ばれいしょの安定生産技術. 北農. 82 (3), p.274-278 (2015)

○中津智史, 濱村美由紀, 中本洋, 甲田裕幸, 飯田憲司, 相馬潤. 道央地域における子実用とうもろこしの栽培法 (第1報) 品種の早晩性が生育, 収量, 子実水分等に及ぼす影響. 北農. 82 (2), p.159-168 (2015)

○中津智史, 濱村美由紀, 中本洋, 甲田裕幸. 道央地域における子実用とうもろこしの栽培法 (第2報) 無機養分の吸収推移と窒素施肥法. 北農. 82 (3), p.267-273 (2015)

○中津智史, 濱村美由紀, 中本洋, 甲田裕幸, 相馬潤. 道央地域における子実用とうもろこしの栽培法 (第3報) 栽植密度が子実収量・水分, 倒伏に及ぼす影響. 北農. 82 (4), p.364-369 (2015)

病虫部

○Komatsu, T. and Kondo, N. Winter habitat of *Xylophilus ampelinus*, the cause of bacterial blight of grapevine, in Japan. *Journal of General Plant Pathology* 81:237-242(2015)

○Komatsu, T. and Kondo, N. Efficacy of a copper-based bactericide in controlling bacterial blight of grapevines caused by *Xylophilus ampelinus*. *Journal of General Plant Pathology* 81:409-414(2015)

○小松 勉. ブドウつる割細菌病の発生に及ぼす環境要因の影響について. 北日本病害虫研究会報 66, p97-100. (2015)

○山名利一. 小澤 徹. コムギ雪腐黒色小粒菌核病およびコムギ雪腐大粒菌核病に対する殺菌剤茎葉散布の防除効果の低下要因の検討. 北日本病害虫研究会報 66, p.39-43. (2015)

○山名利一. 小澤 徹. コムギ雪腐黒色小粒菌核病およびコムギ雪腐大粒菌核病の発生がコムギの生育および収量に及ぼす影響. 北日本病害虫研究会報 66, p.44-47. (2015)

○山名利一. 小澤 徹. 降水量をもとにした殺菌剤の残効性評価とコムギ雪腐黒色小粒菌核病およびコムギ雪腐大粒菌核病に対する散布時期. 北日本病害虫研究会報 66, p.48-52. (2015)

○野津あゆみ, 荻野 瑠衣, 佐々木 純, 角野晶大, 岩崎暁生, 尾崎政春, 成松 靖, 松井梨絵, 上原智子, 田中千華³⁾, 鐘ヶ江良彦, 大谷 徹, 鈴木 健. 採苗施設と水田転換畑を利用した新しいイチゴ苗生産方式における病害虫管理の有効性. 北農. 82 巻第4号, p.48-54(2015)

○齊藤美樹. 耕耘回数の増加とそれに伴う土壌物理性の変化がハウレンソウケナガコナダニ密度に与える影響. 日本応用動物昆虫学会誌. 59, p.63-72 (2015)

○Saito M. and G. Takaku. First record of *Protogamasellus mica* (Athias) (Acari: Mesostigmata: Ascidae) from Japan. *Journal of the Acarological society of Japan*. 24, p.19-27 (2015)

○齊藤美樹. ハウレンソウ播種前の大量灌水がハウレンソウケナガコナダニの行動に与える影響. 北日本病害虫研究会報. 66, p.135-139 (2015)

(2) 口頭発表 (ポスター発表含む)

作物開発部

○足利奈奈, 山下陽子, 来嶋正朋, 藤田正平, 相馬潤, 小澤徹, 松中仁, 加藤謙司, 神野裕信. 日長反応性遺伝子 *Ppd-D1* が春まき小麦の安定多収性に及ぼす影響. 日本育種学会・日本作物学会北海道談話会報. 56, p.10-11 (2015)

○山口直矢, 黒崎英樹, 青山聡, 石本政男, 三好智明, 千田峰生. ポーランドのダイズ品種を用いた早生耐冷性系統の開発と早生に関与するゲノム領域の推定. 育種学研究.17(別1), p.16 (2015)

○其田達也, 大西志全, 粕谷雅志, 神野裕信, 佐藤三佳子, 西村努, 菅原彰. 秋まき小麦の穂発芽性“極難”系統の改良. 日本育種学会・日本作物学会北海道談話会報. 56, p.16-17 (2015)

○西村努, 其田達也, 神野裕信, 佐藤三佳子. 登熟環境に対応した秋まき穂発芽性極難コムギの種子休眠性評価. 日本育種学会・日本作物学会北海道談話会報. 56, p.108-109 (2015)

○堀田治邦, 鈴木孝子. コムギの葉および根におけるコムギ縞萎縮ウイルスの検出推移. 日本植物病理学会報. 82, 75(2016)

○鈴木孝子, 堀田治邦. コムギ縞萎縮病汚染圃場で栽培したコムギ品種におけるウイルスの定量. 日本植物病理学会報. 82, 75(2016)

○足利奈奈, 山下陽子, 来嶋正朋, 藤田正平, 相馬潤, 小澤徹, 松中仁, 加藤謙司, 神野裕信. 日長反応性遺伝子 *Ppd-D1* が春まき小麦の安定多収性に及ぼす影響. 日本育種学会・日本作物学会北海道談話会報. 56, 10-11(2015)

○鈴木千賀, 山下陽子, 鈴木孝子. SCN 抵抗性遺伝子 *rhg1* に関する分離のゆがみ. 日本育種学会・日本作物学会北

海道談話会報. 56, 80-81(2015)

○小倉玲奈, 鴻坂扶美子, 島田尚典. 小豆遺伝資源「黒小豆(岡山)」由来の土壌病害抵抗性. 日本育種学会・日本作物学会北海道談話会報. 56, 62-63 (2015)

○粕谷雅志, 神野裕信, 大西志全, 其田達也, 吉村康弘, 鈴木孝子. 「Madsen」のコムギ縞萎縮病抵抗性 QTL を導入した秋まき小麦「きたほなみ」の準同質遺伝子系統の農業特性. 日本育種学会・日本作物学会北海道談話会報. 56, 12-13 (2015)

○来嶋正朋, 山下陽子, 足利奈奈, 神野裕信. タンパク質含有率に関わる遺伝子 *Gpc-b1* の導入が春まきコムギの農業特性へ及ぼす影響. 日本育種学会第 129 回講演会. 育種学研究 18(別 1), p.118(2016.3.21)

○中塚由衣, 園田高広, 堀田治邦, 北藤雪子, 児玉不二雄. 北海道の半促成栽培におけるアスパラガス褐斑病の発生. 第 69 回北日本病害虫研究発表会. (2016.2.25)

○柳原哲司. 「生産現場を北海道食産業の入り口に」道総研食産業戦略研究へのお誘い, 「アン」の農を楽しむ生産者交流会. ホテルクラビー札幌 (2016. 02. 14)

○柳原哲司. 米アレルギー研究会での取り組み, 第 5 回北海道イネ研究会. 北海道大学 (2015. 12. 14)

○柳原哲司. 北海道米の業務用適性を評価する, 平成 27 年度全国食品関係試験研究場所長会. つくば国際会議場 (2016. 2. 18)

○小宮山誠一. 健康・おいしいのための新技術～健康機能性に富んだ豆製品とおいしくて便利な果実加工品の開発～. 札幌市立大学・道総研共同セミナー「知活ゼミナール」. 札幌市立大学サテライトキャンパス (2015.10.24)

○道満剛平, 中道浩司, 佐藤博一, 西村努, 平山裕治, 柳原哲司, 佐藤毅. 良食味米の白米外見品質が業務用向け炊飯ポテンシャルに及ぼす影響, 日本育種学会第 128 回講演会 (2015.9.12)

○小林聡, 三好智明, 川原美香, 四宮紀之, 小谷野茂和, 中道浩司. 豆乳を用いた簡易ショ糖含量評価と大豆育種への利用, 平成 27 年 日本育種学会・日本作物学会北海道談話会 (2015.12.5)

○西村努, 中根わかな, 神野裕信, 中道浩司, 森正彦, 三浦秀穂. 発芽抑制遺伝子 *MFT-3A* がコムギの穂発芽関連形質に及ぼす影響, 日本育種学会第 129 回講演会 (2016.3.22)

遺伝資源部

○中屋楓, 鈴木和織, 佐藤雅子, 山田哲也, 阿部純. ダイズにおける種子生存力と脂質の過酸化. 日本育種学会第 128 回講演会. (2015.9.11)

○浅山聡, 鈴木和織, 荒木和哉. 貯蔵期間と老化処理が

主要農作物種子の発芽率へ及ぼす影響. 日本育種学会・日本作物学会北海道談話会報. 56, p.100-111 (2015)

生産研究部

○ 加藤弘樹, 稲野一郎, 原圭祐, 山田洋文. てんさい直播栽培における圃場管理作業と圃場物理性の違い. 農業食料工学会北海道支部第 66 回年次大会. 札幌市 (2015.9.1-2)

○ 山田洋文, 加藤弘樹. 生産性改善場面における「連関図」の適用に関する研究 — 北海道における「てんさい」直播栽培を事例として —. 日本農業経営学会. 札幌市 (2015.9.10-12)

○ 平石学. 道央事例にみる新たな動きと農業経営管理研究. 日本農業経営学会. 札幌市 (2015.9.10)

○ 日向貴久. 農村地帯における社会的企業の展開〜グラウンドワーク西神楽の事例より〜. 日本農業経営学会. 札幌市 (2015.9.10-12)

○ 吉田 邦彦, 鈴木 剛. 水田転作地帯への子実用とうもろこし導入に向けた機械収穫体系の実証. 農業食料工学会北海道支部第 66 回年次大会. 江別市 (2015.9.1-2)

○ 吉田邦彦, 鈴木剛. 北海道における水田への子実用とうもろこし導入に向けた機械収穫体系の実証. 農業環境工学関連 5 学会 2015 年合同大会. 盛岡市 (2015.9.14)

○ 鈴木剛, 稲野一郎, 白井康裕, 関口建二, 村石 靖. GIS を援用した畜産系バイオマス資源循環・エネルギー利用モデルの構築. 第 11 回バイオマス科学会議. 新潟市 (2016.1.20-22)

○ 山田洋文, 平石学. 北海道における水稲作付けの動向と飼料用米生産の地域性. 北海道農業経済学会. 札幌市 (2016.3.5)

○ 山田洋文, 平石学. 畑作経営における「経営所得安定対策」の影響と効率的かつ安定的な展開に向けた課題 — 北海道における畑作専業地帯を事例として —. 日本農業経済学会大会. 秋田市 (2016.3.30)

○ 平石学, 山田洋文. 大規模化がコメ物財費に及ぼす影響と米直接支払交付金の役割. 日本農業経済学会大会. 秋田市 (2016.3.30)

○ 大橋優二, 高橋雅信, 國本亜矢, 松本武彦. ホタテ貝殻を混合した牛ふん堆肥のカルシウム溶出と pH 矯正効果. 日本土壤肥料学会北海道支部秋季大会講演要旨集. p. 13 (2015)

○ 尾崎洋人. 北海道における収量推移と遺伝資源について. 北海道イネ研究会 (2015.7.11)

○ 木下雅文. 業務用米新品種「そらゆき」の育成と普及. 行政研究連携会議 (2015.10.21)

○ 木下雅文. 業務用米新品種「そらゆき」の育成と普

及. 北海道イネ研究会 (2015.7.11)

○ 佐々木亮. 被覆尿素肥料を用いた寒地水稲における側条施肥の省力化. 日本土壤肥料学会 2015 年度京都大会講演要旨. p.129 (2015)

○ 佐々木亮, 中村隆一, 大橋優二, 塚本康貴. 水稲無代かき栽培の北海道水田地帯への適応性. 日本作物学会第 241 回講演会要旨集. p.4 (2016)

○ 佐々木亮. 濃い！だから省力。～水稲側条施肥の省力化～. 農業新技術発表会 (2015.2.18)

○ 佐々木亮. 高窒素成分肥料の利用による水稲側条施肥の省力化. 石狩農業技術支援会議. (2015. 2. 25)

○ 佐々木亮. 濃い！だから省力。～水稲側条施肥の省力化～. 道央圏農業新技術発表会 (2015.2.26)

○ 長田亨. 「そらゆき」の多収技術の研究. 北海道水稲懇話会第 9 回夏期シンポジウム (2015.7.11)

○ 中村隆一. 北海道農業において求められる土壌改良資材特性と木炭の役割活用事例. 第 13 回木質炭化学会年次大会 (2015.6.4)

農業環境部

○ 塚本康貴. 道央転換畑での暗渠清掃用施設を利用した地下灌漑がたまねぎの生育収量に与える影響. 日本土壤肥料学会 2015 年度京都大会講演要旨. p.111 (2015)

○ 板垣英祐, 内藤洋太, 渡辺孝博, 高田法幸, 小澤崇洋, 甲田裕幸, 竹内晴信. かぼちゃ果実と土壌に残留するヘプタクロル類濃度の関係性. 日本土壤肥料学会 2015 年度京都大会講演要旨. p.72 (2015)

○ 細淵幸雄, 村上政治, 竹田宏行, 森岡幹夫, 土門清, 松山稔. カドミウム高吸収ソルガム新品種を用いた野菜畑土壌浄化技術の開発 1-1 北海道の施設畑で栽培したソルガムの地上部カドミウム吸収量に及ぼす多刈の影響. 日本土壤肥料学会 2015 年度京都大会講演要旨. p.171 (2015)

○ 櫻井道彦, 坂口雅己, 日笠裕治. 有機栽培畑への転換を目指した緑肥導入モデル. 日本土壤肥料学会 2015 年度京都大会講演要旨. p.121 (2015)

○ 櫻井道彦. 有機栽培畑の地力増進に向けた緑肥の活用方法. 有機農業研究者会議 2015 資料集. p.33-36 (2015)

○ 杉川陽一, 菅原章人, 阿部珠代, 日笠裕治. 秋まきコムギ「ゆめちから」の収量・子実品質に対する窒素追肥効果. 日本土壤肥料学会京都大会講演要旨. p.133 (2015)

○ 杉川陽一. 土壌肥料的な課題と今後の展開. 北海道土壌肥料懇話会シンポジウム. 北海道土壌肥料研究通信. 62, p.21-27 (2016)

○ 杉川陽一, 志賀弘行, 鮫島良次, 下田星児. 作物モデルを用いた秋まきコムギ収量に対する気象影響評価. 日

本農業気象学会北海道支部 2015 年大会講演要旨集.
B35-36 (2015)

○植野玲一郎, 上野達, 細淵幸雄, 高濱雅幹. 単為結果性トマト品種の果実生産性および品質. 北海道園芸研究談話会報. 49, p.66 (2016)

○杉戸智子, 細淵幸雄, 奥村理, 岡紀邦, 橋本和義. 土壌還元消毒処理を行った施設土壌における可給態リン酸の変化. 北海道園芸研究談話会報. 49, p.82 (2016)

病虫部

○清水基滋, 山名利一, 野津あゆみ, 池谷(齋藤)美奈子, 栢森美如, 小澤 徹, 安岡眞二. テンサイ褐斑病菌 (*Cercospora beticola*)における QoI 剤耐性菌の発生. 日植病報. 81(3), p.232(2015)

○三宅規文. 小野寺鶴将. 岩崎暁生. 菜豆のインゲンマメゾウムシに対する殺虫剤散布の適期と効果. 第 69 回北日本病害虫研究発表会(札幌市)(2016.2.25)

○柿崎昌志. テンサイカスミカメの性フェロモンの主成分比率と誘引性の関係. 第 59 回日本応用動物昆虫学会大会 (2015)

○柿崎昌志. 荻野瑠衣. 大久保利道. 北海道における斑点米防除の基幹防除 1 回化の効果. 第 69 回北日本病害虫研究発表会(札幌市)(2016.2.25)

○小澤 徹, 山名利一, 池田幸子, 東岱孝司. QoI 剤耐性コムギ赤かび病菌 (*Microdochium nivale*) に対する防除薬剤の探索. 日植病報. 82(1), p.71(2016)

○Jishi, T., Komatsu, T., Yasuoka, S. Summer production of high soluble solid content tomato by the simple and low cost nutriculture system in Hokkaido. Greensys 2015 (Évora, Portugal) (2015.7.20)

○小松 勉. 北海道における *Alternaria alternata* によるキュウリ黒斑病の発生について. 平成 27 年度日本植物病理学会北海道部会研究発表会(札幌市)(2015.10.16)

○野津あゆみ, 山名利一. 北海道の一般圃場におけるジャガイモ Y ウイルス塊茎えそ系統遺伝子型の検出. 日植病報. 82(1), p.74(2016)

○齊藤美樹. 大量灌水後の土壌被覆がハウレンソウケナガコナダニ密度に与える影響. 第 24 回日本ダニ学会 (2015)

○荻野瑠衣. 北海道におけるネギハモグリバエの露地越冬確認と休眠蛹出現時期の推定. 平成 27 年度日本応用動物昆虫学会・日本昆虫学会北海道支部大会(札幌市)(2016.1.19)

企画調整部企画課

○加藤淳. あずきの力 ~心と身体の栄養素~. 第 1 回

道総研ティータイムセミナー(札幌市).(2015.10.31)
○昆野大次, 松井義貴, 大坂郁夫, 大谷喜永, 折橋毅典, 寺田文典, 中野兼一, 小林泰男. 乳牛における乾乳期飼養法の違いが飼料摂取量および乳生産に及ぼす影響. 日本畜産学会第 120 回大会 講演要旨集, p.48 (2015.9.11)

(3) 専門雑誌記事

作物開発部

○藤田正平. 道央転換畑地帯の大豆狭畦栽培の概要と適正な栽植密度. あぐりぼーと. No.118, p. 4-5(2015)

○黒崎英樹. 「スズマル」似だが線虫抵抗性を持つ納豆用大豆新品種「中育 69 号」. ニューカントリー. 733. p.12-13 (2015)

○黒崎英樹. 「スズマル」そっくりの線虫抵抗性大豆新品種「中育 69 号」. 農家の友. 67(7), p.74-75(2015)

○黒崎英樹. 「スズマル」とよく似た線虫抵抗性ダイズ新品種「中育 69 号」. JATAFF ジャーナル. 4(1). p.12-13 (2015)

○池永充伸. ノーザンハイブッシュ系ブルーベリーにおける幼木期の生育促進技術. グリーンレポート. 557. 11 月号. p.6-7 (2015)

○池永充伸. リンゴの一次加工品レアフルについて. 農家の友. 1 月号. p.80-81 (2016)

○堀田治邦. 北海道におけるリーキ腐敗病の発生と被害軽減対策. 植物防疫. 69, p.723-727 (2015)

○富沢ゆい子. 北海道における子実用とうもろこしの栽培法と輪作体系への導入効果. 牧草と園芸. 64-1, p.6-9 (2016)

生産研究部

○平石学. 水田作経営の規模拡大による所得増大効果と施策転換の影響. ニューカントリー. 1 1 月号 (2015)

○山田洋文. 畑作経営の規模拡大による所得増大効果と経営安定対策の影響評価. ニューカントリー. 1 2 月号. (2015)

○日向貴久. イギリスの農業と地域マネジメント ① 作業受委託仲介, 資材共同購入担う機械銀行. ニューカントリー. 6 月号. 54-55. (2015)

○日向貴久. イギリスの農業と地域マネジメント ② 地方の窓口組織が EU から資金を獲得ニューカントリー. 7 月号. 62-63. (2015)

○日向貴久. イギリスの農業と地域マネジメント ③ 移住希望者の定住環境整備に向け起業支援. ニューカン

- トリー. 8月号. 40-41. (2015)
- 日向貴久. 住民主体の農村再生に向け～行政に代わり地域けん引が期待されるまちづくり会社～. ニューカントリー. 9月号. 18-20. (2015)
- 平石学. 水田作経営、畑作経営の大規模化と所得増大のポイント. 農家の友. 8月号. 69-71. (2015)
- 平石学. 水田作経営の大規模化と所得増大のポイント. 農業と科学 (2015)
- 山田洋文. 畑作経営の大規模化と所得増大のポイント. 農業と科学 (2015)
- 鈴木 剛. ハイブリッド型膜モジュール内蔵バイオガス精製装置. グリーンテクノ情報 Vol.11. No.1. p2-5. (2015)
- 山田洋文. 産地力高める経営と地域の判断. ニューカントリー. 2月号. p22-23 (2015)
- 日向貴久. 農村集落における生産環境の創設と産業振興に向けた対策手法. 農家の友. 3月号 (2015)
- 大橋優二. ホタテ貝殻を混合した牛糞堆肥の特性と草地土壌のpH矯正効果. 土づくりとエコ農業10・11月号, p. 7-11 (2015)
- 尾崎洋人. 業務用途を担う多収の「そらゆき」. 広報ホクレン9月号. p.6-7(2015)
- 尾崎洋人. Voice.1 ホクレンと連携しあい、北海道米の発展に貢献. ホクレングループレポート2015. 9.10(2015)
- 中村隆一. 北海道の良食味水稲の生産に及ぼす泥炭下層土改良の効果. 土づくりとエコ農業4・5月号, p. 7-11 (2015)
- 中村隆一. カルシウム栄養状態の改善による作物生育とその品質向上. 土づくりとエコ農業10・11月号, p. 7-11 (2015)

農業環境部

- 竹内晴信. 土壌の物理性と基盤整備. 農家の友. 67(8), p.28-30 (2015)
- 竹内晴信「北海道施肥ガイド2015」の概要, 今般の改訂のポイント. あぐりぼーと. 119, p.1-5 (2016)
- 塚本康貴. 疎水材暗渠の排水機能簡易診断と機能回復手法. ニューカントリー. 733. p.20-22 (2015)
- 塚本康貴. 疎水材暗渠の排水機能簡易診断と機能回復手法. 農家の友. 67 (6), p.40-42 (2015)
- 塚本康貴. ハイブリッド水路による転換畑での秋まき小麦に対する排水促進・水分供給技術. 土づくりとエコ農業. 47 (4), p.10-15 (2015)
- 塚本康貴. この暗きよ効いているの? チェック手順と機能回復法. あぐりぼーと. 115, p.1-2 (2015)
- 塚本康貴. 集中管理孔を利用した地下灌漑と現地事例.

- 農家の友. 67 (8), p.40-42 (2015)
- 塚本康貴. 転換大豆畑の排水性向上対策. あぐりぼーと. 118, p.1-2
- 古館明洋. リン酸を減らすタマネギ施肥技術. 農耕と園芸. 70 (8), p.22-25 (2015)
- 古館明洋. 平成 27 年度有機農業技術に関する現地研修会「有機農業技術開発研究班会議」 in 十勝. 農家の友. 67 (12), p.67-69 (2015)
- 古館明洋. 北海道の麦作り栽培資料 小麦 No.4. <http://www.beibaku.net/wheat/2015/pdf/kitahonami.pdf>
- 櫻井道彦. 新たな活用法～地力アップし, 有機に転換!. ニューカントリー. 62 (9), p.18-20 (2015)
- 櫻井道彦. 有機栽培畑への転換を目指した緑肥による土づくり. 北海道有機農研. 101, p.5-6 (2015)
- 櫻井道彦. 有機栽培 適正施肥で窒素負荷抑え収量確保. ニューカントリー. 743, p.54-55 (2016)
- 櫻井道彦. 有機栽培におけるたまねぎ・ばれいしょの窒素施肥基準と窒素負荷低減対策. 北海道有機農研. 103, p.4-5 (2016)
- 櫻井道彦. 道産の有機農産物を食卓に. 道庁メールマガジン. (2015)
- 櫻井道彦. 土を診断して有機栽培畑をつくる. 道総研第1期成果集. p.18-19 (2015)
- 杉川陽一. 決定版! 「ゆめちから」の栽培法. ニューカントリー. 62 (4), p.16-17 (2015)
- 杉川陽一. 「ゆめちから」の栽培法決定版. 農家の友. 67 (6), p.48-50 (2015)
- 杉川陽一. 「ゆめちから」安定栽培法決定版. あぐりぼーと. 116, p.10 (2015)
- 杉川陽一. コマツナに対する生ごみ堆肥の施用法. 土づくりとエコ農業. 531. p.1-5 (2016)
- 杉川陽一. 北海道の麦作り栽培資料 小麦 No.5. <http://www.beibaku.net/wheat/2015/pdf/kanritool.pdf>

病虫部

- 清水基滋. よくわかる Q & A ジャガイモシロシトセンチュウについて教えてください. ニューカントリー 62(11), p.50-51.(2015)
- 清水基滋. 役に立つ農薬の知識 No.1 使用方法と剤型 63(4), p.52-54.(2016)
- 岩崎暁生. 特集 2015 作物展望 病害虫. ニューカントリー 63(1), p.49-51.(2016)
- 柿崎昌志. 斑点米カメムシの基幹防除期における効率的防除法. 農家の友. 7月号, p.11-16(2015)
- 柿崎昌志. 新技術 斑点米カメムシ 基幹防除期における効率的除法. ニューカントリー. 6月号, p.50-51(2015)

○西脇由恵. キャベツ特別栽培のための病害虫防除体系. ニューカントリー. 8月号, p.52-53(2015)

○西脇由恵. 北海道におけるトマト褐色根腐病の発生実態と総合防除対策. 植物防疫. 5月号, p.283-288(2015)

○小松 勉. 平成 26 年度の発生にかんがみ注意すべき病害虫. 北農 82(2), p.71-85.(2015)

○小松 勉. ブドウつる割細菌病の発生生態と防除. 植物防疫 70(1), p.35-39.(2016)

○小松 勉. 平成 27 年度に北海道で新たに発生を認めた病害虫. 農家の友 (3), p4-7.(2016)

○山名利一. よくわかる Q&A QoI 剤耐性テンサイ褐斑病菌について教えてください. ニューカントリー 62 (7), p.76-77.(2015)

○山名利一. 小澤 徹. 殺菌剤の残効性に基いたコムギ雪腐黒色小粒菌核病および雪腐大粒菌核病に対する薬剤散布時期について. 植物防疫 69(9), p.40-48.(2015)

企画調整部企画課

○加藤 淳. 北海道におけるクリーン農業・有機農業技術研究の流れと発展方向. 農家の友. 7月号, p.31-34(2015)

○昆野大次. トウモロコシエタノール蒸留残渣 (DDGS) の飼料特性と産乳性～今月の技術・北海道ブロック～. デーリイマン. 6月号, p.48(2015)

(4) 著編書資料

作物開発部

○堀田治邦. 原色 野菜の病害虫診断事典 インゲンマメ (分担執筆). 農山漁村文化協会. p.140-141 (2015)

○堀田治邦. 植物ウイルス大辞典 (分担執筆). 朝倉書店. p.545 (2015)

○堀田治邦. 原色 花卉病害虫診断防除編. 追録 14 号 カーネーション (分担執筆). 農山漁村文化協会. p.233 の 2-240 (2015)

○小宮山誠一. (改訂) 北海道施肥ガイド 2015. 北海道立総合研究機構農業研究本部編. 北海道農政部発行. 2015.

生産研究部

○山田洋文. 農業経営年報 No.10 「産地再編が示唆するもの」. 農林統計協会. p229-241. (2015)

○吉田邦彦. スラリー処理・施用技術. デーリイマン. 9月臨時増刊号. 省力・自動化酪農の手引き. p86-92. (2015)

農業環境部

○鈴木慶次郎. 水はけ, 水もちのよい田畑に, 北海道におけるタマネギ畑の耕盤層破碎による窒素収支の改善. “最新農業技術土壌施肥 vol.8”. 農山漁村文化協会編. 同発行, 2016. p.88-96.

○鈴木慶次郎. 土層改良, 北海道におけるタマネギ畑の耕盤層破碎による窒素収支の改善. “農業技術体系土肥編第 5-1 巻土壌管理・土壌病害(1)畑の土壌管理”. 農山漁村文化協会編. 同発行, 2016. p.畑 246 の 2-畑 246 の 10.

病虫部

○齊藤美樹. X 農業のダニ② (害になるダニ・土壌). “ダニのはなし-人間との関わり-”. 島野智之・高久元編. 朝倉書店発行, 2016. p.139-144.

企画調整部地域技術グループ

○五十嵐俊成. 良食味米を目指した土壌管理、施肥技術. 平成 28 年産に向けての米づくり. 北海道米麦改良協会編. 同発行, 2016. p.95-120

○五十嵐俊成. 良質小麦生産のための施肥および土壌管理. 北海道の小麦づくり. 北海道米麦改良協会編. 同発行, 2016. p.63-103

○田中一生. より良い北海道米を探し続ける過去から未来へ「熱き志」のリレー. AGIRIFUTURE NO.43 全農みのりみのもるプロジェクト, 2015. p.11-12

企画調整部地企画課

○加藤 淳. あずきのチカラはこんなにすごい!. KK ロングセラーズ. 2015. p.1-176

(5) 新聞等記事

作物開発部

○黒崎英樹. 「スズマル」並の農業特性を持つ大豆新品種「中育 69 号」. 農業共済新聞 (2015.8.1)

○内田哲嗣. りんごわい性台木「青台 3」の特性と主要品種に対する JM 系台木の特性. 農業共済新聞 (2016.3.2)

○柳原哲司. 「北海道米美味名店」プロジェクト始動, 北海道じゃらん 10 月号

○小宮山誠一. 広がるコンポート新製法 中央農試リンゴ、洋ナシ風味そのまま, 北海道新聞空知版 (2016.2.4)

生産研究部

○大橋優二. 貝殻堆肥の特性と土壌 pH 矯正効果「草地更新で利用可能」. 農業共済新聞 (2016. 3. 16)

農業環境部

○塚本康貴. 疎水材暗渠の排水機能簡易診断と機能回復手法. 農業共済新聞 (2015.9.2)

- 塚本康貴. 疎水材暗渠の排水機能簡易診断と機能回復手法. 日本農業新聞 (2016.2.2)
- 櫻井道彦. 有機栽培畑への転換に緑肥による土づくり. 農業共済新聞 (2015.5.20)
- 櫻井道彦. 有機栽培畑における生産性向上のための緑肥活用法. 日本農業新聞 (2015.3.15)
- 櫻井道彦. 緑肥導入体系を確立2年間3体系で増収効果. 日本農業新聞 (2015.12.12)
- 杉川陽一. 秋まき小麦「ゆめちから」の栽培法決定版. 農業共済新聞 (2015.5.1)
- 杉川陽一. 「ゆめちから」の栽培法. 日本農業新聞 (2015.12.29)

病虫部

- 岩崎暁生. 冬の営農塾・道総研成果から, ピレスロイド抵抗性ネギアザミウマの防除. 日本農業新聞 (2016.1.12)
- 柿崎昌志. 斑点米カメムシ 基幹防除期における効率的防除法. 農業共済新聞. (2015.6.3)
- 西脇由恵. 特別栽培のためのキャベツ病害虫の防除体系. 農業共済新聞. (2015.3.9)
- 西脇由恵. 冬の営農塾－特別栽培のためのキャベツ病害虫の防除体系. 日本農業新聞. (2015.3.22)
- 小澤徹. 麦赤かび病発生動向と防除のポイント. 日本農業新聞. (2015.11.12)

企画調整部企画課

- 加藤 淳. 2030年代の温暖化を想定した北海道農業の展望. クボタ営農情報誌U. No.31. 2015. p.1-2
- 加藤 淳. 北海道産小豆の和菓子でカラダの老化が防げる!?. コンファ. 秋号. 2015. p.8
- 加藤 淳. 最強食材”ミックス豆”活用術. 日経ヘルス. 11月号. 2015. p.102-107
- 加藤 淳. 「煮あずき」がスゴイ! 6つの理由. 健康. 11月号. 2015. p.32-43
- 加藤 淳. ゆであずきで冷え対策. an・an. 2月号. 2016. p.70-71

F 研究企画・調整・情報システム・出版・広報

1. 研究の企画・調整・評価

(1) 農業研究本部場長会議

1) 第1回農業研究本部場長会議

期日：平成27年6月12日(金) 13:00～

場所：北海道農政部大会議室

議題：

①協議事項

(なし)

②報告事項

・平成28年度 新規課題設定に係る検討経過について
・「研究開発の見直し方針」実施方策検討ワーキンググループについて

・平成27年度 北海道農業試験会議(新規課題検討会議)の開催について

・年度計画に係る自己点検・評価について

・平成27年度開始 公募型研究課題の応募・採択状況について

・研究成果刊行物について

・東北地域農業関係試験研究場所長会議の現地研修について

・農林水産研究基本計画に関する意見交換会の対応について

③その他

(なし)

2) 第2回農業研究本部場長会議

期日：平成27年10月9日(金)13:30～15:00

場所：北海道農政部第1中会議室

議題：

①協議事項

・平成28年度 経常研究費に係る新規課題予算について

②報告事項

・平成27年度 農業研究本部 場別試験研究費について

・試験ほ場の適正使用に係る確認状況調査結果について

・道総研における組織体制の見直しについて

・平成28年度 当初予算(一般管理費)について

・平成27年度 下半期の主な予定について

③その他

・再雇用制度について

・植物防疫体制について

3) 第3回農業研究本部場長会議

期日：平成27年11月11日(水)13:00～

場所：農政部第1中会議室

議題：

①協議事項

(なし)

②報告事項

・連携協定活用型研究交流推進事業の採択結果について
・北海道農業研究センターと農業研究本部の連携協定締結について

③その他

(なし)

4) 第4回農業研究本部場長会議

期日：平成28年1月21日(木) 15:00～17:00

場所：道庁別館9階第2研修室

議題：

①協議事項

(なし)

②報告事項

・平成28年度農研本部における組織機構改正について(素案)

・草地酪農研究のあり方検討会について

・研究開発推進費運用方針施行に係る農業研究本部の対応について

③その他

・北農研との連携協定締結について

・交通事故、灯油漏れ、宅配便の保険について

・平成27年度一般管理費(維持管理費(一般))に係る執行保留について

5) 第5回農業研究本部場長会議

期日：平成28年3月18日(金) 14:30～17:10

場所：北海道農政部第1中会議室

議題：

①協議事項

・「革新的技術導入による地域支援」(経常(各部))の進行状況について

・経常研究(機動的調査)の対応について

・支援職員に関することについて

・新規作物導入試験について

②報告事項

・草地酪農研究の今後のあり方検討会の検討内容について

・酪農・畜産に係る試験研究と普及、行政の一体的推進に係る検討会について

・各種プロジェクトの運営状況及び次年度の運営計画について

・地域農業技術センター連絡会議(NATEC)の活動状況について

・平成27年度 試験研究用備品 要望・採択一覧

・平成28年度 道総研農業研究本部 当初予算概要

・平成28年度の新規実施課題について

・公募型研究課題の平成27年度採択結果および平成28年度応募・採択状況について

・「チャレンジ北海道産100%プロジェクト」の立ち上げについて

・平成28年度の主な日程(案)について

③その他

・理事長との花き野菜研究、畜産研究に関する意見交換について

・種苗管理生産の手引き改正について

(2) 研究調整会議

1) 第1回研究調整会議

期日：平成27年4月28日(火)13:00～15:00

場所：中央農業試験場 大会議室

①協議事項

・飼料用米の優良品種提案について

・設計会議 概要書印刷に係る場別予算負担について

②報告事項

・機動的調査について

・経常研究に係る平成27年度終了課題について

・平成27年度地域要望課題の概要について

・平成27年度北海道農業試験会議(新規課題検討会議)の開催について

・研究課題評価資料作成に係る農研本部としての対応と留意点等について

・平成27年度北海道農業試験会議に出席する普及指導員の選定について

・平成27年度競争的資金不正防止計画について

・食品加工研究センター試作実証施設の利用について

・企画調整部長会議について

③その他

(特になし)

2) 第2回研究調整会議

期日：平成27年6月26日(金)13:30～15:30

場所：中央農業試験場 大会議室

①協議事項

・平成28年度の新規課題検討及び調整について

②報告事項

・革新的技術導入による地域支援の平成28年度新規予定課題について

・平成26年度 研究課題事後評価(経常研究等)の結果について

・研究開発推進費について

・平成27年度新規課題における重点研究課題実施項目と課題別目標について

・研究推進項目のロードマップ作成について

③その他

・理事長との花き野菜研究に係る意見交換について

・流域圏検討チームにおける検討経過について

3) 第3回研究調整会議

期日：平成27年9月18日(金)13:00～15:00

場所：中央農業試験場 大会議室

①協議事項

・平成28年度 経常研究費に係る新規課題予算について

②報告事項

・ジャガイモシロシストセンチュウの確認について

・研究ロードマップについて

・課題対応型支援について

・平成27年度自己点検について

③その他

・流域圏構想について

・野菜研究の方向性に係る検討について

4) 第4回研究調整会議

期日：平成27年10月30日(金)13:00～15:00

場所：中央農業試験場 大会議室

①協議事項

・平成27年度 北海道農業試験会議(成績会議)の開催日程(案)等について

②報告事項

・平成27年度 成績会議に向けた対応について

・秘密情報管理規程施行に係る留意点について

・北海道農業試験研究推進会議本会議企画部会の開催結果について

・第5期北海道農業・農村振興推進計画の検討経過につ

いて

③その他

- ・成績会議提案予定課題についての情報提供
- ・法人評価委員会委員の花・野菜技術センター視察に係る情報提供

5) 第5回研究調整会議

期日：平成27年12月17日(木)14:30～17:00

場所：道庁農政部大会議室

①協議事項

- ・秘密情報管理規程に関する農研本部における運用について
- ・平成27年度北海道農業試験会議（設計会議）に向けた対応について
- ・農業資材試験及び農食事業における企画関連事務費について
- ・経常研究（機動的調査）の今後の対応について
- ・研究の重点化に向けた意見交換会の対応について

②報告事項

- ・草地酪農研究の今後のあり方検討会の開催について
- ・平成27年度北海道農業試験会議（成績会議）の運営等について
- ・平成28年（第34回）農業新技術発表会の開催について
- ・知的財産規程類に関する農研本部における対応について
- ・「道総研食関連課題検討会」の実施について

③その他

- ・研究成果刊行物について(投稿状況)

6) 第6回研究調整会議

期日：平成28年2月15日(月)13:00～15:50

場所：中央農試大会議室

①協議事項

- ・「革新的技術導入による地域支援」（経常(各部))の進行状況について
- ・次年度の成績会議に向けて
- ・新規課題検討会を経なかった新規課題（受託試験研究課題等）の検討について
- ・経常研究（機動的調査）の対応について
- ・課題対応型支援に対する農業研究本部の運用方針について

- ・各種プロジェクトの運営状況及び次年度の運営計画について

②報告事項

- ・平成27年度設計会議及び研究課題評価（中間・事後）に向けて

- ・平成27年度追加課題の課題別目標について
- ・公募型研究課題の平成27年度採択結果および平成28年度応募・採択状況について
- ・研究成果刊行物について
- ・平成29年度 研究職員採用試験について

③その他

- ・研究の重点化に向けた意見交換会資料作成について

(3) 北海道農業試験会議

1) 研究課題検討会議

○ 北海道農業技術推進委員会において決定された重点的研究推進方針に基づき、平成28年度新規提案課題について検討し、農業研究本部として自己点検評価（事前評価）を行った。

部会の開催日程及び検討課題数

部 会	日 程	会 場	課題数
作物開発	H27.7.14	赤れんが1号	8(2)
花・野菜	H27.7.16	道総研プラザ	1(1)
畜 産	H27.7.9～10	畜試講堂	9(3)
農業環境	H27.7.14	赤れんが2号	2(1)
病 虫	H27.7.15	赤れんが2号	4(1)
生産システム	H27.7.16	プレスト1.7	2(2)

※括弧内の数値は、検討課題数の内、新規課題数である。

2) 成績会議

各部会に提出され検討した課題について、総括会議で新農業技術として判定された結果は次のとおりであった。本会議における検討は、今年度終了課題における農業研究本部としての自己点検評価（事後評価）にも活用した。

		普及 奨励	普及 推進	指導 参考	研究 参考	行政参 考	保留 成績	完了 成績	合計
作物 開発	計 (品種)	4 (4)	0	12	0	0	0	0	16
花・ 野菜	計 (品種)	1 (1)	1 (1)	6	0	0	0	0	8
畜産	計 (品種)	4 (4)	4	9	1	0	0	0	18
農業 環境	計 (品種)	0	1	8	0	0	0	0	9
病虫	計 (品種)	0	1	10	0	0	0	0	108
生産 システム	計 (品種)	0	1	17	2	0	0	0	20

3) 設計会議

北海道における農業関係試験研究機関が行う試験研究課題について、平成 28 年度の設計を決定するための専門部会を平成 28 年 3 月 7 日～3 月 11 日にわたり開催した（てん菜分科会は 2 月 19 日）。各部会に提出された検討課題数は、次のとおりであった。本会議における検討は、農業研究本部における自己点検評価（中間・事後評価）にも活用した。

部会	分科会	課題数
作物開発	稲	39
	豆類	77
	てんさい	31
	麦類・特用作物	96
	ばれいしょ・果樹	75
花・野菜 畜産		66
	飼養栄養・飼料評価	13
	品質管理・家畜育種	9
	家畜衛生・繁殖	19
	ふん尿処理・家畜管理	7
	草地生産・草地品種 放牧利用	44
農業環境 病虫 生産システム		5
		79
		27
合計		64
合計		651

(4) 地域農業技術センター連絡会議 (NATEC)

1) 平成 27 年度 第 1 回幹事会

日 時：平成 27 年 6 月 5 日 15:30～17:00

場 所：ホクレンビル 1F ギャラリー会議室

出席者：12 名

議 事：平成 27 年度研究情報交換会の開催について、開催に向けての進捗状況、次年度以降の役員選出について、会員の動向等

2) 平成 27 年度 研究情報交換会

日 時：平成 27 年 9 月 10 日～9 月 11 日

場 所：きたみらい農業協同組合大会議室、他現地

出席者：60 名

内 容

①情報交換会

第 1 部 地域農業技術センターの活動報告

・オホーツク農業科学センターの活動について（オホーツク農業科学センター酪農振興係長 宿野部猛氏）

・斜里町農業研究センターの取組みについて（斜里町農業協同組合営農振興課長 遠藤充氏）

・網走寒冷地農場運営協議会の活動報告（網走市役所経済部農政課農業振興係主事 北村正人氏）

・JA きたみらいから生産者への情報提供（JA きたみらい ふれあい相談東 G 主幹 森政博氏）

・美幌町みらい農業センターの取組み（美幌町経済部農政 G みらい農業センター主査 午来博氏）

第 2 部 話題提供

ーオホーツク産農畜産物の高付加価値化への取組みー

・JA きたみらいの加工商品への取り組み（JA きたみらい 販売企画部マネージャー 流水浩幸氏）

・豚から広がる モノづくり まちづくり ヒトづくり
（合同会社びほろ笑顔プロジェクト商品開発室長 大友真佐美氏）

②現地視察

・玉ねぎ選果施設（訓子府町）

・むき玉ねぎ施設（訓子府町）

・玉ねぎ収穫ほ場（訓子府町）

・JA きたみらい農業技術センター（北見市北上）

・北見ハッカ記念館（北見市）

3) 平成 27 年度 第 2 回幹事会

日 時：平成 28 年 2 月 17 日 13:00～13:30

場 所：かでの 2・7 520 研修室

出席者：13 名

議 事：平成 27 年度定期総会議案審議

4) 平成 27 年度 定期総会

日 時：平成 26 年 2 月 17 日 13:40～14:20

場 所：かでの 2・7 520 研修室

出席者：34 名

議 事：平成 27 年度事業実績及び収支予算、平成 28 年度事業計画（案）及び収支予算（案）、役員改選等

5) 平成 28 年度 研究交流会

日 時：平成 28 年 2 月 17 日 14:30 ～ 17:30

場 所：かでの 2・7 520 研修室

出席者：51 名

内 容

①講演

テーマ「野生動物による農業被害の実態と対策」

・北海道におけるエゾシカ対策について（道環境生活部
エゾシカ対策課捕獲対策 G 主査 永安芳江氏）

・アライグマによる農作物被害の実態と対策（道環境生
活部生物多様性保全課生物多様性戦略 G 主事 阿部拓
氏）

・札幌市果樹園におけるエゾシカ被害の実態と取組み
（石狩振興局石狩農業改良普及センター石狩北部支所主
査 入澤裕司氏）

②話題提供

・北海道施肥ガイドの改訂について（中央農業試験場農
業環境部環境保全 G 研究主幹 竹内晴信氏）

・地域農業技術センターと農業試験場の連携による花・
野菜関連試験の実施について（花・野菜技術センター花
き野菜 G 研究主幹 鳥越昌隆氏）

2. 情報システムの活用

(1) 道総研農業研究本部のホームページ（農業技術情報広場）の管理

各ページ作成、更新を行った。また、広く道民に対し、関係イベントの周知や研究成果の公開等、情報発信を行った。

(2) 営農指導支援システムの整備開発

本年における開発は実施していない。

(3) 中央農試ホームページの作成・更新

入札情報や公開データ情報など、広く道民に対して場業務等の情報公開や研究成果の公開等、情報発信を行った。

(3) 図書資料購入費（千円）

逐次刊行物 (国内)	逐次刊行物 (外国)	製本	消耗品	計
704	2,750	504	—	3,958

3. 図書・資料

(1) 受入状況（冊）

資料名	購入	寄贈	合計
単行本（国内）	29	62	91
単行本（外国）	0	4	4
逐次刊行物（国内）	311	176	487
逐次刊行物（外国）	198	13	211

(2) 資料提供

室外貸出 128件

4. 印刷刊行物

資料名	発行年月	頁数	部数	
平成26年度北海道農業試験会議議事概要	平成27年度設計会議	27.6	122	pdf配布
平成28年農業新技術発表会要旨（第34回）		28.2	36	500
平成28年道央圏農業新技術発表会要旨		28.2	30	400
平成27年度北海道農業試験会議議事概要	平成27年度成績会議	28.3	61	pdf配布

5. 広報活動

(1) 平成27年度中央農業試験場公開デー

- ・日時：平成27年7月30日(金) 9:30～15:00
- ・場所：中央農業試験場庁舎、ほ場、果樹園
- ・主催：中央農業試験場
- ・協力：北海道農政部、北海道病害虫防除所
北海道空知農業改良普及センター
道総研 森林研究本部、水産研究本部、産業技術研究本部
- ・後援：岩見沢市、南幌町、由仁町、長沼町、栗山町
JA いわみざわ JA なんぼろ JA そらち南 JA ながぬま
- ・来場者：709名
(大人368名、子供341名、農業者12名)
- ・内容：
○夏休み公開実験①ミクロの世界をスマホでパチリ②パフケーキ作り実演③目で見る土壌生産力○体験／展示コーナー①豆を使ってミニツリー②いろいろな豆でストラップを作ろう③家庭菜園用種子プレゼント、遺伝資源部紹介④水辺の生き物展示、体験「お魚の絵を描いて完成させよう」⑤道総研各試験場の紹介⑥農業試験場の研究成果発表⑦教えて！ハタケダ博士(北海道のクリーン農業紹介)○農試、普及センターによるなんでも相談①家庭菜園等相談②土壌診断③病害虫診断○試食コーナー①試食(農試の作った米、麦、大豆品種)②なんでもドン(ドン菓子)○バスほ場見学○来場者プレゼント①キーワードを探せ、アンケート回答で、道産米(きたくりん)プレゼント②牛などのペーパークラフト配布など

(2) サイエンスパーク2015

- ・日時：平成26年8月5日(水)10:00～16:00
- ・場所：札幌市地下歩行空間、赤れんが庁舎
- ・主催：北海道、地方独立行政法人北海道立総合研究機構
- ・参加機関：中央農業試験場、花・野菜技術センター他
- ・後援：札幌市、札幌市教育委員会、北海道市長会、北海道町村会、北海道教育委員会
北海道小学校理科研究会
- ・参加者：2,400名
- ・内容：①「ミクロの世界をスマホで取ろう」中央農試病虫部②「シソのマジックショー」花・野菜技術センター

(3) アグリビジネス創出フェア in Hokkaido

- ・日時：平成27年11月27日(金)10:00～17:00

11月28日(土)10:00～16:00

- ・場所：サッポロファクトリー アトリウム会場他
- ・主催：NPO 法人グリーンテクノバンク、農林水産省
- ・共催：北海道農業研究センター
- ・参加者：約2,500名
- ・出展内容
《ファクトリールーム会場》
☆ポスター①農業試験場地図②米の主要品種③麦の主要品種④勝早桜5
☆展示品①米パッケージ②麦穂束(主要3品種)③主要米・畑作物の主要品種種子サンプル④勝早桜5パンフレット⑤豆麦等の種子⑥道総研紹介動画
☆配布①パンフレット(農業研究本部、道総研要覧)
②ペーパークラフト、トレーディングカード③豆ツリー
☆戦略研究紹介：レアフルの試食

(4) 平成28年度道央圏農業新技術発表会

- ・日時：平成28年2月26日(金)13:30～16:15
- ・場所：南幌町農村環境改善センター多目的ホール
- ・主催：中央農業試験場
- ・後援：南幌町、南幌町農業協同組合、
北海道空知総合振興局
- ・出席者：146名
- ・発表課題：
①これでバッチリ！「ゆめちから」の栽培方法決定版
中央農業試験場農業環境部栽培環境G
研究主任 杉川 陽一
②よくとれる！大きいいちご「空知35号」
花・野菜技術センター研究部花き野菜G
研究主任 木村 文彦
③外食、中食向け！たくさんとれる北海道米「そらゆき」
中央農業試験場生産研究部水田農業G
研究職員 佐藤 博一
④泥炭地でもバッチリ！大規模経営に適した”子実用とうもろこし”導入のポイント
中央農業試験場生産研究部システムG
研究主任 吉田 邦彦
⑤平成28年に特に注意を要する病害虫
中央農業試験場病虫部発生予察G
主査 小松 勉

- ・ショートセミナー：これからの南空知農業の技術展望

①なんでも獲れる水田づくりを目指す ～空知型輪作～
北海道空知農業改良普及センター
調整係長 向川 成人

②スマート農業の概要と北海道における取組 ～農業に
おける GPS と GIS の利用～
中央農業試験場生産研究部生産システム G

主査 鈴木 剛
③米のコストから見た水田作経営の将来像
中央農業試験場生産研究部生産システム G
主査 平石 学

G 研修及び技術指導

1. 研修生の受け入れ

(1) 実務研修、派遣研修等

遺伝資源部

○千田圭一，荒木和哉．種子審査研修会．道央・道南地域の種子審査員・審査補助員等（23名）．（2015.6.29）

○吉村徹．水稻の種苗生産について．平成27年度普及指導員スペシャリスト機能強化研修（高度専門技術研修・稲作）（13名）．（2015.6.24）

○吉村徹．遺伝資源部の業務内容と役割並びに水稻遺伝資源と種子生産．北海道立農業大学校稲作経営専攻コース1学年研修（9名）．（2015.8.28）

生産研究部

○山田洋文．てん菜直播講習会（訓子府町）（2015.4.10）

○山田洋文．線形計画手法ならびにソフトウェア活用に関する講師（帯広畜産大学）（2015.6.8）

○山田洋文．畑作物栽培技術講習会の講師（美幌町麦作生産組合，美幌町甜菜対策協議会，美幌町農業協同組合）．（2016.2.17）

○平石学．法人化に向けた経営分析等の活用・指導について．北見市・きたみらい農業協同組合職員研修（中央農業試験場）．（2015.5.25）

○平石学．農業経営の観点から見た南幌町農業の現状と課題．南幌町農業協同組合職員研修会．（2015.7.24）

○平石学．JAの営農指導体制と経営分析について．幕別町農業協同組合（中央農業試験場）．（2015.10.30）

○平石学．低コスト化に向けた改善課題．豊里・豊正・赤川地区農業活性化協議会．（2015.11.27）

○平石学．水田作経営・畑作経営の大規模化と所得増大効果．士別地区指導農業士研修会（2015.12.7）

○平石学．6次産業化の検討に際した新規作物の経済性把握法について．岩見沢市・JAいわみざわ職員研修（中央農業試験場）．（2016.1.20）

○平石学．水田作経営の大規模化による所得増大効果と今後の対応について．士別市農業研修会（2016.1.25）

○平石学．大規模経営の収益性実態と人材バンクへの期待．JA北ひびき農作業支援対策研修会（2016.1.29）

○平石学．水稻作のコスト低減に向けた直播栽培の活用術．妹背牛町直播研究会．（2016.2.17）

○平石学．水田作のコスト低減に向けて．美唄米麦センター協議会．（2016.2.25）

○平石学．水田作経営の規模拡大による生産費低減効果と省力・低コスト技術．低コスト・省力化生産技術研修会（2016.3.1）

○吉田邦彦．酪農学園大学 循環農学類視察．（2015.6.8）

○鈴木 剛．オホーツクIT・ロボット農業実践セミナー（北見市）．（2015.6.16）

○白旗雅樹．津別町法人会視察．（2015.7.6）

○鈴木 剛．津別町第6営農組合視察．（2015.7.13）

○鈴木 剛．ICT農業の活用事例について（岩見沢市）．（2016.2.10）

○鈴木 剛．トランスボーダーファーミングの概要と実際（鹿追町）．（2016.3.23）

○大橋優二．畑作担当普及指導員研修．（岩見沢試験地）．（2015.6.11）

○尾崎洋人，大橋優二，佐々木亮，長田亨，中村隆一，高度普及員研修（稲作）．（岩見沢試験地）．（2015.6.12）

○大橋優二．空知農改セ園芸部会視察研修．（岩見沢試験地）．（2015.7.8）

○木下雅文．北海道大学農学部生物資源科学科研修．（岩見沢試験地）．（2015.9.25）

○大橋優二，中村隆一．生活支援者への支援プログラム．（岩見沢試験地）（2015.8.4）

○中村隆一．水稻の先進地調査．（岩見沢市試験地）．（2015.9.2）

病虫害部

○橋本庸三．「畑作物のセンチュウ」．平成27年度普及指導員研修（高度専門技術研修）（畑作）（中央農試）（2015.6.9）

○橋本庸三．「水稻害虫」．平成27年度普及指導員研修（高度専門技術研修）（水稻）（中央農試）（2015.6.23）

○橋本庸三．「主要害虫の生態と防除」．平成27年度新任者普及員研修（花野菜センター）（2015.7.2）

○岩崎暁生・荻野瑠衣．「ネギハモグリバエの識別方法について」．空知農業改良普及センター普及段階研修（OJT・園芸）（中央農試）（2015.6.5）

○岩崎暁生．「主要害虫の見分け方」．平成27年度高度専門技術研修（畑作）（中央農試）（2015.6.12）

○岩崎暁生．「平成27年度普及指導員研修（高度専門技術研修）」（滝川市）（2015.7.22）

○岩崎暁生．「平成27年度普及指導員スペシャリスト機能強化研修」（滝川市）（2015.7.28）

○小松 勉.「予察事業、防除ガイドの利用」.平成 27 年度高度専門技術

(2) JICA研修

遺伝資源部

○白井滋久.メキシコ国別研修「メキシコ遺伝資源の多様性評価と持続的利用の基盤構築」「遺伝資源管理データベースの管理」.(2015.6.18)

○白井滋久,吉村徹.自治体職員協力交流事業「種子の重要性と水稻関係圃場の指導について」.(2015.7.22)

○白井滋久.再生可能エネルギー(地中熱)省エネ施設園芸による野菜生産技術支援事業「種子の保存・管理とその重要性」.(2015.8.21)

○白井滋久.モザンビーク国別研修「農村振興・技術セミナー」コース「種子の保存・管理とその重要性」.(2015.8.25)

生産研究部

○大橋優二.JICA地域別研修「農民主体型用水管理システム」(岩見沢試験地).(2015.6.23)

○尾崎洋人・中村隆一.平成 27 年度自治体職員協力交流事業(LGOTP)研修(岩見沢試験地).(2015.7.9)

病虫害部

○橋本庸三.平成 27 年度国別研修キルギス「未利用有機物資源を活用した持続型農業」(札幌市)(2015.7.29)

○小松 勉.「北海道における病虫害発生予察事業について」未利用有機物資源を活用した持続型農業(中央農試)(2015.7.31)

○小松 勉.「北海道における病虫害発生予察事業について」小農支援のための野菜栽培技術とマーケティング手法(中央農試)(2015.9.10)

企画調整部地域技術グループ

○前野眞司.JICA「中央アジア地域・農民組織強化コース」研修講師(中央農試).(2015.5.28)

(3) 民間研修

○五十嵐俊成.平成 27 年度「ゆめぴりか」食味関連成分含有率定点観測分析打ち合わせ.(札幌市).(2015.5.13)

○五十嵐俊成.平成 27 年度ホクレン支所担当者肥料農薬技術講習会.(2015.4.17)

○五十嵐俊成.平成 27 年度系統肥料研修会.(2016.3.23)

○前野眞司,玉掛秀人.石狩管内 JA 営農担当職員研修会.(2015.6.18)

2. 技術指導

作物開発部

○藤田正平.省力化に向けた狭畦密植栽培.日本育種学会・日本作物学会北海道談話会シンポジウム(札幌市)(2015.12.5)

○藤田正平.小麦・大豆の育種について.空知農協青年部南部ブロック会議(岩見沢市)(2015.11.4)

○藤田正平.道総研における大豆育種について.北海道豆類振興会(札幌市)(2016.1.21)

○藤田正平.良質豆類の生産.豆作り講習会(江別市)(2016.1.28)

○黒崎英樹.後志農業改良普及センター本所支援要請(ダイズシストセンチュウのレースと抵抗性およびシードテープの調査方法.(倶知安町,蘭越町).(2015.8.17)

○内田哲嗣,吉田昌幸,池永充伸.剪定研修.滝川果樹協会わい化部会.(2015.4.8)

○吉田昌幸.仁木町桜桃結実対策プロジェクト推進会議(仁木町).(2015.4.16)

○内田哲嗣,池永充伸.北海道果樹協会総会(札幌市).(2015.4.24)

○池永充伸.ブルーベリー栽培のポイント.仁木町特産ブルーベリー研究会.(2015.6.16)

○池永充伸.ブルーベリーの剪定方法について.空知農業改良普及センター園芸部会.(2015.7.3)

○池永充伸.ブルーベリーの枝梢管理のポイント.石狩農業改良普及センター園芸部会.(2015.7.30)

○吉田昌幸.果樹栽培に係わる講師及び現地研修.滝川果樹協会わい化栽培研究会(2015.8.4)

○内田哲嗣,吉田昌幸,池永充伸.全道果樹生産者研修会(滝川市).(2015.8.21)

○池永充伸.レアフル技術について.旭川市果樹協会(旭川市).(2015.7.30)

○内田哲嗣,吉田昌幸,池永充伸.北海道に適した果樹優良品種の調査研修.空知農業改良普及センター園芸部会果樹担当者.(2015.10.27)

○内田哲嗣,吉田昌幸,池永充伸.北海道果樹懇話会第 17 回研修会(札幌市).(2015.11.20)

○吉田昌幸.りんご栽培技術研修会(滝川市).(2015.12.2)

○内田哲嗣.ぶどう剪定講習(壮瞥町).(2015.12.4)

○内田哲嗣,吉田昌幸,池永充伸.北海道ワインぶどうブランド力強化事業 栽培評価検討会(札幌市).(2016.2.25)

○内田哲嗣,吉田昌幸,池永充伸.果樹対策懇談会(札幌市).(2016.3.22)

○阿部珠代,中道浩司.小麦の品質と製品について(製

- パン実習、講義)。普及員高度専門研修。(2015.6.12)
- 小宮山誠一、池永充伸。レアフル製造方法について。(株)天狗堂宝船。七飯町(2015.10.26-27)
- 鈴木孝子。品種改良とDNAマーカー。普及員高度専門研修。(2015.6.11)

遺伝資源部

- 荒木和哉。小麦原種生産の改善について(ホクレン滝川種苗生産センター)。(2015.10.9, 2015.11.13, 2016.1.21)
- 白井滋久。平成27年度農林水産分野における遺伝資源利用促進事業検討会。三菱UFJリサーチ&コンサルティング(株)(東京都港区)。(2015.6.26, 2016.12.4, 2016.3.7)
- 千田圭一。じゃがいもを美味しく安全に食べるための予備知識。千歳市グリーン・ツーリズム連絡協議会(千歳市総合福祉センター)(2016.2.13)
- 吉村徹。水稻の異型出現に関する情報について。平成27年度水稻種子生産技術現地検討会(滝川市農村環境改善センター)。(2015.8.6)

生産研究部

- 鈴木剛。高濃度硫化水素を効率的に除去できる排液非循環型バイオガス脱硫装置の技術開発における排液供給装置および保温システムに関する技術指導(北海道オリオン株式会社)(2016.1.6-7)
- 佐々木亮、長田亨。民間企業に対する水稻の育苗。(岩見沢市試験地)。(2015.1.14)
- 大橋優二。玉葱地下灌漑に関する派遣指導。空知園芸部会(岩見沢市)。(2015.7.18)

農業環境部

- 長尾明宣。豚糞堆肥利用による野菜栽培について。株式会社北海道中央牧場研修会。(長沼町)。(2016.1.14)
- 竹内晴信。北海道施肥ガイド2015の改訂について。平成28年地域農業技術センター連絡会議研究交流会。(札幌市)。(2016.2.17)
- 塚本康貴。集中管理孔を活用した地下灌漑技術について。国営農地再編事業南長沼地区期成会研修会。(長沼町)。(2015.5.14)
- 塚本康貴。たまねぎに対する地下かんがいについて。平成27年度空知農業改良普及センター園芸部会活動に係る視察研修。(岩見沢市)。(2015.7.8)
- 塚本康貴。集中管理孔を活用した地下かんがい技術について。JAいわみざわ研修会。(岩見沢市)。(2015.7.10)
- 塚本康貴。畑地の一酸化二窒素測定方法の現地指導について。十勝農協連農産化学研究所。(長沼町)。

- (2015.7.23)
- 塚本康貴。集中管理孔を活用した地下かんがい技術について。美唄市土地改良期成会連絡協議会会員研修。(美唄市)。(2015.8.24)
- 塚本康貴。地下灌漑の活用について。中富良野玉葱機械利用組合。(長沼町)。(2015.10.20)
- 塚本康貴。たまねぎへの地下灌漑の活用について。上川農業改良普及センター富良野支所ほか。(長沼町)。(2015.11.19)
- 塚本康貴。集中管理孔を活用した地下かんがい技術について。石狩振興局産業振興部調整課地下かんがいセミナー。(当別町)。(2016.2.5)
- 板垣英祐、清水基滋。むかわ町蔬菜園芸振興会かぼちゃ部会活動に係る講習会。むかわ町蔬菜園芸振興会かぼちゃ部会活動。(長沼町)。(2015.11.26)
- 古館明洋。秋まき小麦・後作緑肥導入によるたまねぎ畑の土づくりと緩効性肥料の活用。第5回トモエときわ現地検討会。(長沼町)。(2015.7.15)
- 古館明洋。秋まき小麦導入による玉ねぎ畑の土づくりについて。きたみらい農業協同組合研修会。(長沼町)。
- 古館明洋。道央水田転換畑における秋まき小麦「きたほなみ」の大豆畦間ばらまき栽培技術。全肥商連北海道地区部会肥料講習会。(札幌市)。(2016.2.19)
- 櫻井道彦。有機栽培におけるたまねぎ・ばれいしょの窒素施肥基準と窒素負荷低減対策の実証。平成27年度後有機農業ネットワーク夏期研修会。(真狩村)。(2015.8.3)
- 櫻井道彦。有機栽培畑における生産力向上のための緑肥活用方法。平成27年度後志有機農業ネットワーク夏期研修会。(真狩村)。(2015.8.3)
- 櫻井有機。たまねぎ・ばれいしょの窒素施肥法。平成27年度有機農業技術に関する現地研修会(有機農業技術開発研究班会議)in十勝。(帯広市)。(2015.8.21)
- 櫻井道彦。有機栽培畑の地力増進!緑肥の上手な活用方法。平成27年度有機農業技術に関する現地研修会(有機農業技術開発研究班会議)in十勝。(帯広市)。(2015.8.21)
- 櫻井道彦。北海道における有機農業の現状と技術的対応。北海道大学農学部生物資源科学科研修。(長沼町)。(2015.9.25)
- 櫻井道彦。環境保全型農業研修。北広島市環境保全型農業推進協議会研修。(長沼町)。(2015.11.2)
- 杉川陽一。秋まき小麦の栽培に係る研修。北海道大学農学部生物環境物理学研究室。(長沼町)。(2015.6.4)

○杉川陽一. これでバッチリ! 「ゆめちから」の栽培法決定版. 平成27年度道央圏農業新技術発表会. (南幌町) (2016.2.26)

○杉川陽一. NDASの開発と最近の研究事例. 道産小麦利用転換ニーズ増進事業に係る栽培技術検討会. (札幌市). (2016.3.3)

病虫害部

○清水基滋. 「平成27年普及奨励ならびに指導参考事項(病虫害関係)」ホクレン支所担当者肥料農薬技術講習会(札幌市) (2015.4.16)

○清水基滋. 「北海道の水稲栽培における近年の病虫害の発生動向について」Dr.オリゼプリンス粒剤普及会講演会(札幌市) (2015.6.22)

○清水基滋. 「水稲種子生産における病虫害防除対策」平成27年度水稲種子生産技術現地検討会(滝川市) (2015.8.7)

○清水基滋. 「ばれいしょ・てん菜病害の発生生態と防除」平成26年度ばれいしょ・てん菜施肥防除セミナー(ホクレン)(札幌市) (2016.1.14)

○清水基滋. 「平成28年度に注意すべき病虫害と病虫害防除の新技术」農薬技術講習会(農薬卸組合)(札幌市) (2016.2.18)

○清水基滋. 「てんさいの西部萎黄病の発生生態と媒介虫の越冬制御による病虫害低減技術」春季講習会(北海道植物防疫協会)(札幌市) (2016.3.2)

○岩崎暁生. 「シストセンチュウ土壌検診研修会」ながぬま農業協同組合研修(長沼町) (2015.7.1)

○岩崎暁生. 「ジャガイモのシストセンチュウ対策について」第3回後志ジャガイモシストセンチュウまん延防止対策会議(倶知安町) (2015.10.9)

○岩崎暁生・荻野瑠衣. 「ネギハモグリバエ防除講習会」. 玉葱防除講習会(岩見沢市) (2015.11.20)

○岩崎暁生・荻野瑠衣. 「玉葱栽培における害虫の発生と今後の対策」. 玉葱営農講習会(札幌市) (2015.11.30)

○岩崎暁生. 「ばれいしょ・てん菜害虫の発生生態と防除法」ホクレン農業協同組合連合会 平成27年度ばれいしょ・てん菜 施肥防除技術セミナー(札幌市) (2016.1.15)

○岩崎暁生. 「西部萎黄病対策、QoI剤について」. 高品質てん菜づくり講習会(洞爺湖町) (2016.2.4)

○岩崎暁生. 「じゃがいものシロシストセンチュウについて」 「アスパラガスのツマグロアオカスミカメに対する総合防除対策」北海道植物防疫協会春季研修会(札幌市) (2016.3.2)

○小松 勉. 「野菜類の灰色かび病菌の薬剤耐性検定に

ついて」胆振農業改良普及センター園芸部会研修(むかわ町) (2015.8.6)

○小松 勉. 「誰でもできる簡単な診断法と道内で発生した新しいウイルス病」後志農業改良普及センター園芸部会研修(倶知安町) (2015.8.25)

○小松 勉. 「平成28年に特に注意を要する病虫害」種ばれいしょ栽培研修会(音更町) (2016.2.23)

○小松 勉. 「平成27年の発生にかんがみ注意すべき病虫害」. 北海道植物防疫協会春季研修会(札幌市) (2016.3.2)

○小松 勉. 「ブドウつる割細菌病について」醸造用ブドウ・ワイン生産者向けセミナー(岩見沢市) (2016.3.3)

○山名利一. 「小麦縞萎縮病の発生分布と被害解析及び診断のポイントについて」. 平成27年度北海道畑作研究懇話会夏季研修会(長沼町) (2015.7.10)

○山名利一. 「北海道で発生している馬鈴しょのウイルス病について」. 馬鈴しょ栽培講習会(網走市) (2016.2.24)

○山名利一. 「北海道で発生している馬鈴しょのウイルス病について」. 馬鈴しょ栽培講習会(帯広市) (2016.2.25)

○野津あゆみ. 「病害概論」. 平成27年度北海道農薬指導士認定研修(道農政部)(札幌市) (2016.2.16)

○齊藤美樹. 「害虫概論」. 平成27年度北海道農薬指導士認定研修(道農政部)(札幌市) (2016.2.16)

○荻野瑠衣. 「たまねぎへのネギハモグリバエ加害状況と薬剤防除試験について」. 空知農業改良普及センター園芸部会研修(岩見沢市) (2015.7.8)

企画調整部地域技術グループ

(1) 普及指導員対象

○田中一生、斯波肇. 空知支援会議プロジェクト課題(玉ねぎ)生産者向け栽培マニュアル(指南書)の作成指導.(岩見沢市) (2015.4.15)

○田中一生. 平成27年度水稲採種圃育苗調査.(栗沢町). (2015.5.11)

○田中一生. 平成27年度空知農業改良普及センター第1回水稲部会.(長沼町、岩見沢市). (2015.7.2)

○田中一生、斯波肇. 空知支援会議プロジェクト課題(玉ねぎ)断面調査.(岩見沢市) (2015.9.14)

○田中一生. 平成27年度空知農業改良普及センター第3回水稲部会.(砂川市). (2015.12.11)

○五十嵐俊成、中村浩. 空知農業改良普及センター本所支援要請(そばの低収要因の解明と増収対策).(深川市). (2015.4.23、10~12月、2016.3.18)

○五十嵐俊成、中村浩. 石狩農業改良普及センター本所支援要請(春播き小麦「春よ恋」の栽培実態把握と低収

要因解析(共通課題)に係わる情報提供)。(恵庭市、千歳市)。(2015.4.15、7.17、7.27、2016.1.27)

○五十嵐俊成、坂口雅巳。後志農業改良普及センター本所支援要請(羊蹄山麓(留寿都・真狩)における、だいこん圃場の作土層の保水性改善)。(留寿都村、真狩村)。(2015.4.21、7.28、8.26)

○五十嵐俊成、中村浩、斯波肇。後志農業改良普及センター本所支援要請(京極町産にんじんの低収要因の解明)。(京極町)。(2015.4.21、5.25、6.22、8.21、10.22)

○五十嵐俊成、中村浩。胆振農業改良普及センター東胆振支所支援要請(直播てん菜栽培技術の改善)。(2015.5.26、11.28)

○玉掛秀人、前野眞司、田中一生、五十嵐俊成。平成27年度普及指導員普及奨励新技術研修会。(むかわ町 2016.2.2、倶知安町 2016.2.4、岩見沢市 2016.2.5)

(2) 一般対象

○田中一生。平成27年度第1回空知地区「ゆめぴりか」のブランド形成に向けた連絡協議会。(岩見沢市)。(2015.6.16)

○田中一生。平成27年度空知管内「水稻の安定生産に向けたキャラバン」。(北竜町、奈井江町、栗山町)。(2015.6.19)

○田中一生、竹内稔。平成27年度第1回空知地区水稻直播連絡協議会。(岩見沢市)。(2015.6.22)

○田中一生。平成27年度空知地区水稻直播連絡協議会現地講習会。(美唄市、岩見沢市、由仁町)。(2015.7.11)

○田中一生、竹内稔。平成27年度第2回空知地区「ゆめぴりか」のブランド形成に向けた連絡協議会。(岩見沢市)。(2015.7.13)

○田中一生。平成27年度空知地区水稻直播連絡協議会情報交換会。(岩見沢市)。(2014.12.18)

○田中一生。宇摩地区営農懇談会(空知支援会議プロジェクト課題「水稻湛水直播栽培の実証」の成果報告)。(深川市)。(2016.2.22)

3. 参観人

本場	38 件	764 人
遺伝資源部	8 件	21 人
岩見沢試験地	30 件	377 人
計	76 件	1,162 人

4. 職員研修

1) 職員研修

(1) 一般研修

氏名	研修項目	期間	研修場所
今 啓人	新規採用職員研修	H27. 4. 22 ~ H27. 4. 24	北海道総合研究プラザ1Fセミナー室
丸田 泰史	新規採用職員研修	H27. 4. 22 ~ H27. 4. 24	北海道総合研究プラザ1Fセミナー室
巽 和也	新規採用職員研修	H27. 4. 22 ~ H27. 4. 24	北海道総合研究プラザ1Fセミナー室
相馬 潤	企画担当職員研修	H27. 5. 20 ~ H27. 5. 21	北海道総合研究プラザ1Fセミナー室
今野 大次	企画担当職員研修	H27. 5. 20 ~ H27. 5. 21	北海道総合研究プラザ1Fセミナー室
白井 滋久	研究成果プレゼンテーション技術研修	H27. 6. 1	中央農業試験場講堂・ほ場
西村 直樹	研究管理能力向上研修（部長会議）	H26. 6. 4	道総研プラザ
白井 滋久	連携・調整能力向上研修（部長会議）	H27. 6. 8	道総研プラザ
古原 洋	新任研究部長級研修	H27. 6. 9 ~ H27. 6. 10	北海道総合研究プラザ1Fセミナー室
西村 直樹	新任研究部長級研修	H27. 6. 9 ~ H27. 6. 10	北海道総合研究プラザ1Fセミナー室
清水 基滋	新任研究部長級研修	H27. 6. 9 ~ H27. 6. 10	北海道総合研究プラザ1Fセミナー室
古館 明洋	新任研究主幹級研修	H27. 7. 30 ~ H27. 7. 31	北海道総合研究プラザ1Fセミナー室
白井 滋久	知的財産規程類説明会	H27. 8. 27	北総研
荒木 和哉	知的財産規程類説明会	H27. 8. 27	北総研
白井 滋久	広報広聴技術研究会	H27. 9. 1	第二水産ビル
相馬 ちひろ	新任主査級研修	H27. 9. 10 ~ H27. 9. 11	北海道総合研究プラザ1Fセミナー室
細淵 幸雄	新任主査級研修	H27. 9. 10 ~ H27. 9. 11	北海道総合研究プラザ1Fセミナー室
小澤 徹	新任主査級研修	H27. 9. 10 ~ H27. 9. 11	北海道総合研究プラザ1Fセミナー室
白井 滋久	情報処理研修会	H27. 10. 21	中央農業試験場
荒木 和哉	情報処理研修会	H27. 10. 21	中央農業試験場

(2) 専門研修

①海外研修

氏名	研修項目	期間	研修場所
なし			

②国内研修 I

氏名	研修項目	期間	研修場所
なし			

③国内研修 II 職員派遣

氏名	研修項目	期間	研修場所
塚本康貴	2015年度日本土壌肥料学会京都大会	H27. 9. 8 ~ H27. 9. 10	京都市
細淵幸雄	2015年度日本土壌肥料学会京都大会	H27. 9. 8 ~ H27. 9. 11	京都市
森 万菜実	日本植物病理学会第11回植物病害診断教育プログラム	H27. 7. 25 ~ H27. 7. 31	神戸市
阿部珠代	第37回近赤外講習会（中級・上級コース）	H28. 1. 28 ~ H28. 1. 29	食品総合研究所（つくば市）

④国内研修 II 外部講師招聘（場内実施）

研修名	講師名、概要	時期	受講者数

2) 職場研修

(1) 集団指導 なし

(2) 集合研修

研修名	実施年月日	実施場所	出席人数
農作業安全に関する研修等	H27.4.10	遺伝資源部会議室	16
農作業等安全研修(岩見沢)	H27.4.10	水田農業グループ	21
農作業等安全研修	H27.4.13	講堂	81
農作業安全に関する研修等(契約職員)	H27.5.1	遺伝資源部会議室	6
救命講習	H27.5.29	講堂	47
交通安全研修(岩見沢)	H27.6.12	水田農業グループ	26
競争的資金等に係るコンプライアンス教育等の研修	H27.8.17	講堂	45
情報セキュリティ研修	H27.9.25	講堂	24
情報セキュリティ研修(岩見沢)	H27.10.8	水田農業グループ	12
交通安全研修	H27.10.26	講堂	85
救命講習(岩見沢)	H27.11.25	水田農業グループ	24

5. 海外出張

氏名	用務名	期間	出張先
山下 陽子	シロシスト抵抗性品種開発に係る公募型研究に向けた予備調査	H27.11.28 ~ H27.12.6	オランダ・フランス・イギリス
日向 貴久	英国における社会的企業の機能と運営方法の解明に向けた予備調査	H27.10.1 ~ H27.10.1	イギリス

6. その他

1) 表彰

(1) 職員永年勤続表彰

氏名	表彰	表彰年月日
荒木 和哉	北海道立総合研究機構職員表彰(永年勤続)	H27.10.22
北 和宏	北海道立総合研究機構職員表彰(永年勤続)	H27.10.22
玉掛 秀人	北海道立総合研究機構職員表彰(永年勤続)	H27.10.22

(2) 研究成果表彰

氏名	表彰	表彰年月日
橋本庸三	北日本病害虫研究会賞研究邦文部門虫害分野(北海道におけるアカヒゲホソミドリカスミカメの休眠卵率の季節的推移)	H27.2.25
塚本康貴	平成27年度北海道農業土木協会賞奨励賞(水田への疎水材暗きよの整備による温室効果ガス排抑制の効果)	H27.8.28
櫻井道彦、坂口雅己、日笠裕治	日本土壌肥科学会2015年度京都大会ポスター賞(有機栽培畑における生産力向上のための緑肥活用法)	H27.9.10
塚本康貴	農業農村工学会北海道支部第14回支部賞(地下灌漑を利用した転換畑における土壌物理的肥沃度の評価)	H27.10.22
柳原哲司	全国食品関係試験研究場所長会平成27年度優良研究・指導業績表彰	H28.2.18

H 行 事

月	日	行 事 等
4	10	研究本部長会議(道総研プラザ)
4	13	農作業安全研修
4	20	定例部長会議
4	28	研究調整会議(中央農試)
5	11	北海道農業技術推進委員会分科会(札幌)
5	13	研究本部長会議(道総研プラザ)
5	19 ~ 20	全国農業関係試験研究場所長会議(東京)
5	25	農政部ニーズ検討会(札幌)
6	10	二場連絡協議会(北農研・農研本部)(北農研)
6	12	北海道農業技術推進委員会(札幌)
6	11	研究本部長会議(道総研プラザ)
6	12	農業研究本部場長会議(札幌)
6	23 ~ 24	全国農業関係試験研究場所長会議(東京)
6	26	研究調整会議(中央農試)
7	9	研究本部長会議(道総研プラザ)
7	9 ~ 10	新規課題検討会議(畜産部会)(畜試)
7	14 ~ 17	新規課題検討会議(札幌)
7	23	北海道農業・農村振興審議会(札幌)
7	30	中央農試公開デー
8	5	みんなで科学を楽しもう サイエンスパーク(札幌)
8	17	競争的資金等不正防止研修会(中央農試)
8	24 ~ 25	新規候補課題に係る本部長ヒアリング(中央農試)
9	3 ~ 4	東北地域農業関係試験研究所長会議(千歳市ほか)
9	9	研究本部長会議(食品加工研究センター)
9	10 ~ 11	NATEC研究情報交換会(北見市)
9	18	研究調整会議(中央農試)
9	24	避難訓練(本場)
10	9	農業研究本部場長会議(札幌)
10	19	定例部長会議
10	21	北海道地域行政研究連携会議(行政企画委員会)(札幌)
10	21	北海道農業試験研究推進会議・本会議企画部会(北農研)
10	22	道総研職員表彰式(札幌)

月	日	行 事 等
10	26	交通安全研修(本場)
10	27	二場連絡協議会(北農研・農研本部)(北農研)
10	28	北海道農業・農村振興審議会(札幌)
10	30	研究調整会議(中央農試)
11	4	監事監査
11	5 ~ 6	ビジネスEXPO(札幌)
11	10	研究本部長会議(道総研プラザ)
11	24	農業試験研究・技術普及検討懇話会(札幌)
11	27 ~ 28	アグリビジネス創出フェア(札幌)
12	9	全国農業関係試験研究場所長会議(東京)
12	15	研究本部長会議(道総研プラザ)
12	17	研究調整会議(札幌)
12	21	北海道農業・農村振興審議会(札幌)
1	18 ~ 22	成績会議(札幌)
1	21	農業研究本部場長会議(札幌)
2	1	北海道優良品種認定委員会(札幌)
2	3 ~ 5	北海道農業試験研究推進会議(北農研)
2	10	研究本部長会議(道総研プラザ)
2	15	研究調整会議(中央農試)
2	17	NATEC総会・研究交流会(札幌)
2	18	農業新技術発表会(札幌)
2	26	道央圏農業新技術発表会(南幌)
3	7 ~ 11	設計会議(北農研・札幌)
3	16	研究本部長・場長会議(道総研プラザ)
3	17	北海道農業試験研究推進会議本会議(北農研)
3	18	農業研究本部場長会議(札幌)
3	28	定例部長会議
3	31	辞令交付

I 自己点検への対応表

項目 番号	事 項	農業 本部	作開	遺伝	生シ	農環	病虫
8	研究成果発表会・企業等向けセミナーの開催件数(H27)	2	1	0	0	3	0
8	研究成果発表会・企業等向けセミナーへの延べ参加者数 (H27)	426	35	0	0	178	0
8	研究会等の開催件数 (H27)	0	1	0	2	0	0
8	研究会等への延べ参加者数 (H27)	0	20	0	150	0	0
10	展示会等への出展件数 (H27)	4	2	0	0	0	1
27	研究報告書等の発行種類数 (H27)	3	0	0	0	0	0
27	技術資料等の発行種類数 (H27)	1	2	1	0	1	0
9	学会やシンポジウム等での発表件数(H27)	4	18	2	19	8	12
9	学術誌等への投稿論文数(H27)	14	24	0	34	42	24
10	普及組織との連絡会議等開催件数(H27)	45	3	0	0	0	1
17	技術相談件数 (H27)	21	55	5	31	87	41
17	技術指導件数 (H27)	97	6	9	9	7	94
17	うち複数分野の研究者による実施件数 (H27)	0	0	0	0	0	0
16	技術審査件数 (H27)	0	0	40	4	3	2
19	依頼試験実施件数 (H27)	0	0	211	0	0	0
20	設備使用の件数 (H27)	0	0	0	23	0	0
22	研修会・講習会等の開催件数 (H27)	4	0	0	6	0	8

22	研修会・講習会等の延べ参加者数 (H27)	338	0	0	445	0	185
22	研修者の延べ受入人数 (H27)	7	2	26	137	62	78
45	視察者・見学者の受入件数 (H27)	61	0	0	0	0	0
45	視察者・見学者の延べ受入人数 (H27)	1141	0	0	0	0	0
45	道民向けイベントの開催件数 (H27)	1	0	0	0	0	0
39	道民向けイベントの延べ参加者数 (H27)	709	0	0	0	0	0
45	国際協力事業等への協力件数 (H27)	1	0	4	2	0	3
27	ホームページ更新件数 (H27)	62	12	1	0	6	77
31	道民意見把握調査の回答数 (H27)	357	-	-	-	-	-
49	グリーン購入の金額 (千円) (H27)	3670	-	-	-	-	-

平成 27 年度 農業研究本部中央農業試験場年報

平成 28 年 10 月 5 日

地方独立行政法人

北海道立総合研究機構 農業研究本部

中央農業試験場 発行

〒069-1395 北海道夕張郡長沼町東6線北15号

Tel 0123-89-2001
